

用子女
 書科教皮洋東
 編造米岸峯

4b
 220
 大15

教
 42
 2000

43028

教科書文庫

4
220
42-1926
20000 65454

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
 Y
 M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

教科書文庫

4

220

42-1926

2000065454

文部省檢定濟

大正十五年一月廿六日 高等女學校歷史教科用科

東京高等師範學校教授

峯岸米造編

女子用

東洋史教科書



広島大学図書

2000065454



東京

光風館藏版

46
220
大15



王カヨシア
(畫色彩るたれが畫に旒のトツベチ)

はしがき

本書は、文部省の改定教授要目に準據し、支那を中心とせる東方亞細亞諸國の歴史を略述したるものにて、その目的が高等女學校の教科用にあること、いふまでもなし。

抑、東洋史の教科は、我が國文化の源流を知らしめ、また邦國の治亂興亡に關する形式的知識を與ふること、甚だ大なるものあり。然るに、中等程度の諸學校に於て、これを教授するに當り、生徒をしてその學習に甚しく困難を感じしめ、ひいて本科の課業を厭はしむるが如き傾向あるは、教育上、頗る遺憾とする所なり。

惟ふに、東洋史學習の困難なるは、一には、東洋史そのものの性質にも由ることなるべけれど、一には、その教科書の罪も、また甚だ大ならざるを得ず。蓋し、從來の東洋史教科書は、あまりに學究的なり。普通教育上、さまで必要

もなき支那史上の史的名辭を、その儘に記載するが如き、東西交渉の蹟を知らしめんとして、専門學者も尙難しとする西域諸國その他の關係史實を過度に重んずるが如き、即ちその例なり。これ豈普通教育に於ける歴史教授の本旨に合するものといふべけんや。

編者もと非才、ふかく在來の教科書の通弊に鑑み、敢て本書の述作を試みたれども、志、徒らに大にして、事、意の如くならず、成果の殆ど觀るべきものあるなし。庶幾くは、大方の示教を得て、益、本書の改良整備をはからんことを。

大正七年八月

編者しるす

例言

- 一 敘述、簡明にして散漫ならず、記事、趣味ありて乾燥ならざるは、歴史教科書に於て、最も必要なる條件なり。これ編者が、本書の述作上、力めて簡潔平明を期するとともに、大いにその文辭等に注意したる所以なり。
- 一 歴史教授に於て、繪畫は、實に大切なる材料なり。蓋し、これに由りて、確實なる理會を助け、興味を喚起することを得ればなり。故に、本書には、考據正確なる多くの圖畫を挿入し、以て歴史教授の要求を満たさんことを力めたり。
- 一 紀年は、すべて皇紀を用ひ、その左側に西紀を横書したり。而して、紀元前なるは、一一、前何年と記したれど、紀元後なるは、すべて略して、その數字のみを記したり。
- 一 各篇末に概括及び年表を載せたるは、既得の知識の復習整理に充て、か

ねて、時代と史實との關係を明かならしめんためなり。

一系圖は、特に重要なものを選び、必要に應じて、これを分載したり。その輪廓外に記せる數字は、その王朝の始終の年を示す。

大正七年八月

修正發行について

世界大戦役が世界に及ぼした影響の甚大なるは、今更、くどくしく申述べる必要はありますまいが、近數年の間に、我が邦の國際的地位と、我が國民の文化的生活とに驚くべき變化と進歩とを見たことは、誠に顯著の事實であります。されば、今日の女子教育、別してその歴史科に於ては、いかにしても舊套を守つてゐるわけにはまゐりません。本書の根本的修正は、全くやむべからざる時勢の要求に出たものであります。どうか、大方諸賢の清鑒を得て、この上ながら、十分の御指教をいたゞきたいものと願つて居る次第であります。

大正十四年七月

著者しるす

女子用東洋史教科書の序文またははじめの文章が、歴史的な背景や編者の意図を説明している。文章は縦書きで、読みやすいように構成されている。

女子用 東洋史教科書

目次

第一篇上	古	……………	………	自
第一章	上代の支那	夏殷周の三代	……………	一
第二章	春秋戦國	……………	……………	七
第三章	孔子	……………	……………	二二
第四章	秦の統一	……………	……………	三五
第五章	漢の統一	……………	……………	五九
第六章	武帝の功業	朝鮮の興亡	……………	二四
第七章	東漢	西域との交通	……………	三七

至 四一頁

第八章 上代の印度 佛教の東流……………三三

第九章 三國……………三六

概括……………四三

年表 (一)

第二篇中 古……………(自四四至四五)

第一章 晉 南北朝 隋の統一……………四五

第二章 唐の興亡……………五三

第三章 唐の制度・文物 宗教……………五六

第四章 五代 宋及び遼……………六三

第五章 南宋及び金 宋の文化……………六六

概括……………七四

年表 (二)

第三篇近 古……………(自七七至一〇四)

第一章 蒙古の勃興……………七七

第二章 世祖の業 東西の交通……………八一

第三章 元の衰亡 明の統一 チムール……………八五

第四章 明の衰運 朝鮮の建國 滿洲の興起……………九二

第五章 モゴル帝國 ポルトガル・オランダ等の東洋
 経路……………九六

概括……………一〇四

年表 (三)

第四篇近 世……………(自一〇五至一三六)

第一章 清の統一……………一〇五

第二章 聖祖 高宗 清露の交渉……………一〇七

第三章	鴉片戰役	二二
第四章	長髮賊 英佛軍の侵入	二五
第五章	ロシアの滿洲及び中央アジア經略	二九
第六章	フランスの印度支那經略 清佛戰爭	三四
第七章	清國と歐米列強との關係 清の滅亡 支那	三七
第八章	共和國の建設	三三
支那の近狀		三六
概括		三六

年表 (四)

女子用 東洋史教科書 目次終

女子用 東洋史教科書

峯岸米造 著

第一篇 上古

第一章 上代の支那 夏・殷・周の三代

支那の起り

支那は、世界の最も古い國の一つである。その基をひらいた漢族は、今よりおよそ五千餘年前に、西北方から黄河の流域にうつつて來た種族で、かれらは、先住種族苗と争ひ、これを南方におひやつて、北支那の平原を占め、そこに多

世界最古國の一

貴州省に於ける現今の苗族

漢族と苗族

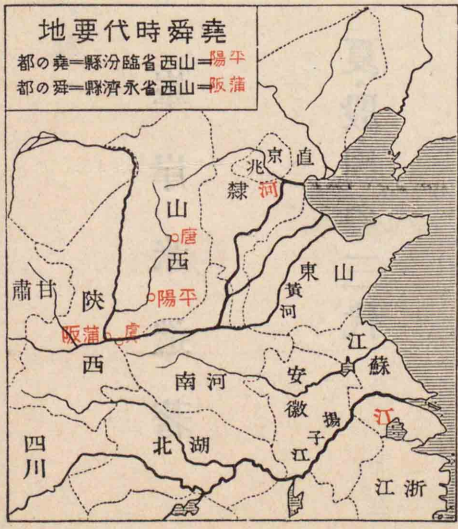


黃帝の一統

當時の開化

くの部落をなしてゐた。傳へによれば、黃帝といふ一人の英雄が出て、それらの諸部落、その他をしたがへ、はじめて一統の業をなしたといふことである。そのころ、漢族は、既に耕作、機械の業をいとなみ、市場を設けて、貨物を交易し、また文字や曆や算法などをも、發明使用してゐたといはれてゐる。

◇漢族と苗族 漢族は、顔面が比較的長く、顴骨高く、髪黒く、ひげ少く、皮膚は、おほかた黄色を帯びてゐる。近世以前に於ける東洋史の大部分は、ほとんど全くこの種族を中心としたものである。また苗族は、印度支那種で、今なほ支那の南部に居る。身の長ひくく、皮膚は黄色を帯び、ひげは少く、多くは山間の沃地に住み、牛を使役して、農耕に従



ひ、草ぶきの小屋に起臥し、婦人は刺繡をほどこしたゆるやかな衣服を身にまとい、跣足である。

堯舜の世

堯舜の世 黃帝の後、堯舜といふ二人の名高い天子が、相ついて出た。その頃は、今からおよそ四千餘年のむかしである。堯舜は、いづれもよく天下を治めて、ますます漢族の勢をたかめ、且、一層その文明をすすめて、國本をかたくした。

堯の孝悌

舜は、もと身分のいやしい人であつたが、父母につかへて至孝で、わがまゝな異母弟をさへ

堯の即位 前六〇〇年頃
舜の即位 前二三〇〇年頃

よく愛し、且、熱心、家業をはげんで、徳望が日に高くまつた。堯は、これを聞いて、その女を舜にめあはせ、擧げ用ひて、政を攝せしめ、遂にこれに位をゆづつた。

夏の世

堯舜の時、黄河が年々あふれて、たいへんな洪水があつた。舜は、これを治めることを禹に命じた。禹は、非常な決心を以て、これにあたり、つぶさに辛苦をなめて、遂にこの大事業を成しとげた。そ

禹の治水

堯舜の治

禹の即位と國號のはじめ

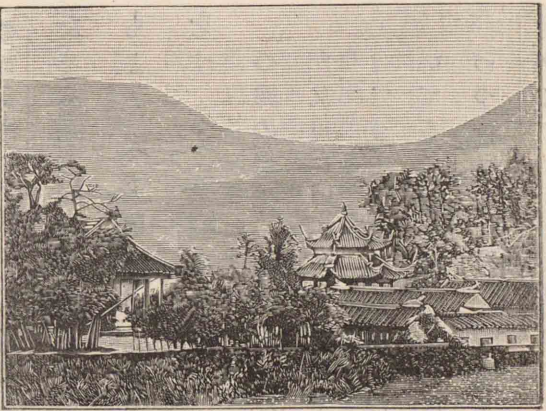
王位世襲

桀王の無道

禹の廟
廟はわが
神社のや
うなもの
である

湯王の善政

紂王の無道



るあに縣興紹省江浙

殷の世

湯は天子となつて、民をあはれみ、善政をしき、殷の世六百餘年の基をはじめたが、最後の紂王は、暴政をほどこして、大いに民

なされた。
頃、遂に湯
民をくるしめたので、前1100年
色にふけり、暴悪をきはめ、甚しく人
相つたへて、桀王に至つた。桀王は、酒
の間、その子孫が、代々、王位にのぼり、
を推して王とし、爾後、およそ四百年
みな禹の徳に服し、その死後、禹の子
みな禹の徳に服し、その死後、禹の子

前1540頃
夏 (七代 四百餘年)
禹¹ 啓² 桀¹⁷
前1100頃

殷の滅亡

周の武王の即位



地要代三周殷夏
都の夏=縣夏省西山-邑安
都の初め殷=縣邱南省南河-亳
都の後殷=縣師僂省南河-紂

心を失つた。その頃、西方の大諸侯に姫發といふものがあつて、遂に兵を起して、紂王をうちほろぼし、これに代つて、王位にのぼつた。これが即ち周の武王で、その即位は、前1120年頃の事である。

◇禪讓放伐 堯舜の禪讓と湯武の放伐とは、ともにながく支那の國體に大なる影響を及ぼした重大事で、爾後、しばしば王家の革命がある。これは實に萬世一系の帝室をいたゞいてゐるわが國體と、大いにそのおもむきを異にするところである。

周の都
封建制度

周の文明

周公成王を
輔佐する圖

諸侯の專横
異種族の侵入
洛邑遷都

周の世 武王は、都を鎬京後の長安、今の陝西省長安縣に
さだめ、一族・功臣を封じて、諸侯となし、公
侯・伯・子・男の五爵ゴシヤクを設けた。王弟周公は、賢
明の人で、才智藝能ケイネンに富み、武王の子成王
をたすけて、よく天下を治め、大いに制度
禮樂レイガクをととのへた。この頃が、周の最も盛
んな時で、漢族の文化は、はじめで燦然サンゼンた
る光をはなつた。

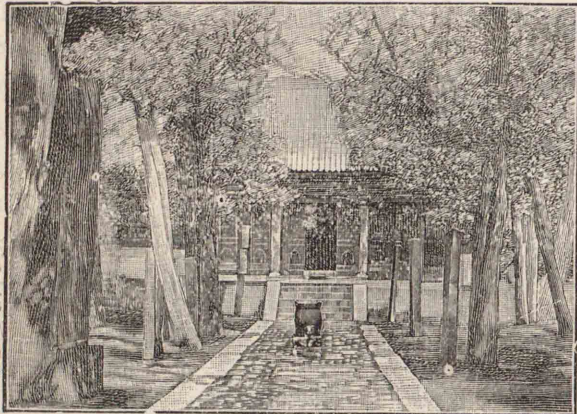
周室の東遷 成王の後、久しからずして、
周室の威力キリキョクは、年々におとろへ、諸侯は、日
日に專横センコウになつた。しかのみならず、異種
族が、またしきりに西方から迫オシつて來た
ので、周室は、前一一〇年、東の方洛邑後の洛陽



不溪東は堂祠氏武るあで書の内室石堂祠氏武は圖のこ
るあに下山翟武南東の縣詳嘉省東山でのもたし造築に
るあで公周はるけ跪中人三の左のそ 王成はるて立に上臺の央中
詳不皆はるのゐてつ立に右の王成

春秋の世

周公の廟



るあに方東外城縣阜曲省東山

第二章 春秋・戦國

今今の洛陽河南省にうつるのやむなきに至つた。これが即ち周室の東遷トウセンである。

春秋の世

周室東遷の後、およそ五

十年たつて、いはゆる春秋シュンチュウの世當時

は、孔子が書いた「春秋」といふ書物（當時は、孔子が書いた「春秋」といふ書物にのせて）と

なつた。春秋の世は、前六二二年（前六二二年）から一

八〇年（前八〇年）に至るまで、前後およそ二百四

十餘年の間である。その間、王室はま

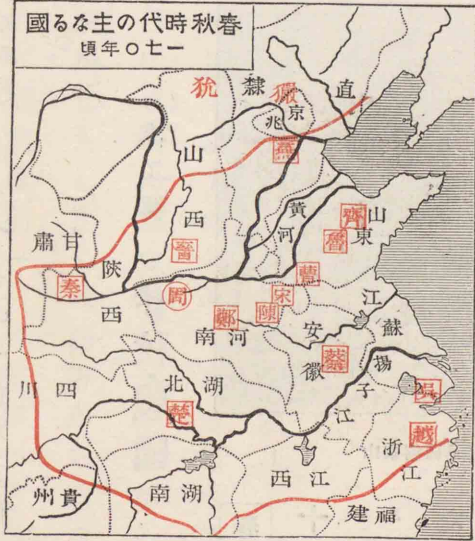
すますおとろへて、諸侯は、その威令

に服せず、異種族は、またいよく強

くなつて、往々、畿内（王室の直轄地）に入りこ

覇者
桓公と管仲

むものなどもあつた。この時にあつて、諸侯の中に、尊王攘夷となへる有力者があらはれ、諸侯をつらねて、その長となり、王命をかりて、天下に號令した。覇者といふのが即ちそれで、前後あはせて五人あるが故に、名づけて五覇といつてゐる。五覇の中、齊（侯爵）の桓公は、わが神武天皇と同時代の人で、名臣管仲のたすけにより、最も盛んな業をなしたので有名である。



◇五覇 五覇は、通例、齊の桓公、宋の襄公、晋の文公、秦の穆公、楚の荘王をかぞへるが、宋の襄公のかはりに、越王勾踐をあげるものがある。また齊の桓公、晋の文公、楚の莊王、吳王夫差、越王勾踐とするものもあつて必ずしも一定してゐる。

5.

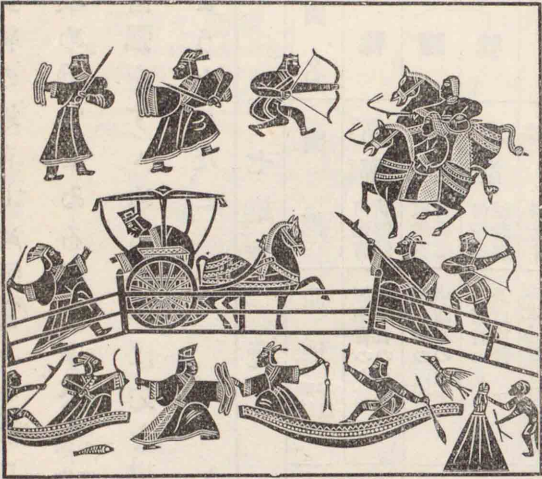
戦國の時

春秋時代には、諸侯は、みなきそつて、國を富ませ、兵を強くすることをつとめ、戦争と外交とで日をおくつた。かくして、だんだん弱は強にあはせられ小はまた大にのまれて、結局、秦楚燕

弱肉強食

戦國の時

上古の交戦
漢代の石刻



上陸は部上、上橋は部中、水上は戦交を示す

の尊王を口にするものもなくなつた。

齊、趙、韓、魏の七雄國となつた。七雄國は、それ〴〵四方に割據し、およそ二百年の間、相たがひに攻め争つて、いはゆる戦國の大亂世を現出し、後には、みよ王號を用ひ、周室は、あれども無きが如きありさまとなり、また一人

秦の位置

孝公の業

秦對六國

蘇秦の合従策

秦の強大 七雄國の中、最も西方に位してゐたのは、秦である。秦は、要害の地をしめ、國富み、その兵も強かつたが、他の國々が、しきりに攻め争つてゐる間に、孝公(孝安天皇)は、商鞅(シヤウカン)を用ひて、ますますその富強をすゝめ、しだいに力を東方にのばして、まさに列國を壓倒(アツクダス)しようとした。

秦の一統

燕趙・韓魏・齊楚

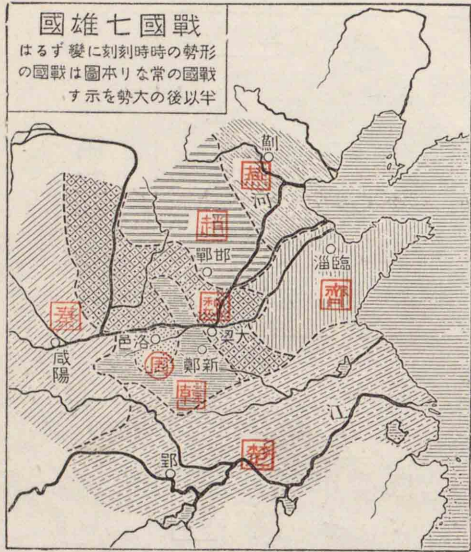
の六國は、いづれも、その力が秦に當るに足らぬのを知り、皆これをおそれた。たまたま、蘇秦(ソクシン)といふ雄辯な策士(サクシ)があらはれて、はやくもこの形勢を察し、順次、六國に説き、相ともに合従(カツソウ)し

七雄國一覽		國名	國都	領地	滅亡の年代
秦	咸陽	陝西省咸陽縣	陝西・甘肅・四川三省	戰國の半以後	四〇〇
齊	臨淄	山東省臨淄縣	山東省、直隸省の西部		四〇四
燕	薊	今の北京の北	京兆地方、直隸省の北部及び奉天省		四二九
楚	郢	湖北省江陵縣	湖北、湖南、江西、江蘇、安徽、河南省の南部、安徽省の大部		四〇六
魏	大梁	河南省開封縣	河南省の北部及び東部		四〇六
趙	邯鄲	直隸省邯鄲縣	直隸省の西部		四三三
韓	新鄭	河南省新鄭縣	河南省の中部		四三三

張儀の連衡策
六國の無方針

秦の強大

秦の一統



七國雄圖
はるす 變に刻刻時時の勢形の國戰は圖中りな常の國戰す示を勢大の後以半

て、秦に對抗(ダイカウ)することとしたが、秦は、張儀(チャウギ)を用ひて、連衡(レンカウ)のはかりごとをめぐらし、かへつて六國を分離(フンリ)して、それらに秦に服従させようとした。その後、六國は、或は合従し、或は連衡し、また、たがひに攻めあつて、全く一定した方針がな

く、日にくみづから疲弊(ヒカイ)したので、あつて、前460頃、**周** (三代 約六百年)
武王 1 成王 2 平王 13 威烈王 32 赧王 37
405

た、かゝる間に、秦は、ますますその實力を加へゆき、まづ周をほろぼし、ついで王政(ウエイ)に至つて、ことごとく六國を攻めほろぼし、

前 475 年 (孝靈天皇、御代) 全く天下を一統した。

合従連衡

従は縦で、南北のことである。六國の位置は、縦に南北につら

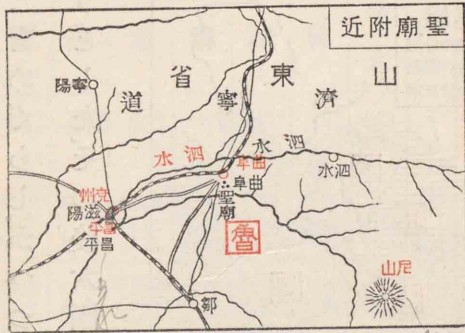
なつてゐるから、六國が相合して同盟をむすぶのを合従といふのである。また衡は横で、東西を意味する。六國と秦とは、東西に列するが故に、六國がそれ／＼秦に連和するのを連衡といふのである。

第三章 孔子

周以前の教育

周の大學と小學

春秋戰國時代の世の有様



孔子とその教

周の學制 教育は堯舜の時既に力をこれに用ひ、夏殷の世には、學校も設けられた。周に至り、その制がますます備つて、大學も小學も、ほととのひ、大學では、禮樂射御書數の六藝を授け、主として、おのれを修め、人を治める道を學ばせ、小學では、簡易な學科や、禮儀作法などを教へた。

春秋戰國の亂世には、もろくの制度が、全くくづ



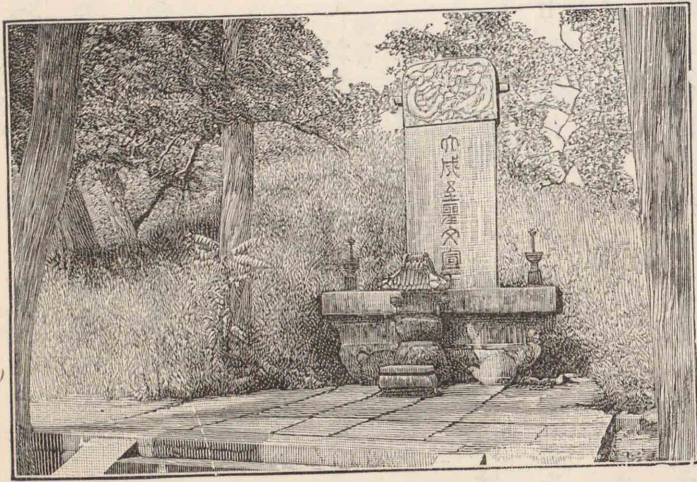
孔子の像

この像は、山東省曲阜縣聖廟大成殿に安置してある。その製作の年代については、正確な文獻の徵すべきものがないから、今、これをたしかに知ることとはできないが東魏の興和年中今からおよそ千三百八十年前に作つたものだといはれてゐる。

學者論客多く出づ

孔子の墓

孔子出づ



山東省曲阜縣城門北の方に當り廣大の墓の孔子なかつしのもて大廣り當に方北の門城縣阜曲省東山
るゐてつげしてへ交を枝が樹柏老の古千はにこそるあが地

れて、政府の取締も、社會の制裁も、ほとんど皆行はれなくなつたが、

列國が相きそつて人材を招いたのと、思想・言論が自由になつたのとで、人智は、かへつて大いに活動し、學者や論客が、雲の如くにあらはれて、たがひに世をすくひ、身を立てることをつとめた。その中で、最も名高いのが孔子である。孔子は、その名を丘といひ、字を仲尼と稱した。一〇九年（綏靖天皇、魯（今の山東）といふ小國に生まれ、年長じて、學徳、ともに高く、仁を以て、身を修め、國を治める本とすべきことを教へ、

年七十四で歿した。その教は、即ちいはゆる儒教で、孔子の孫子思をへて、孟子に傳はり、ながく支那政教の基となり、ひいては東洋道德の一大本をなすに至つた。

◇孟母の庭訓 孟子は、その名を軻といひ、戰國時代の中頃の人である。母は、世にまれな賢婦人で、ふかく心を孟子の教育に用ひ、墓地の附近の住居から、市にうつり、さらに學校の傍にひきうつつた。孟母は、またかつて、孟子が讀書を中廢したのをいましめて、その織つてゐた機をたちきり、中途で業を廢することの忌むべきをさとらせたのであつた。

文字の變遷

支那の文字には、黃帝以來、幾多のうつりかはりがあり、地方によつても、また多少その書體を異にしたやうであるが、すべてこれを古文といふのである。周の時、古文よりも、やゝ簡易な篆書を發明し、秦の天下一統後、またこれを改良して、隸書をつくり、その後、なほ一層簡易な楷行草の三體が起つた。また上古の書物は、竹

古文
篆書と隸書

楷行草

書物と書寫の料

木の簡をあみ、または絹などを用ひて作つた卷物であつた。その書寫の法は、鐵筆を以て、これに字をきざみつけたり、或は漆の液を用ひて、書きしるしたりしたのであつた。秦の時にはじめて毛筆が精製され、後には樹皮や布の類から紙をつくることの發明もあつて、ますます多く文化の進歩を助けた。

草書	行書	楷書	隸書	篆書	古文
𠄎	日	日	日	日	𠄎
𠄎	月	月	月	月	𠄎
𠄎	山	山	山	山	𠄎
𠄎	水	水	水	水	𠄎
𠄎	鹿	鹿	鹿	鹿	𠄎
𠄎	馬	馬	馬	馬	𠄎
𠄎	魚	魚	魚	魚	𠄎
𠄎	鳥	鳥	鳥	鳥	𠄎

第四章 秦の統一

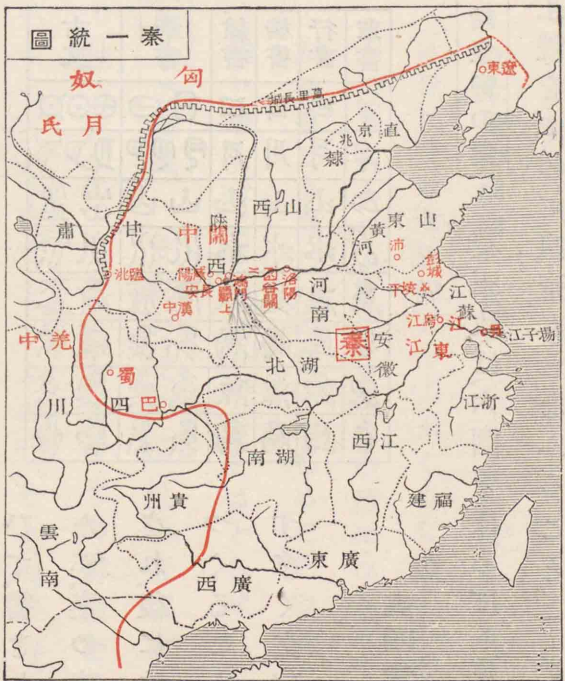
始皇帝の業 秦王政は、六國をほろぼして、天子となり、これまでの王號をやめて、皇帝となふることとし、みづから稱して、始皇帝と號し、二世三世とかぞへて、萬世に傳へることを期した。帝は、謀臣李斯の言をきき、また周代封建の弊をもかんがへ、地方制度に大改革

始皇帝

郡縣制

外征

支那國名の起源



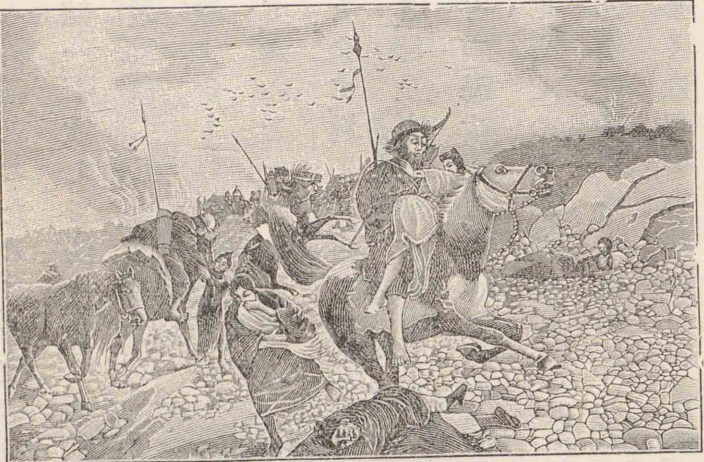
會有的大統一國となつて、その威勢が四鄰にふるつた。かの支那といふ國名も、そのもととは、この秦の名から出たので、諸外國が秦をな

を加へて、新たに郡縣の制をたて、大いに力を中央集權にそゝいだ。この頃、北方に匈奴といふ蠻民があつて、常に秦の北邊にあだした。

帝は、大兵を發して、これを撃ちしりぞけ、且北邊に萬里の長城を増築して、これにそなへ、さらに今の兩廣、安南地方までをも征服した。こゝに至つて、秦の領土は、周の二倍にものほり、秦は、實に未

まつて、チナと呼んだのに基づくのだといふことである。

匈奴



大土木

工事を起して、國都咸陽咸陽 陝西省

秦の滅亡 始皇帝は、またさかんに大を壯麗にし、またしばしば地方をま

◆秦の統一制度 秦では、中央政府に丞相(庶政を統ぶ)、太尉(軍事を統ぶ)、御史大夫(丞相をたすけて目付役にあたる)の三大官を置き、地方は、これを三十六の郡に分け、その主なる官吏の任免は、全く中央政府でつかさどつて、統一の實を擧げることとした。

◇匈奴 匈奴は、トルコ種で、蒙古地方に遊牧し、水草をあうて轉居した。未開野蠻ではあるが、騎馬に長じ、射術をよくし、戰爭に強かつた。

巡遊

人民の苦しみ

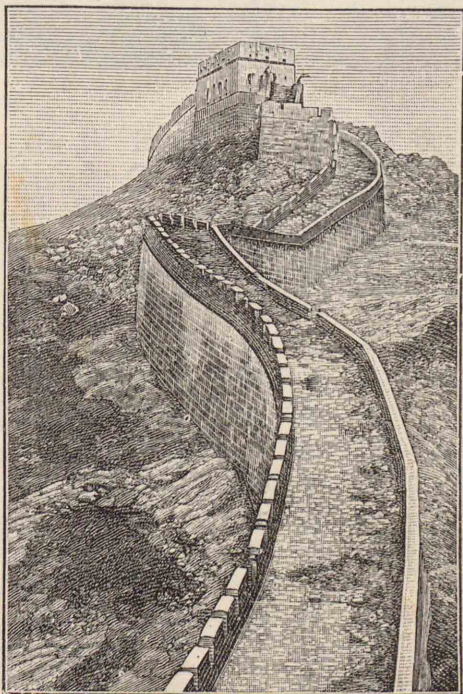
法令嚴重

萬里の長城の一部

焚書坑儒

群雄蜂起

はつて、ひろくその威光を天下に示しなどした。人民は、これらの事と外征とのために、勞役につかれ、重税にくるしんだが、帝は、極度に統一を欲して、法令を嚴重にし、且、新政を非難するものをのぞいて、人心を一にしようとして、遂には書を焚き、諸生を坑殺するなどの暴政をもあへてした。そのため、だんだん秦をうらむものが多くなり、帝の死後、ほとんどなく、項籍(羽)劉邦、その他の群雄が四方に蜂起し、天下は、また大



長城の築造に著手したのは、戦國の時である。秦以後、幾度かこれを修築して、現今に至つた。修築材料は、煉瓦または石で、その諸處に關門を設けてある。長城の上は、幅が廣くて、通路をなし、緩急相應じて、赴き投げるに都合よくしてある。

項籍と劉邦

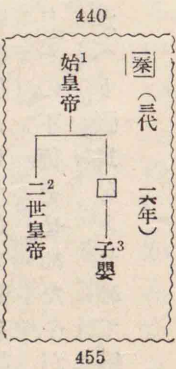
秦の滅亡

項籍劉邦の争

劉邦

劉邦の即位

いにみだれた。やがて、項籍と劉邦と、相ともに秦を攻め、籍、殊によく戦つて、しばし秦の兵を破つたが、邦は、たくみに籍にさきだつて、秦の國都にせまつた。かくて、秦は、萬世どころか、わづかに三世で、四五五年(孝元天皇の御代、始皇帝の死後僅かに四年)に、劉邦にほろぼされた。



第五章 漢の統一



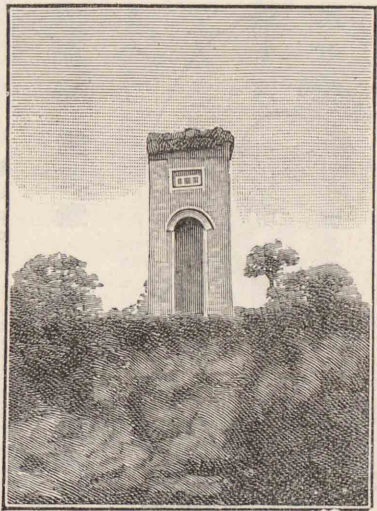
四五九年(孝元天皇の御代)遂にこれに克つて、帝位にのぼつた。これが即ち

漢の一統

項籍は、劉邦の功をねたみ、鴻門(咸陽の東、陝西省咸陽縣)に陣して、これを撃たうとし、志を果さなかつたので、爾後、數年の間、邦と天下を争つた。邦は、よく蕭何、張良、韓信の三傑を用ひて、籍にあた

漢の高祖である。

◇鴻門の會 劉邦は、項籍がおのれをうたうとしてゐると聞いて、張良以下を従へ、鴻門に至つて、籍に謝した。



鴻門の舊蹟

下を従へ、鴻門に至つて、籍に謝した。籍は、邦をとめて、宴を張り、謀臣范増等をして、その席に列せしめたが、宴たけなはなる頃、増は、しばしば籍にめくばせして、邦をうつことをうながし、遂には人をして、劍舞にことよせて、邦をうたせようとまでした。この時、張良は、形勢が、刻一刻、危急にせまつて來たのを見、出でて、勇士樊噲を招いた。噲、奮然として起ち、劍を帶び、盾を擁して入り、目をいからして、籍をにらみ、且、その不徳をせめた。やがて、邦は、厠にゆくといふ稱し、噲を召して、ともににげかへり、張良をとめて、籍に謝せしめ、からうじて大難をのがれた。

漢初の制度

高祖は、都を長安(周の鎬京)にさだめ、大體、秦の制にならつ

中央政府の組織
封建郡縣兩制の併用

て、中央政府を組織したが、秦が郡縣によつて孤立したのを思ひ、また周が封建のために尾大ふるはぬ弊におちいつたのにかんがみ、封建郡縣の兩制度をあはせ用ひた。即ち高祖は、子弟、同姓を王に封じて、帝室の藩屏となし、その間に直轄の郡をまじへ置き、郡守をして、これを治めさせ、且、かたく異姓のもの、王たることを禁じた。

◇高祖と三傑 高祖が天下を平定して、皇帝の位に即き、群臣を集めて、酒宴を開いた時、帝は、群臣に向つて、「朕が天下を平定したのは、何によるかとたづねた。或者が「陛下が天下を取られたのは、人をして城をおとさせたり、地を略させたりした時には、必ずその者にこれを與へ、天下の人と共に利益を同じくなされたからです。これに反して、項羽は、功あるものは、これを害し、賢者をば、これを疑ひ、また戦が勝つても、功ある人に賞を與へず、地を取つても、人に利を與へなかつたので、遂に天下を失つたのです」と答へた。帝は、これをきいて、「卿等は、その一を知つて、未だその二を知らざるものである。帷幄の中にあつて、謀をめぐらし、千里の遠きにゐても、勝利をあやま

らなかつた參謀の智略に至つては、朕は、到底張良に及ばない。また國家を治め、百姓を安んじ、兵糧を十分にたくはへて、それを絶やさぬ様にする。治民・行政の手腕に至つては、朕は、到底蕭何に及ばない。また百萬の大軍をひきぬ、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取る。將帥の才に至つては、朕は、到底韓信に及ばない。この張良・蕭何・韓信の三人は、皆天下の人傑であるが、朕は、これを用ひたために、天下を取ることが出来たのである。しかるに、項羽は、一人の范増をさへ用ひることが出来なかつた。これ項羽が朕のためにほろぼされた所以である」といつたので、群臣は、いづれも悦び服した。

呂后の人物
呂后の專横
諸呂誅に伏す
同姓諸王の強勢

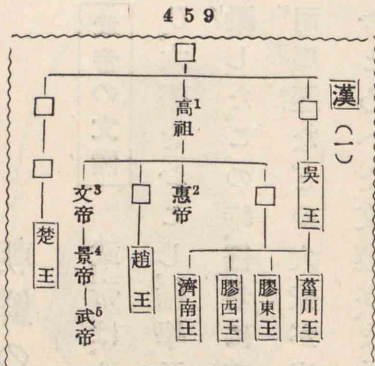
呂氏の亂 高祖の皇后呂氏は、人となり、才略に富み、高祖の死後、政を専らにし、遂にはその禁をも破つて、おのれの一族を王としたりなどし、ほとんど漢の天下を奪はうとまでした。しかるに、呂后は、ほどなく死んで、諸王及びその他の人々の力により、諸呂は、みな誅せられた。

吳楚七國の亂 その後、諸王の實力が、だん／＼、増して、つひには朝廷

景帝の對策

吳楚七國の叛

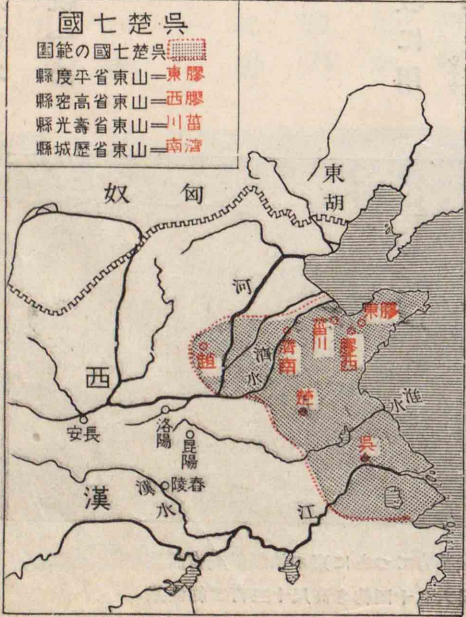
亂後の處置



の命令をさへ奉じないものがあつたので、景帝(第四代)は、事あるごとに、その領土をけつづつて、諸王の勢力を減殺することをはかつた。吳楚以下の七國、これをらみ、五〇七年(開化天皇十一年)遂に相應じて叛旗をひるがへし、漢室も、一時、危急の淵にのぞんだのであつたが、か

らうじて、これを

を平げて、事なきを得た。爾後、諸王は、皆都にとゞまり、その領土は、朝廷の官吏が、ゆいてこれを治めることとなり、景帝の子武帝の時、さらに大國



政權統一の實學
がる

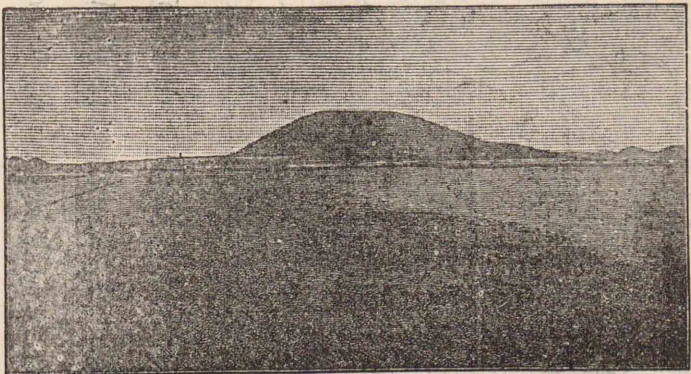
を小分して、ますくその權力をそ
いだので、漢は、はじめて政權統一の
實を擧げることが出来た。

第六章 武帝の功業

朝鮮の興亡

武帝の文勲

武帝は、心を文教に用
ひ、大學をおこし、儒學及び文學を奨
勵した。この時、儒者に董仲舒、文人に
司馬遷などの大家が出て、秦火以來
おとろへた文運が、またおこつた。



しなを狀臺方てつあに東の治縣陽咸省西陝
るあ尺六五十四約さ高尺十三百二約邊基

◇司馬遷と史記 司馬遷は、世に名高い「史記」の著者である。史記は、太古か
ら漢の武帝に至るまでの紀傳體歴史で、この後、ながく支那正史の手本と

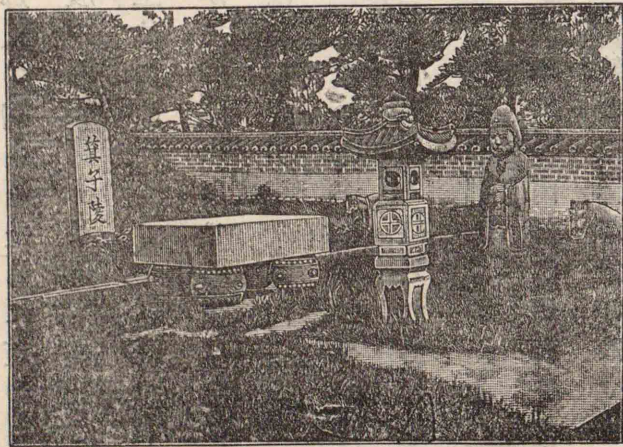
なつた。

武帝の武功



武帝の功業は、外征に於て、さらに一層いぢるしい
ものがある。帝は、有爲の才を懐いて、功
名の心
に富み、
漢初の
ゆたか
な國力

を利用して、しきりに兵を國外に動
かし、匈奴その他の諸外國を伐つて、
國威を四方にかゝやかした。その結
果、漢の領土は、東、朝鮮から、西、天山南
路に及び、北、内蒙古から、南、安南に至



るあに中林松麓西の臺密乙墳平鮮朝

武帝の人物

武帝

箕子陵

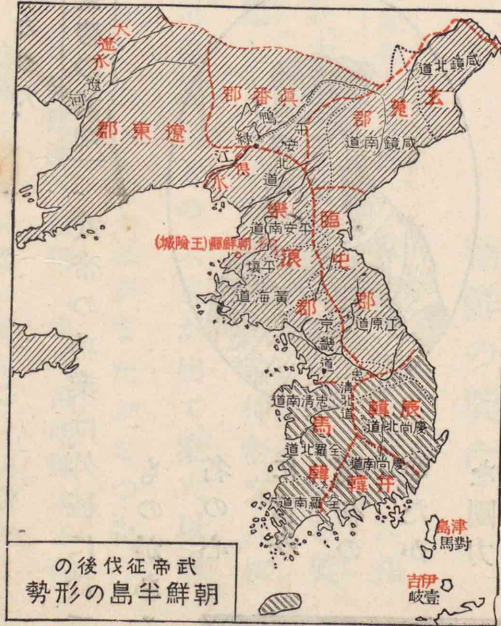
外征

漢の領土

箕子の建國

朝鮮の變遷 朝鮮は周のはじめに、殷の王族箕子が、王險(後の平壤)に據つてたてた國で、箕子の子孫が、代々、王位にのぼつて、半島の北部から遼東までの地をたもつてゐた。しかるに、漢のはじめ頃になつて、朝鮮は、支那人衛滿(ウイマン)といふものに奪はれ、衛氏が箕氏に代つて王となつたが、衛滿の孫の時、武帝にほろぼされ、その地は、漢の四郡となつた。その頃、半島の南部は、馬韓、弁韓、辰韓の三韓に分れ、はやくから、わが日本と交通してゐたので、わが國及び三韓と漢との交通も、またしたが

衛滿と朝鮮
武帝征服の結果
日漢の關係



武帝征服の後、朝鮮半島の形勢

つて開けた。

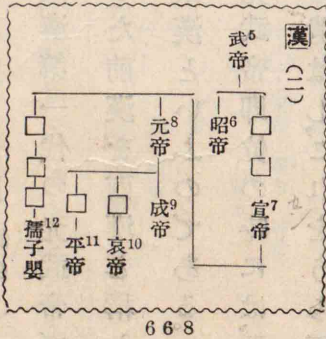
財政困難

十二年前
伊勢の皇
大神宮起る

宦官外戚の専横
王莽の篡奪

王莽の政治

漢の末路 武帝の世は、たびくの外征や土木工事などのために、遂に國庫をかたむけつくして、財政、困難を極め、課税が日々に重くなつたので、人民は、甚しく困弊し、盜賊が、所在に起り、天下は、漸くおだやかでなくなつた。幸にも、帝の後二代、明君が相ついて出て、心を民力の休養に用ひ、天下は、しばらく事なきを得た。しかるに、ほどなく宦官と外戚とが、こもく、權を専らにし、六十八年（垂仁天皇）、漢は、遂に外戚王莽のために、その位を奪はれて、一時、中絶した。



第七章 東漢 西域との交通

漢室再興

王莽は、漢の帝位を奪つて、國を新と號したが、その法令

群雄蜂起

劉秀の漢室再興

光武帝

西漢と東漢

光武帝の業

明帝章帝の治



が常に變じて定まりなく、その上、しきりに重税を課したので、たちまち人心を失ひ、群雄蜂起の亂世となつた。かくて、王莽は、在位わずか十五年でほろぼされ、六八五年（垂仁天皇、の御代）漢の同族劉秀が、帝位にのぼつて、漢室を再興し、洛陽（洛邑）に都した。これが後漢第一代の光武帝である。長安に都した前漢を西漢と稱し、これから後を東漢といふのである。

東漢の初世

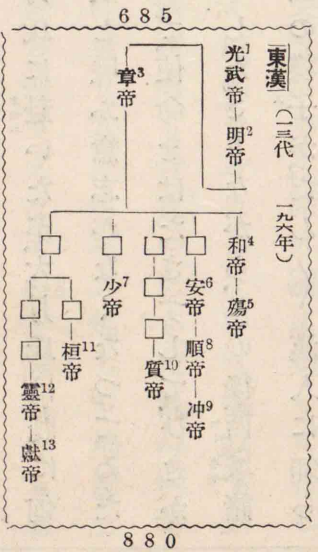
光武帝即位の時には、群雄が、なほ各地に割據してゐたが、帝は、諸將を遣はし、これをうち平げて、天下を一統し、爾後、専ら平和主義をとつて、力を内治に用ひ、大學をおこし、禮樂を修め、節義を奨励した。帝の後には、子明帝、孫章帝が、相ついで立ち、いづれもよく父祖の業をまもつて、儒教、文學を上げまし、光武以下三代六十餘年の太平を致した。

外戚の専恣

宦官の跋扈

東漢の末路

その後、代々の皇帝は、多く幼年で位にのぼり、またはやく世を去つたので、おのづから外戚専恣の源をなした。諸帝の中には、宦官の力をかりて、外戚の専横をおさへたものもあつたが、その結果は、かへつて宦官の權力を増すこととなり、宦官は、遂にことごとく朝廷の諸政をその手ににぎり、また多く節義の士をのぞいて、ますます跋扈を極めた。かくして、東漢の末路は、清流全くかれて、濁流、天地をひたすありさまとなつた。



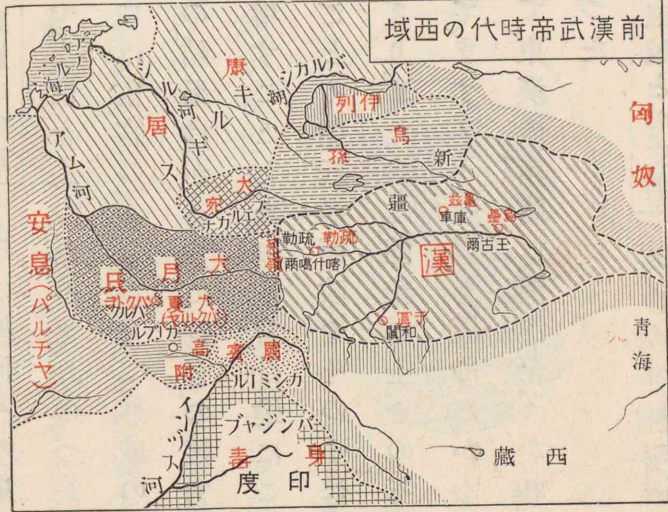
西域との交通

はじめ、河西（黄河以西の地）の地に月氏（トルコ種、或はチ）といふ種族が據つてゐた。この種族は、西漢のはじめに、匈奴に撃たれ、西に走つて、アム河北の地に土著し、そこに大月氏國をたて、しだい

大月氏の建國

張騫大月氏に使

漢と西域との關係



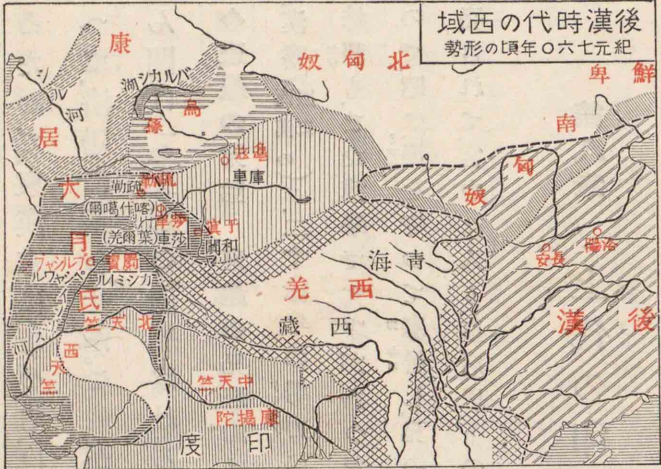
に盛んになつて、中央アジアに雄視してゐた。西漢の武帝は、大月氏が匈奴をうらんでゐる由を傳聞し、これと相應じて、匈奴をはさみ撃つことをはかり、張騫を大月氏に遣はした。張騫は、途中、匈奴にとらへられ、十餘年の後、のがれて大月氏に赴いたが、大月氏は、既に匈奴と戦ふ意志がなくなつてゐたので、使命をはたさずして、ひきかへした。さりながら、この後、西域諸國の様子が、だんく漢人に知られて、その交通も、おひくく開け、西域からは、名馬、葡萄及び美術工藝品などを漢に輸入し、漢からは、

蠶絲・絹・漆などを西域に傳へた。西域とは、匈奴の西邊と、今の新疆省地方及びパミール高地以西の總稱である。

班超の功業

王莽は、その外交に失政が多く、諸外國に對して、甚しく威信をおとしたので、匈奴も西域諸國も皆叛いたが、東漢の明帝に至り、大いに軍を起して、匈奴を撃ち破り、また班超を遣はして、威を西域に張つた。班超は、三十年の久しい間、西域にとゞまつて、よくその諸國を従へ、さらに人を遣はして、ローマと交通しようとして、

後漢時代の西域の勢形 紀元六七〇年の形勢



この頃景行天皇熊襲を征したまふ

班超と西域

漢とローマとの關係

試みたが、遂にその目的を達することが出来なかつた。ローマでは、

東西海上の交通

支那産の絹を愛好し、かねて支那との交通を開くことをのぞんでゐたので、東漢末になつて、自ら進んで、使を出し、印度洋から安南をへて、洛陽に至らせた。これから、海上に於ける東西の交通が、だんだん開けて、支那の商船は、はるかにセイロン島附近まで赴いた。

◆班超の兄弟

班超の兄班固は、博學で文章にたくみであつた。その名著「漢書」(西漢の)は、二十餘年の努力によつて、ほゞ出来上つたのである。班固の妹昭も、また博學で文才があつた。曹世叔に嫁したが、世叔がはやく死んだので、昭は、操を守つて寡居し、兄の業をついで、遂に「漢書」を大成した。後昭は召されて、宮中に入り、皇后以下の人々の師範となり、曹大家と號した。

第八章 上代の印度 佛教の東流

上代の印度 はじめ、漢族が、西北方から黄河の流域にうつつて來た頃、中央アジアのアムシル兩河の間には、アリヤン人種が住んで

アリヤン族の原住地

アリヤン人印度に入る

印度に於ける建國

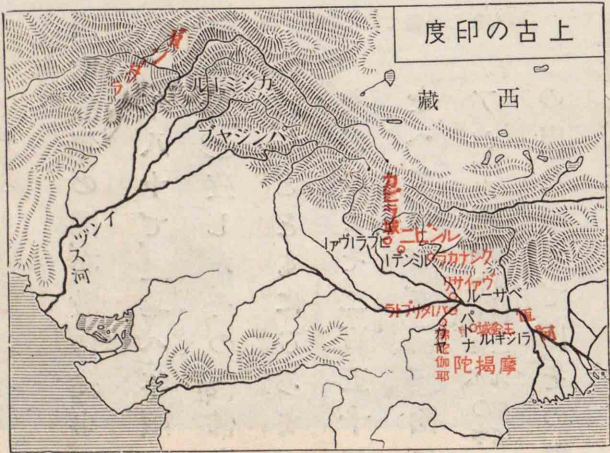
四種姓

僧族の跋扈

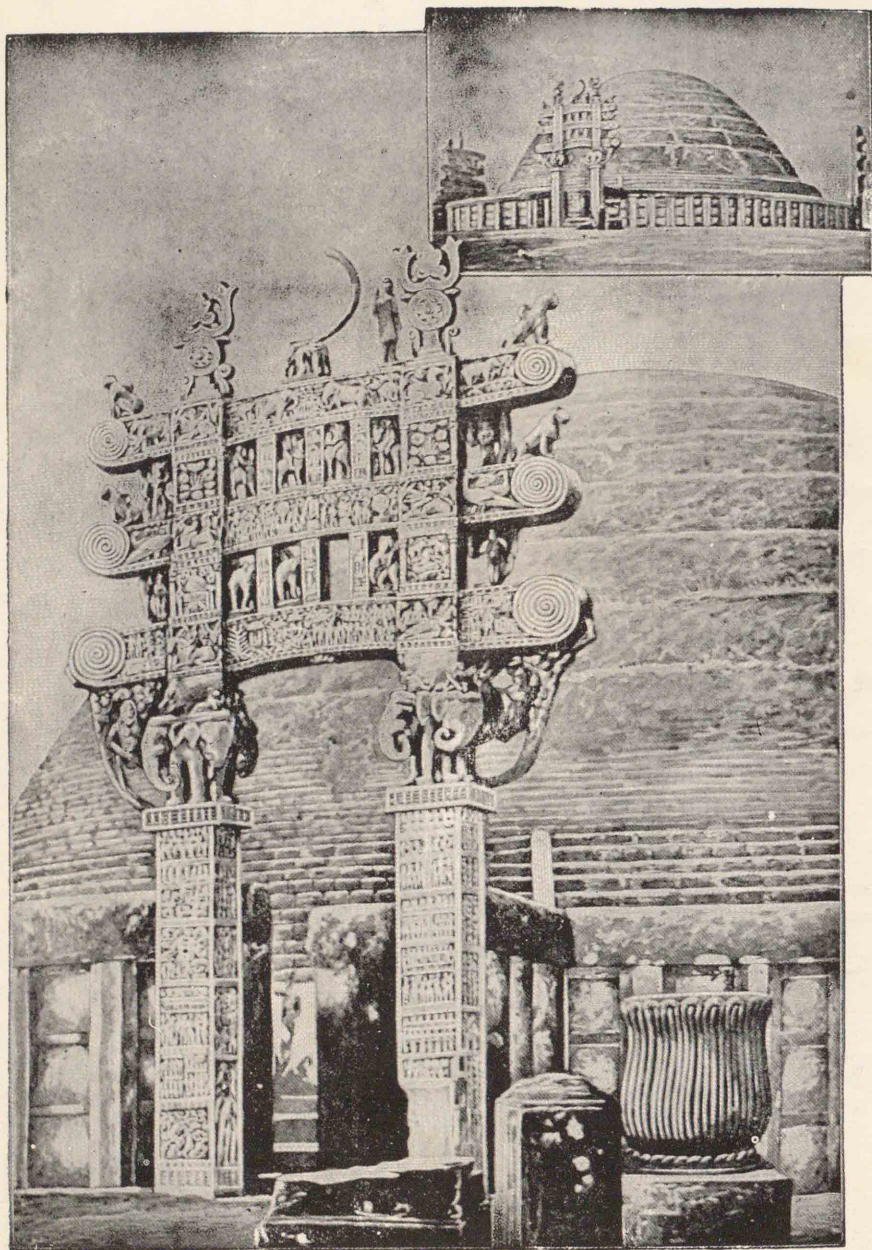
ゐた。このアリヤン人種の一派で、しだいに東南に進んだものがある。まづインドの西北部には入つて、インヅス河の上流地を占め、今からおよそ三千年前には、さらに恆河の左右にまでひろがり、そこに多くの國々をたて、一種特別の文明を開いて、哲學や宗教が、はやくもならびおこつた。

佛教の開基

その社會は、僧族(祭祀)をつかさどる、王士族(兵政の事)、平民(農牧商工)をなす、奴隸(耕作運搬等の)の四つの種姓に分れて、階級の別が、甚だ嚴重であつた。そして、僧族が、久しい間、暴威をふるつて、甚しく他の種姓のものを壓制してゐたが、孔子とほと



景全塔大1チンサ



門北の塔大1チンサ

孝靈天皇
の御代

釋迦の出世と佛
教

釋迦の布教

釋迦歿後の佛教

釋
迦

アシカ王と佛
教

んど同時代に至り、カピラ城主の子釋迦が、王士族から出て、はじめ
て四民の平等をとらへ、慈悲博愛を説いた。これが即ち佛教のはじ
めである。

アシカ王と佛教

釋迦は、前後およそ四十餘年の間、布教に従事し、



印の度佛陀耶に於て發見したるもの

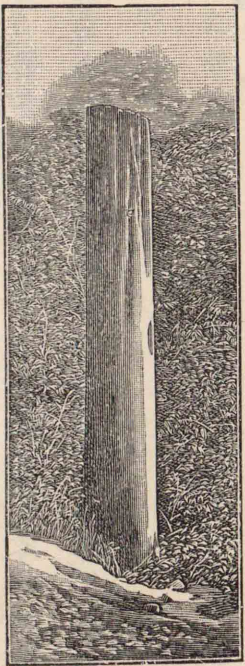
力が、なほ恆河流域内にかぎられてゐた。アシカ王は、秦の始皇帝と
時を同じくし、ほゞ印度を一統した不世出の英主で、あつく佛教に

年八十で、一七八年頃(德懿
天皇の)歿した。その後、佛教
は、年とともにひろまつ
たが、およそ二百五十年
をへて、マガダ(摩揭)國に
アシカ王(阿育王、三九〇年頃
即位、四二九年頃死)
の出た頃までは、その勢

カンチーの大塔は、アシヨカ王時代の建立にかゝる。その周囲の柵及び精緻の彫刻を施した四箇の門は、後世に添加したのであるらしい。カンチーは、一小村で、ビルサ市の南西約五哩半、ポパール市の北東二十哩の處にある。

釋迦誕生地
ルンビニ
(今ルミン
ディ)の石
柱

歸依し、或はしたしく佛蹟を巡拜したり、或は諸處に塔をたて、石柱を起したりなどし、また僧侶を四方に派遣して、熱心、これをひろめることを力めた。その結果、佛教は、印度半島内はいふに及ばず、遠くセイロン・ベルシヤ・エジプト・ギリシヤ等に至るまで、ひろく傳つた。



この石柱は、わが明治三十年の發見にかゝる。刻文には、アシヨカ王がこの地、來り釋迦誕生地なるの故を以て免租する旨を記してある。

マガダの興亡

佛教の中心大月氏にうつる

カニシカ王の世

カニシカ王と佛教

アシヨカ王の後、マガダは、國勢が、しだいにおとろへて、再三、王朝が興亡した。それにつれて、佛教徒は、多くマガダを去つて、大月氏國に赴いたので、佛教の中心は、しぜん大月氏にうつつた。大月氏は、西漢の末頃から、一層、國勢がふるつてゐたが、東漢の中頃に、出たカニシカ(迦膩)王の時には、その領域が、印度の西北部から

カニシカ王の佛
教保護

釋迦の像を
刻したカニ
シカ王の貨

垂仁天皇
の御代

佛敎支那に入る

佛敎朝鮮日本に
入る



中央アジア一帯の地を包括し、ひいて葱嶺以東にまで及んだ。王は、またあつく佛敎を信じ、力をつくして、これを保護したので、佛敎は、王の廣大な領土内にひろまり、東流して天山南路にも進入した。

佛敎の東流

はじめ、東漢の明帝は、西域に佛敎ありと聞き、人を大月氏に遣はして、佛像及び經典を求め、且、高僧をとまなひかへらせた。これから、西域の僧侶が續々支那に入り來つて、敎をひろめたり、譯經に従事したりしたので、支那の佛敎は、年一年に盛んになり、さらに東して朝鮮半島に入り、後にはわが日本にまで傳來した。

第九章 三國

東漢末の政治

群雄蜂起と三雄

東漢末の三雄

東漢は、その末に、國政が甚しくみだれたので、盜賊が、各處に横行し、群雄が、また諸方に起つた。その中で、最もいちじるしいのが、曹操、劉備、孫權の三人である。

◇曹操と劉備

曹操は、或時、劉備にむかつて、天下の英雄は、たゞ君とわればかりであるといつた。これは、曹操が、平生、劉備をおそれてゐたので、かういつて、その氣をひいて見たのであつた。その時、劉備は、曹操と會食中であつたが、自分が天下に志のあるのを曹操に見ぬかれたと思つて、大いにおそれ、思はずじをとれりし、突然、けたましく雷鳴がとどろいたので、備は、早速、氣轉をきかせて、むかし、聖人は、はげしく雷がなつたり、風がひどく吹いたりしたときには、必ず容を變じて、おそれたといふことです。が、私も今雷鳴のために、あわてて、ヒを取りおとし、まひましたといつて、まことに臆病らしい様子を示したので、曹操は、劉備をとるに足らぬ人物であると思つて、それから後は、かれを疑はなかつた。

天下三分の形勢

曹操は、東漢の天子を擁して、四方に號令し、劉備

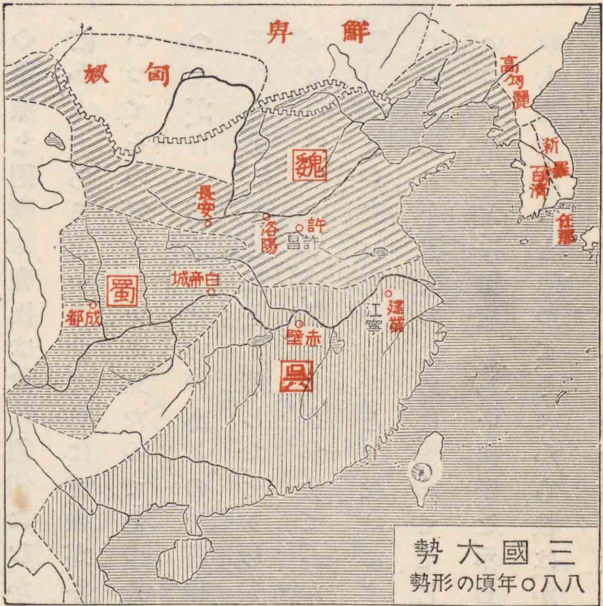
江北に於ける曹操

江南に於ける孫權

八年前神功皇后新羅を征したまふ

蜀に於ける劉備

赤壁の戦



三國大勢 八〇年の頃形勢

の雄志をくじいた。この戦の後、劉備は西して蜀(四川省)に據り、江北の曹操、江南の孫權と鼎足の勢をなした。

◇諸葛亮 諸葛亮は、一八〇一年、山東の瑯琊に生まれ、字を孔明と稱した。幼

諸葛亮はわが武内宿禰と同時代の人

神功皇后攝政時

諸葛亮



少の時、父母をうしなひ、叔父に養はれたが、後、襄陽の隆中(襄陽城西北の丘に寓居し、學を修め、才をねり、しづかに天下の大勢を觀てゐた。たま／＼劉備が、三たびそのいほりをたづねたので、亮は、備の誠意に感じ、遂に出でてこれにつかへ、忠誠たぐひなく、そのあひだが

三國の鼎立

曹操は、一八〇年(應神天皇の御代)に死んで、その子曹丕が、ついで立ち、東漢のゆづりをうけて、天子となり、洛陽に都して、魏國をはじめた。光武帝の中興から、こゝに至るまで、十三代およそ二百年

蜀 吳

て、東漢は、遂に全くほろびた。その翌年、劉備は、成都(四川省成都縣)に於て帝位に即き、漢の皇統をついで、蜀漢(シヨウカン)の昭烈帝となり、後八年、孫權も、また吳帝と稱して、建業(江蘇省江寧縣)に都し、支那はいよいよ三國分立の世となつた。

諸葛亮の誠忠

蜀の滅亡 蜀では、劉備の死んだ後も、諸葛亮がよく後主をたすけて、内外の政を治め、吳としたしんで、専ら魏と戦ひ、力を漢室の興復(キョウフク)につくした。を

三國一覽

國名	始祖	國都	代數	はじめた帝號を稱した年代	滅亡年代
魏	曹丕	洛陽	五	一八〇 應神天皇の御代	九三五 應神天皇の御代
蜀(漢)	劉備	成都	二	一八二 同	九三三 同
吳	孫權	建業	四	一八九 同	九四〇 同

諸葛亮の死

死したので、蜀の國には、はやくも、うらさびしい衰亡のかけが見え、そめ、遂に魏にほろぼされた。

しいかな、亮は、その功の未だ成らざるに、征魏の陣中に病

魏の國勢

晋の一統 魏は、中央の要地に

諸葛亮の廟

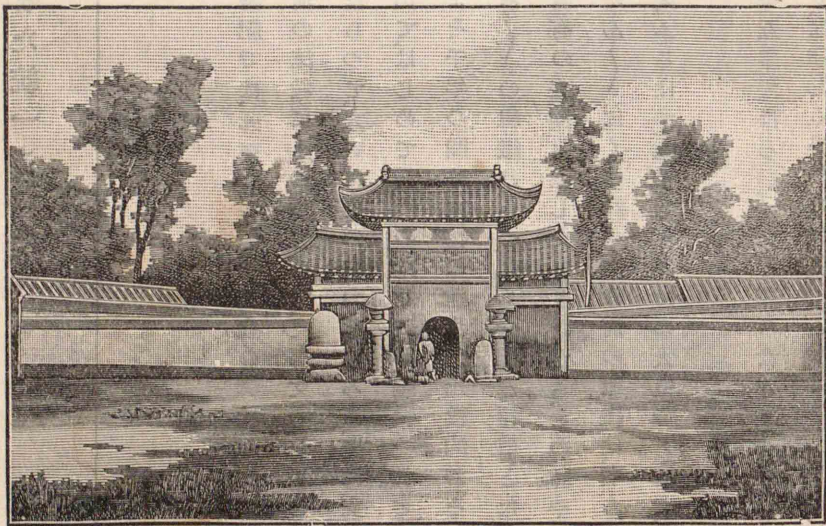
魏の滅亡

吳の滅亡

後五年王 仁來朝し 論語千字 文を獻す

神功皇后 攝政時代

據つてゐた上に、三國中、その領土が最もひろく、遠く朝鮮半島の西北部までをもあはせてゐた。そして、蜀をほろぼしてからは、一層、威勢が盛んであつたが、曹操以來、多く同族のものを殺したために、かへつて、その家の援(タスキ)を失ひ、九二五年(應神天皇の御代)、遂に權臣司馬炎(シマエン)に奪はれてほろびた。炎は、帝位に即いて、晋の武帝となり、後十五年、さらに吳をあはせた。漢末の分裂(レツ)から、こゝ



るあに南城都成省川四

に至るまで、八十餘年で、天下は、また統一された。

概 括

上古期は太古から晉の一統に至るまでの間で、皇紀では、九四〇年(應神天皇の御代)以前に相當する。この期のはじめに、漢族は、西北方から黄河の流域にうつつて来て、支那文明の基をひらき、しだいに諸蠻族を征服し、或はこれをおひはらつて、大いにその勢力をひろめ、遂に支那本部の大半を一統するに至つた。その間、黄帝が出て、はじめて一統の業を成し、堯舜の世をへて、漢族の國本は、ますますかたくなつた。夏殷およびその千年の間は、文化の進歩が、比較のおそかつたやうだが、その封建制度をはじめとして、もろくの組織は、いづれも皆周の標準となり、周固有の文化と夏殷の文化と合一して、遂に未曾有の盛觀を呈した。さりながら、その弊や、文弱に流れて、立派な制度も、禮樂も、歲月とともに、だんくにくづれ、中央政府の組織は、名あつてその實なく、地方の諸侯は、專横をきはめて、尾大ふるはず、遂に春秋戰國の大亂世となり、最後に秦の一統を見るやうになつた。

秦は、始皇帝の武斷專制の結果、一統後、わづかに十五年でほろび、ついで漢の世となつた。漢は、多年、支那を支配して、ますます漢族の勢力を張り、はげしく邊外の諸種族と競争衝突して、し

ばく對外的優勢を示し、漢土及び漢人の名は、支那及び支那人の別名となるに至つた。當時、西域との交通が、漸く開けて、漢文化の西方に傳はつたものもあるやうだが、漢には入つた西域の文化も、少くない。後にだんく流行して、漢文化に影響を及ぼした佛敎は、實に東漢の初世に傳來したのである。また、儒敎は、西漢以來ほとんど國敎同様の待遇をうけ、その經典の研究が、しだいに盛んになつて、漢族の文化は、ますます進んだ。さりながら、漢代には、宦官外戚の憂があつて、國政が、これがために大いにみだれ、遂に天下の大亂をかまして、こゝに三國の分立となり、およそ五十年にして、また晉の一統に歸した。

一、上古の歴史
 二、原始社會の發展
 三、農耕社會の成立
 四、封建社會の形成
 五、春秋戰國の變遷
 六、秦漢の統一
 七、魏晉南北朝の分裂
 八、隋唐の繁榮
 九、宋元明清の發展
 十、近世の變遷

古

國	川	漢	漢	漢
1. 漢	2. 漢	3. 漢	4. 漢	5. 漢
6. 漢	7. 漢	8. 漢	9. 漢	10. 漢
11. 漢	12. 漢	13. 漢	14. 漢	15. 漢
16. 漢	17. 漢	18. 漢	19. 漢	20. 漢
21. 漢	22. 漢	23. 漢	24. 漢	25. 漢
26. 漢	27. 漢	28. 漢	29. 漢	30. 漢
31. 漢	32. 漢	33. 漢	34. 漢	35. 漢
36. 漢	37. 漢	38. 漢	39. 漢	40. 漢
41. 漢	42. 漢	43. 漢	44. 漢	45. 漢
46. 漢	47. 漢	48. 漢	49. 漢	50. 漢
51. 漢	52. 漢	53. 漢	54. 漢	55. 漢
56. 漢	57. 漢	58. 漢	59. 漢	60. 漢
61. 漢	62. 漢	63. 漢	64. 漢	65. 漢
66. 漢	67. 漢	68. 漢	69. 漢	70. 漢
71. 漢	72. 漢	73. 漢	74. 漢	75. 漢
76. 漢	77. 漢	78. 漢	79. 漢	80. 漢
81. 漢	82. 漢	83. 漢	84. 漢	85. 漢
86. 漢	87. 漢	88. 漢	89. 漢	90. 漢
91. 漢	92. 漢	93. 漢	94. 漢	95. 漢
96. 漢	97. 漢	98. 漢	99. 漢	100. 漢

年表

(一)

年代は皇紀に據る

時代

王朝

年代

(天皇) 重なる事蹟

堯

前二六八〇頃

堯の即位

舜

前二六〇〇頃

舜の即位

夏

前1540頃
前1100頃

前二五四〇頃
前二一〇〇頃

禹の即位
夏の滅亡

殷

前1100頃
前460頃

前二一〇〇頃
前四六〇頃

湯の即位
殷の滅亡。箕子朝鮮王となる

上

周

前460頃—405

國 戰 秋 春

前 四六〇頃 武王の即位
 前 一一〇 周室の東遷
 前 二五 齊の桓公立つ
 一六 (神武) 管仲死す
 九八頃 (綏靖) 釋迦生る
 一〇九 (綏靖) 孔子生る
 一七八 (懿德) 釋迦入滅す
 一八二 (懿德) 孔子死す
 二八九頃 (孝安) 孟子生る
 三〇〇 (孝安) 秦の孝公立つ
 三三八 (孝安) 蘇秦六國を合従す
 三五〇 (孝安) 張儀の連衡策成る
 三七二 (孝靈) 孟子死す
 三九〇頃 (孝靈) アシヨカ王の即位
 四〇五 (孝靈) 周の滅亡
 四一五 (孝靈) 秦王政立つ
 四二九頃 (孝靈) アシヨカ王死す
 四四〇 (孝靈) 秦の一統

秦

440—455

四五九 (孝元) 項籍とぶ。劉邦帝位に即く
 四五二 (孝元) 項籍劉邦兵を起す
 四五一 (孝元) 始皇帝死す
 四四九 (孝元) 諸生を坑殺す
 四四八 (孝元) 始皇帝書を焚く
 四四七 (孝元) 長城を築き南越を平ぐ
 四四六 (孝靈) 匈奴征伐
 四四〇 (孝靈) 始皇帝郡縣の制をしく

上

古

國	三	漢	東	漢	西	秦	周		殷	夏	舜		
							前460頃—405						
880—940	685—880	459—668		440—455			國	戰	秋	春	前1100頃 前460頃	前1540頃 前1100頃	前1600頃
九四〇 (應神)	八八〇 (應神) 八八一 (應神) 八八九 (應神) 九二五 (應神)	六八五 (垂仁) 七二七 (垂仁) 七三三 (景行) 七四九 (景行) 七五一 (景行) 七八〇 (景行) 八二六 (成務) 八六八 (應神) 八八〇 (應神)	六八五 (垂仁) 七二七 (垂仁) 七三三 (景行) 七四九 (景行) 七五一 (景行) 七八〇 (景行) 八二六 (成務) 八六八 (應神) 八八〇 (應神)	六六八 (垂仁) 六四三 (垂仁) 六二四 (崇神) 六〇四 (崇神) 六〇一 (崇神) 五五三 (開化) 五四〇 (開化) 五二三 (開化) 五〇七 (開化) 四八一 (孝元) 四六七 (孝元) 四五九 (孝元)	四五九 (孝元) 四六七 (孝元) 四八一 (孝元) 四四七 (孝元) 四四八 (孝元) 四四九 (孝元) 四五二 (孝元) 四五五 (孝元)	四五九 (孝元) 四六七 (孝元) 四八一 (孝元) 四四七 (孝元) 四四八 (孝元) 四四九 (孝元) 四五二 (孝元) 四五五 (孝元)	四四〇 (孝靈) 四四六 (孝靈) 四四七 (孝元) 四四八 (孝元) 四四九 (孝元) 四五二 (孝元) 四五五 (孝元)	四四〇 (孝靈) 四二九頃 (孝靈) 四一五 (孝靈) 四〇五 (孝靈) 三九〇頃 (孝靈) 三七二 (孝靈) 三五〇 (孝安) 三二八 (孝安) 三〇〇 (孝安) 二八九頃 (孝安) 一八二 (懿德) 一七八 (懿德) 一〇九 (綏靖) 九八頃 (綏靖) 一六 (神武)	前四六〇頃 武王の即位 前二〇〇頃 湯の即位 前四六〇頃 殷の滅亡。箕子朝鮮王となる	前二〇〇頃 夏の滅亡	前二六〇頃 舜の即位		
晉、吳を滅ぼして天下を一統す	曹丕魏國を建て皇帝と稱す 蜀漢の劉備皇帝と稱す 吳の孫權帝と稱す 司馬炎魏の位を奪ひて帝となる 晉、吳を滅ぼして天下を一統す	劉秀帝位に即ぐ 明帝の時大月氏より佛教傳來 明帝北匈奴を伐つ 和帝北匈奴を破る 和帝班超を西域都護となす 大月氏のカニシカ王出づ 大秦國との交通開く 赤壁の戰 東漢亡ぶ	劉秀帝位に即ぐ 明帝の時大月氏より佛教傳來 明帝北匈奴を伐つ 和帝北匈奴を破る 和帝班超を西域都護となす 大月氏のカニシカ王出づ 大秦國との交通開く 赤壁の戰 東漢亡ぶ	項籍亡ぶ。劉邦帝位に即ぐ 衛滿朝鮮王となる 諸呂亂を謀りて誅せらる 景帝吳楚七國の亂を平ぐ 張騫西域に使す 武帝匈奴を伐つ 武帝朝鮮を滅ぼす 宣帝西域都護を置く 新羅建國 高句麗建國 百濟建國 王莽の篡立	項籍亡ぶ。劉邦帝位に即ぐ 衛滿朝鮮王となる 諸呂亂を謀りて誅せらる 景帝吳楚七國の亂を平ぐ 張騫西域に使す 武帝匈奴を伐つ 武帝朝鮮を滅ぼす 宣帝西域都護を置く 新羅建國 高句麗建國 百濟建國 王莽の篡立	項籍亡ぶ。劉邦帝位に即ぐ 衛滿朝鮮王となる 諸呂亂を謀りて誅せらる 景帝吳楚七國の亂を平ぐ 張騫西域に使す 武帝匈奴を伐つ 武帝朝鮮を滅ぼす 宣帝西域都護を置く 新羅建國 高句麗建國 百濟建國 王莽の篡立	始皇帝郡縣の制をしく 匈奴征伐 長城を築き南越を平ぐ 始皇帝書を焚く 諸生を坑殺す 始皇帝死す 項籍劉邦兵を起す 秦亡ぶ	始皇帝郡縣の制をしく 匈奴征伐 長城を築き南越を平ぐ 始皇帝書を焚く 諸生を坑殺す 始皇帝死す 項籍劉邦兵を起す 秦亡ぶ	始皇帝郡縣の制をしく 匈奴征伐 長城を築き南越を平ぐ 始皇帝書を焚く 諸生を坑殺す 始皇帝死す 項籍劉邦兵を起す 秦亡ぶ	秦の一統 アショカ王死す 秦王政立つ 周の滅亡 アショカ王の即位 孟子生る 孔子死す 釋迦入滅す 孔子生る 釋迦生る 管仲死す 齊の桓公立つ 周室の東遷 蘇秦六國を合従す 張儀の連衡策成る	殷の滅亡。箕子朝鮮王となる	夏の滅亡	舜の即位

第二篇 中古

第一章 晉 南北朝 隋の統一

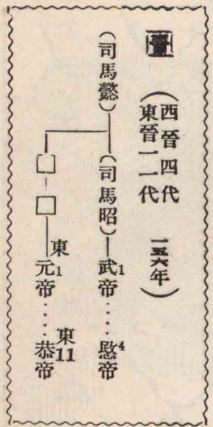
晉の形勢

晉の武帝は、魏が孤立してはやく亡びたのにかんがみ、大いに同族を各地に封じて、帝室の援としようとしたが、帝の死後、晉も、またながく天下をたもつことが出来なかつた。この頃、しきりに清談が流行して、人々、多くは實務をいやしみ、眞に國事を憂へるものとしては、甚だまれであるのに、同族の諸王は、武帝の期待に反し

晉の封建

清談の流行

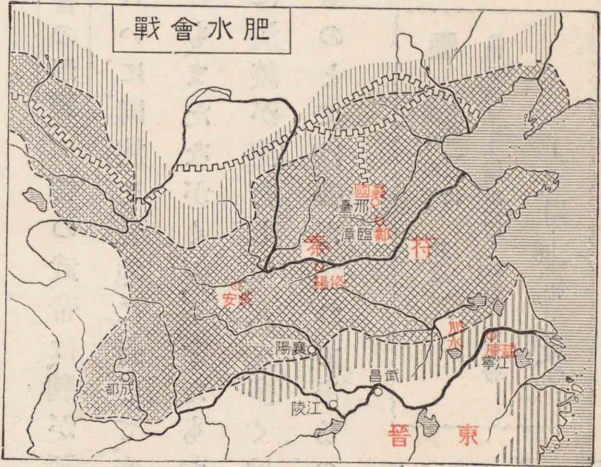
八王の亂



て、いたづらに權力を争ひ、こもゝ兵を起して、骨肉、たがひに殘害したのであつた。かく諸王が相せめいて、晉室の衰亂したのに乘じ、漢以來、内地に雜居

前三年都
を難波に
遷す

異種族の蜂起
晉の滅亡
貞晉
五胡十六國の亂
秦の強大
肥水の戰
江北の分裂



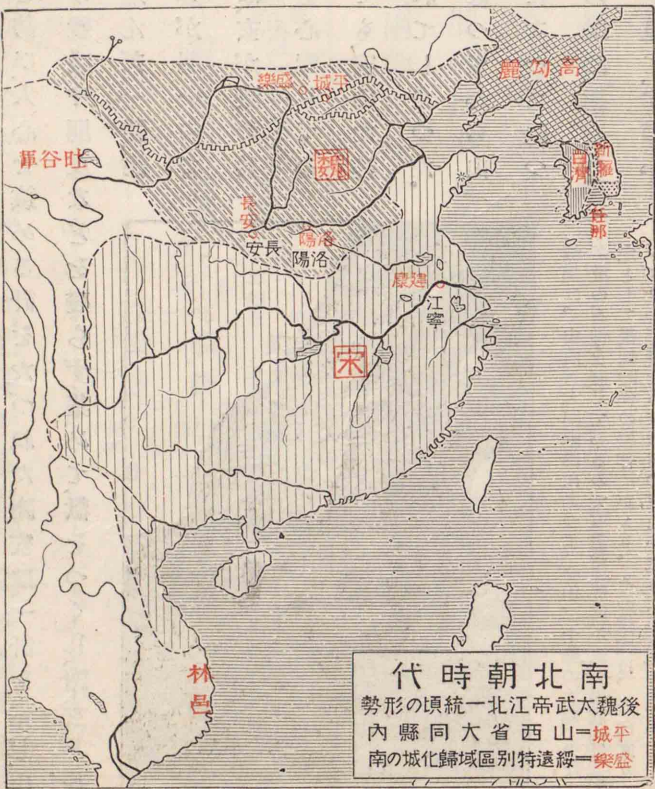
してゐた異種族は、こゝかしこに一時に蜂起し、³¹⁶九七六年(仁徳天皇)遂に晉をほろぼした。そこで、晉の同族司馬睿は、その翌年、建康(建業)に於て帝位にのほり、わづかに江南の地をたもつて、東晉第一代の元帝となつた。

江北の形勢と東晉の衰亡

東晉百餘年の間、江北の地は、異種族紛争のちまたとなり、前後およそ十六の國々が、しきりに興亡した。その中で、秦主苻堅(異種族)は、一たび江北を一統し、³⁸³一〇四三年(仁徳天皇)勢にまかせて東晉を伐ち、かへつて肥水(徽安)に大敗し、威勢にはかに地におちて、各種族は、みなそむき起

東晉の衰亡

つた。これから、江北は、また四分五裂し、紛々として麻の如くにみだれたが、やがて後魏(異種族)が強大になつて、嶄然(ザンゼン)頭角をあらはして來た。また東晉は、肥水の戦には勝つたものの、その後とても、とかくに國勢が振はず、⁴²⁰一〇八〇年(允恭天皇)に至り、その將劉裕に奪はれてほろびた。



南北朝時勢
後魏大武帝江北統一の形勢
平城=山西大内
平城=山西大内
平城=山西大内

雲崗の石佛

◇謝安人心を鎮む 秦主苻堅が大舉して、東晉に攻めて来た時、東晉は、謝石と謝玄(シヤゲン)謝石の兄の子)とを將として、これを防(フセ)がせたが、都の建康の民は、これを聞くと、大いにおそれ、人心が定まらなかつた。謝玄は、これを心配して、叔父の謝安を訪ひ、人心を鎮める計をたづねた。謝安は、一計を案じ、山莊に遊びに出かけ、親戚や朋友などを残らず集めて、歡をつくし、謝玄と苻安は、謝玄よりも、苻が弱いのであつたが、その日は、玄が秦の兵の攻めてくるのを心配してゐたので、苻を圍んでも、安のため、いつもまかされてしまつた。かくて、安は、苻を終つてから、山に登つて遊び、夜になつて歸つて来たので、建康の民は、謝安のあちついた様子を見て、すつかり安心してしまひ、ために人心の動搖が全くやんだ。



雲崗は、山西省大同縣内にあつて、全山二十餘の大窟、み多数の石佛を有してゐるので有名である。それらの石佛は、主として後魏時代の製作にかゝり、その様式は、北印度ガンドラの影響をうけたものだといはれてゐる。

宋

後魏

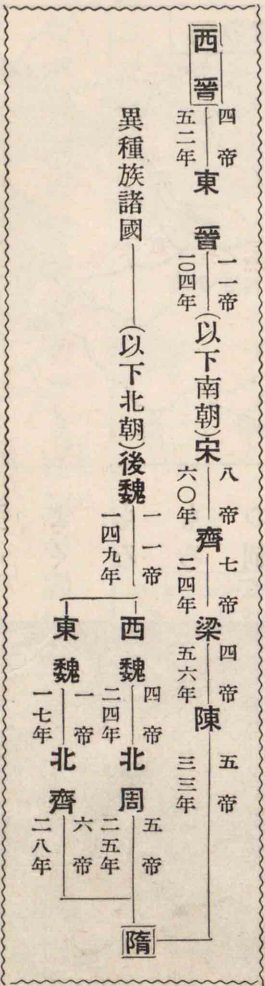
南北朝

南北文化の異同

南北朝の分立

り安心してしまひ、ために人心の動搖が全くやんだ。

劉裕は、帝位について、宋の武帝となつたが、後四年、後魏に太武帝が立ち、遂に江北を一統して、宋に對した。これからおよそ百五十餘年の間、いはゆる南北朝の世となつて、雙方おの／＼數朝の興亡がある。兩朝には、ひとしく佛教が盛んに行はれたが、學



術や 風俗 は、必ずしも

様になく、文學は、南朝を主とし、經學は、北朝を推し、言語の如きも、遂に南北の別をなすに至つた。

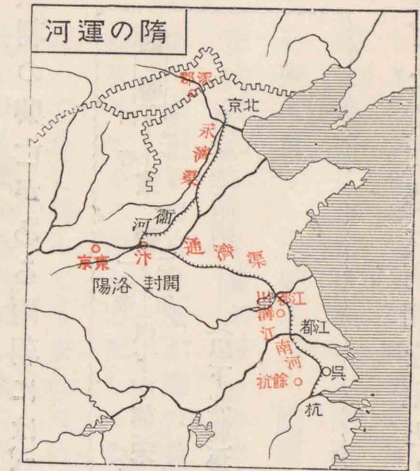
隋の統一

一三九九年(崇峻天皇)になつて、漢人の出身である隋の文

前々年物
部守屋殺
さる

文帝の一統とその政治

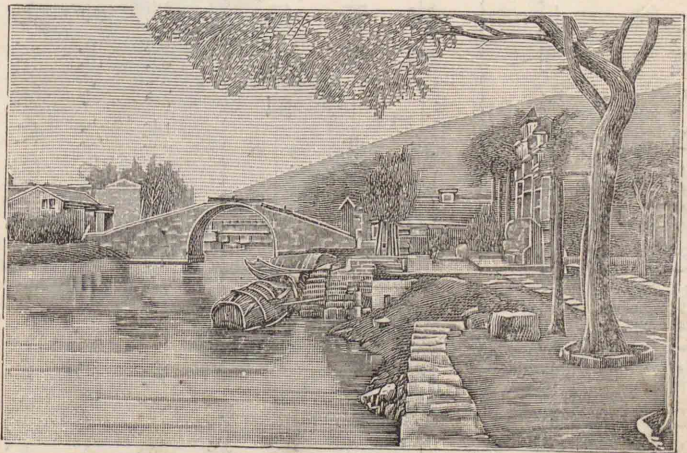
帝が、はじめて兩朝を一統し、心を政治にとめて、勤儉をたふとび、人民



を愛養し、よくもろもろの制度を

煬帝の豪華

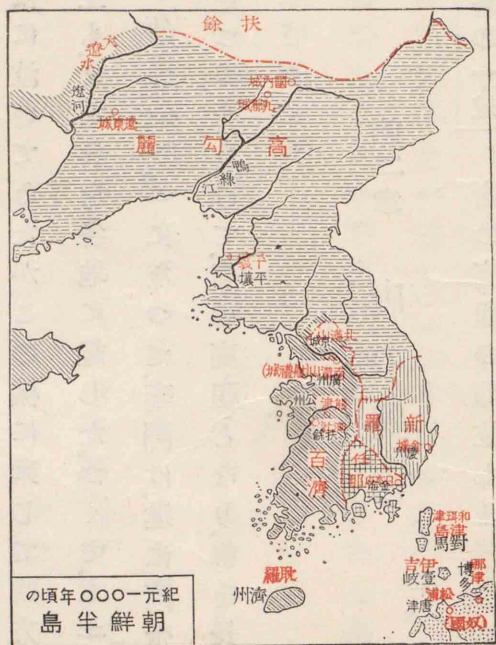
とへのへたしかるに、その子煬帝は、全くこれに反して、奢侈豪華を好み、壯麗な宮殿や、大規模の庭園などをいとなく巡遊の船をうかべなどし、少しも民の困苦をかへりみなかつた。



この頃聖徳太子小野妹子を隋に遣はす

外征

三國の建國と任那



の頃年〇〇〇一元紀 島半鮮朝

朝鮮半島の變遷

煬帝

は、またしきりに兵を動かして、朝鮮半島その他に遠征をこゝろみだ。朝鮮半島では、西漢の時、新羅、高句麗、百濟の三國が、相ついで建國し、弁韓の地には、また加羅が起つ

て、わが日本の保護國となり、任那の國號を授けられた。爾後、三國は、或は結び、或ははなれて、たがひにその勢力の維持・發展をつとめ、日本とも、またそれら複雑な關係を生じたが、神功皇后が一舉して新羅を征服したまふに及び、半島は、一時、日本の威勢になびき服した。しかるに、その後、新羅がだん／＼強大になつて、南北朝の末頃(欽

任那の滅亡

天皇の御代に至り、遂に任那を攻めほろぼしたので、半島に於ける日本の勢力に頓挫を來した。

隋の末路

高句麗遠征の失敗

煬帝が高句麗を征したのは、任那のほろびた後、およそ五十年の事で、前後三回、おほかたは皆失敗に終り、かへつて國力をつかからせ、且、大いに威望をおとした。人民は、かねて重税になやみ、苦役に泣いてゐたが、この機に乗じて、四方に蜂起し、李淵以下豪傑の

隋國分崩

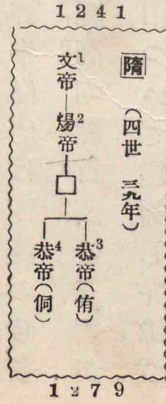
後四年聖德太子薨

士も、また兵を各地に起した。かくて、一二七八年（推古天皇の御代）になつて、李淵は、遂に隋帝の

隋の滅亡

ゆづりをうけて、唐の高祖となり、都を長安

にさだめた。



第二章 唐の興亡

唐の一統

唐の高祖の即位した時には、なほ十數人の群雄が、諸方

世民の功

この年蘇我蝦夷大臣となる

太宗の即位

に割據してゐた。高祖は、次子世民とはかり、しだいにこれをうち平げて、天下を一統し、一二八六年（推古天皇の御代、聖、遂に位を世民にゆづつた。これから、唐は、古今にまれなる英主太宗をいたゞくこととなつた。

太宗高宗の治

太宗は、多くの名臣、良將を用ひて、もろくの制度を改良し、よく文武の政をととのへて、いはゆる貞觀（當時の）の治をなした。太宗が死んで、その子高宗の世となつても、前代文武の名臣が、なほ多く存して、よくこれを輔佐したので、國內は、無事太平であつた。

貞觀の治

この頃大化の改新あり

高宗の治

◇太宗の二賢相 太宗は、房玄齡と事を謀議した後、必ず、しかし、一應、杜如晦の考を聞かねば、決定することが出来ないといふのが常であつた。そして、杜如晦がその場に出席すると、いつでも房玄齡の意見を採用了。けだし、玄齡は、事を畫策することが上手であり、また如晦は、事物を觀察して、そ

の可否を決断するの能があつた。この二人は、いづれも協力同心して、國家のためにつくしたので、後世、唐の賢相を稱するものは、必ず房杜の二人をあげるのである。

朝鮮半島に於ける唐の勢力

その頃、朝鮮半島では、高句麗と百濟とが、謀を通じて、新羅をはかつたので、新羅は、援を唐に請うた。太宗は、その請をきき、いれ、みづから大軍をひきゐて、高句麗を征し、志を得ずして、ひきかへした。しかるに、高宗は、また新羅を援けて、百濟を攻め、わが日本の援軍にかち、一三三三年(天智天皇の御代)、遂に百濟をほろぼした。後五年、唐は、また高句麗をも攻め取り、その都であつた平壤に安東都護府を置いて、百濟高句麗の故地を治めさせたが、やがて、新羅が、だんく勢



朝鮮半島の形勢
太宗の高句麗親征

太宗

百濟高句麗滅亡

新羅の半島一統

諸外國の服従

唐が百濟を平げた碑

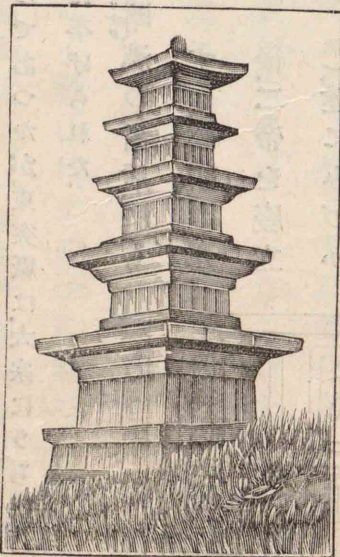
東西の交通

を得て、遂にほゞ半島を一統した。表面のみ唐に對して臣と稱した。

唐の國威

この外、太宗、高宗二帝の時には、相ついで東西突厥をほろぼし、吐蕃を破り、印度に威を示し、また西域諸國を従へて、大いに國威を外にかゝやかした。ので、南海諸國も、多く貢を唐にさゝげるやうになつた。かくして、唐は、實に空前の大帝國となつたが、それにつれて、東西の交通が、おのづから發達し、後には、西アジアの大國大食(セシヤ)の人も、印度洋をわたつて、支那の南海に來航し、盛んに貿易をなしたのであつた。

◇突厥 突厥は、アルタイ山南に起つた匈奴の別種で、南北朝の末頃から、



朝鮮忠清南道扶餘縣にありて唐の將軍定方之功を録したるもの

持統天皇の御代

武后の歴
(大周國寶)

武氏唐を奪ふ

武后

章后の禍と唐室の復興

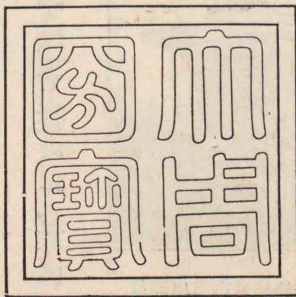
しだいに勢を増し、遂に東遼東から西カスビ海邊に至るまでの地を領するに至つた。後、ほどなく、突厥は東西に分裂し、東突厥が、しばらく南侵して、隋を苦しめたので、煬帝は、李淵に命じて、これをふせがせたが淵は、利を失ひ、かへつて、その援をかりて、隋を奪つた。そのため、突厥は、とかくに唐を輕んじ、しきりにこれを侵したのであつたが、東突厥は、太宗にうちほろぼされ、ついで、西突厥は、また高宗に平げられた。

女禍

高宗の皇后武氏は、權略、漢の呂后にも



すぎ、高宗の死後、二帝を廢立し、遂にみづから即位して、聖神皇帝と稱し、國號を周とあらためた。武后の死後、ほどなく、また章后(中宗の)の禍があ



元正・聖武二天皇の頃

開元の治

節度使

安祿山の叛

後二年惠美押勝叛す

節度使宦官の横暴

つたが、唐室またおこり、ついで玄宗の世となつた。

玄宗の世

玄宗は、即位のはじめ、熱心、政につとめ、天下がよく治まつて、文學・技藝も、大いに進み、いはゆる開元(當時の)の治をなした。帝は、また邊境の要地に節度使を置き、兵權と民政とをこれにゆだねて、再び國威を外に張つた。かくの如く、帝の初政は、内外ともにみるべきものがあつたが、後に楊貴妃の愛におぼれて、政をおこたつたために、一四一五年(孝謙天皇)遂に北邊の節度使安祿山の叛を招き、その兵が、潮の如く都におし進んだので、帝も、一時、都をのがれ、遂に位を太子にゆづつた。後、ほどなく、祿山は、その子に殺され、賊軍内に紛争をひき起して、だんく勢が衰へ、一四二三年(淳仁天皇)遂に平定された。

唐の末路

この多年の大亂のために、唐は、大いに國力をつひやし、爾後、その勢が甚だふるはなくなつて、外には、節度使がわがまゝを

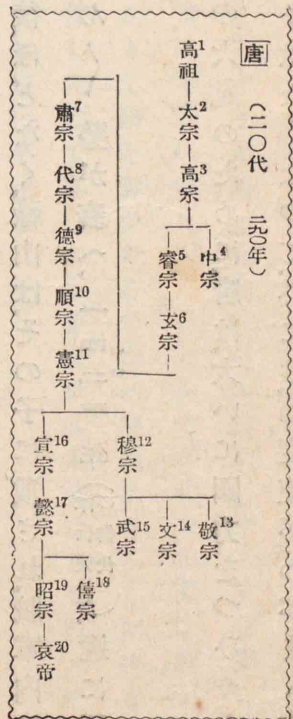
朝臣の黨争

唐の滅亡

前六年春
原道真左
遷

極め、内には、宦官が政權を専らにした。その上、朝臣等が、また黨派をたてて相争つたので、國政はいよいよみだれて、唐室は、ますます衰へ、一五六七年（醍醐天皇、延喜七年）遂に朱全忠に奪はれてほろびた。

1278



第三章 唐の制度・文物 宗教

官制 唐の諸制度は、高祖・太宗・高宗三代の間に、ほぼ出来あがつた。それらの制度は、たゞに支那後世の模範となつたのみならず、わが日本の如きも、かつては國使及び留學生を派遣して、これを學ばせたのであつた。まづ官制は、中央政府に尙書・中書・門下の三省を設け、

中央官制

三省	尙書省	中書省	門下省
長官	令	令	侍中
職掌	既に確定した詔勅を天下に施行す	天子の詔勅を宣奉す	詔勅を審査す
六部	吏部	戸部	兵部
長官	尙書	尙書	尙書
職掌	官吏の進退を掌る	戸口の調査と租税の徴収とを掌る	禮儀及び教育を掌る
			軍事を掌る
			刑律を掌る
			工藝を掌る

地方官制

は尹、縣には令を置いて、民政をつかさどらせ、別に道ごとに巡察使を設けて、地方の政務を監察させた。

田制及び税法

唐では、はじめ土地公有の主義をとり、毎年、それぞれ國民の年齢をしらべ、十八歳以上の男子には、田百畝を給し、内二十畝を永業田として、その子孫に傳へさせ、のこり八十畝を一代かぎりの口分田とした。また三種の税法を定め、百畝の田から、毎年、粟

永業田及び口分田

租庸調

二斛を出すのを租とし、一年に二十日間、丁男が國家のために力役に就くのを庸とし、またその郷土の産出する所にしたがつて、絹、綾、絁、麻布などの類を出すのを調とした。

死	流	徒	杖	五刑				
				笞	等	級	絞	斬
	二千里	一年	六十	十	二十	三十		
	二千五百里	一年半	七十			四十		
		二年	八十			五十		
		二年半	九十					
		三年	一百					

刑罰

刑罰は、罪の輕重によつて、笞杖徒流死の内、いづれかをあてた。この笞杖徒流死が、いはゆる五刑である。

五刑

學校

唐の學制は、頗るよく備つて、京師に國子學、大學、その他の學校を設け、地方に府學、州學、縣學等を置き、主として經學を授けた。すべてそれらの學校を卒業したものを生徒といひ、地方に於て檢定をうけ、それに合格したものを貢舉と稱した。生徒及び貢舉は、毎年、尙書省でこれを試験し、合格者をば官吏に用ひた。

官吏登庸法

儒學

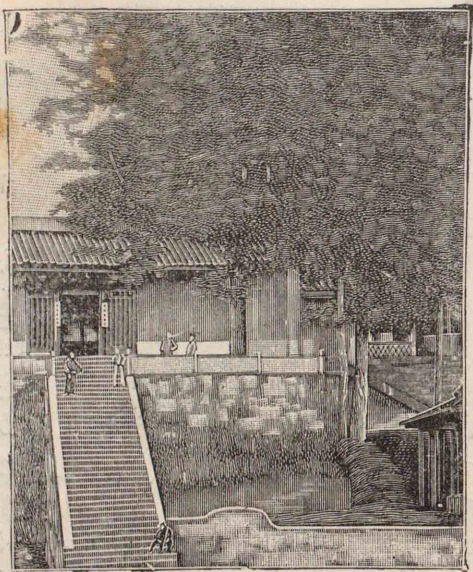
儒學と文學

儒學は、漢以來、主として字句の解釋を事としたが、唐の世になつても、なほ別に新見地を開くには至らなかつた。さりながら、詩文は、大いに發達進歩し、玄宗の世には、李白、杜甫の二大詩星があらはれ、その數十年の後には、韓愈、柳宗元の子厚のやうな大文章家も出た。

詩文

書畫

書は、晉の名人王羲之、王獻之以來、皆その風を學んだのであつたが、唐に至つて、これを官吏登庸の一資格と定めたので、書道は、ますます盛んにおこり、歐陽詢、褚遂良、張旭、顏真卿等の大家が、續々あらはれた。また繪畫は、六朝以來、佛教



廣東省潮安縣にある

書の大家

韓愈の廟

繪畫の大家

諸宗教傳來

玄 井

玄奘と佛教

王羲之が書いた字をあつめたもの

の盛んなるにつれて、大いにすゝみ、唐代には、山水畫の大家李思訓、佛畫の名人吳道玄（吳道子）などが出た。

宗教

これよりさき、南北朝の時、ペルシヤの祆教（拜火教）が、はやくも

支那に傳はつたが、唐に至つて、ますます多くその徒がは入つて來た。その頃、景教（キリスト教の一派）も、また西方から傳はり、後には回教（ヒアラー）も傳來した。また六朝時代に隆盛を極めた佛教は、唐代



玄奘法師

の尊信を得つゝ、そのもたらしかへつた多くの經論を翻譯し、支那

の名僧玄奘（玄奘）の力によつて、いよいよその根柢をかためた。玄奘は、多年、印度を歴遊し、太宗、高宗



景教碑

この碑は、明末、長安の西郊なる金勝寺の庭内から發掘したもので、その建設者は、長安大秦寺の僧景淨である。碑文には唐の太宗の貞觀九年(皇紀一二九五年)に景教がはじめて長安に將來せられてから、この碑の建設された唐の徳宗の建中二年(皇紀一四四一年)に至る約百五十年間に於ける景教流行の有様をしるしてある。大秦寺は、太宗の時、建てられて、波斯寺といつたのを、玄宗の時、大秦寺と改めたのである。また金勝寺は、大秦寺の廢滅した後、その空地に移轉したものである。

佛教史に一新紀元を開いた。

第四章 五代 宋及び遼

後梁

後唐・後晉・後漢・後周

五代の紛亂

五代	始	祖	國	郡	代數	年數
後梁	太祖	朱全忠	大梁	開封縣	二	七
後唐	莊宗	李存勳	洛陽		四	四
後晉	高祖	石敬瑭	大梁		二	二
後漢	高祖	劉知遠	大梁		二	四
後周	太祖	郭威	大梁		三	二

五代の形勢 朱全忠は、唐の帝位を奪つて、後梁の太祖となつたが、各地の群雄も、また帝或は王と稱して、それ〴〵諸方に割據してゐたので、天下は、全く統一する所がなかつた。かゝる形勢の間に、後梁は、たちまち亡びて、後唐・後晉・後漢・後周の四朝が、相ついで興亡した。

この後梁以下の五朝が、いはゆる五代で、前後通じて、わづかに五十餘年である。その間、武人が跋扈を極めて、紛亂・爭奪、最もはげし

太祖



宋の太祖の文治

太宗の一統

く、文化は、地におち、風教は、全くすたれた。

宋の太祖

かくて、一六二〇年(天村皇代の御)

に至り、後周の武將趙匡胤(チウキヤウイン)が、將士に推されて、帝位に即いた。これが即ち宋の太祖である。太祖は、都を汴

(さきの大梁、河南省開封縣)にさだめ、いたく武人の驕横(キヤウコウ)をおさへて、その權力をそ

ぎ、専ら力を民治、財政につくした。これから、しだいに中央集權的文治が行はれて、天下の民は、はじめて肩を休めることが出來た。

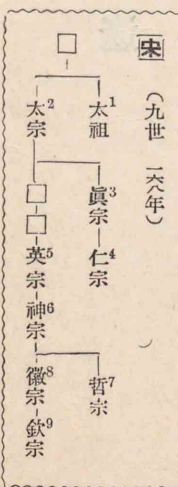
宋の盛衰

太祖の死後、弟太宗が立ち、ぼゞ支那を一統したが、宋は、

太祖以來、文治を主としたために、

とかくに武力がふるはないで、遂に文弱の弊におちいり、つねに邊

1620



1787

この頃後三條天皇の改革があつた

神宗の新法施行

神宗



司馬光等の反對

新法舊法兩黨の争

王安石

かつたので、司馬光以下諸名士の反對を招いた。爾後、數十年の間、新法舊法兩派が、はげしく争つて、政局に當るものは、轉々更迭し、施政の方針も、これがために一貫せず、民ますく苦しんで、國、いよゝ衰へた。

◇王安石の新法

青苗法 毎年春官から資金を農民にかし、秋收穫の際、二割の利子をそ



へて、これを返納させる法。

均輸法 租税を納めるのに、その地方の産物を以てすることを許し、主税官は、これを便宜の地方にたくはへ置き、その産物の少くして高價な地方に送り、これを賣つて、利を官に收める法。

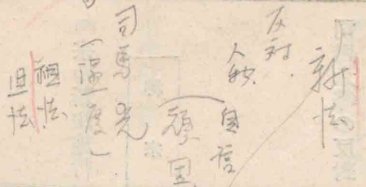
市易法 京都に市易務といふ官を置き、市場に賣れぬ物品を、安價を以て官に買ひ入れ、もしくはこれを官物と交換し、または資金を商人にかして、利を收める法。

保甲法 十家を保、五十家を大保とし、保に保長、大保に大保長を置き、さらに五百家を都保とし、都保に正副二人を置き、部下の保丁をして、それぞれ弓箭をたくはへ、武藝を講習させる法。

保馬法 馬を養うことをねがふ保丁には、官から馬一匹或は二匹、もしくはその價を給し、毎年、その肥瘠死病をしらべて、これを補償させる法。

遼の勃興 これよりさき、北方に遼といふ強國がおこつた。この國をたてた契丹(今の蒙古)は、もと潢河(今の内蒙古のシラムレン河)のほとりに住んで

契丹の原住地



契丹の開化

契丹の太祖の業

遼の太宗

みた未開野蠻の種族で、はじめは、文字もなく、貨幣の制もなかつた。しかるに、後梁のはじめに至つて、耶律阿保機といふものが、その諸部を一統し、一五七六年(醍醐天皇の御代)、帝位に即いて、太祖となり、東鄰の渤海國、その他の近鄰諸族を従へたので、契丹の版圖は、たちまち廣大になつた。太祖は、またしきりに支那の文化をとり入れ、且、契丹文字を製しなどして、大いに心を文化の開發にも用ひたが、その子太宗の時には、國勢が、一層盛んになつて、遂に後晉をほろぼし、國號をたてて遼と稱した。

◇太祖の後 太祖の後述律氏は、人となり、勇決果斷で、權略に富み、太祖が兵を用ひる時は、つねにその相談にあづかつて、内助の功が、甚だ多かつた。

遼の全盛と西夏の建國 遼は、太宗

の後、三代をへて、聖宗(宋の太宗、眞の宗、仁宗の世)に至り、國勢が、ますます強くなつて、

1576



1785

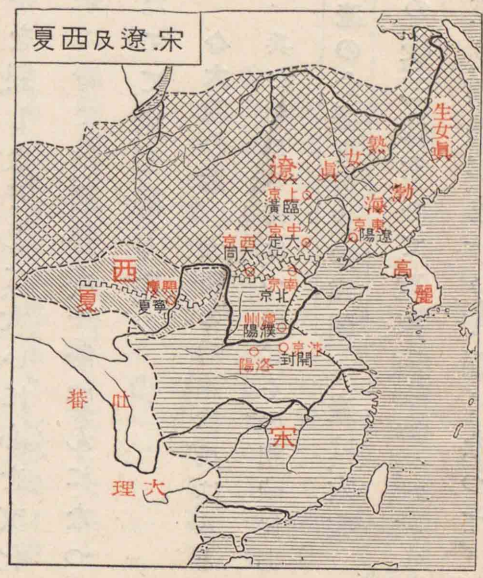
この頃藤原道長權を専らにする

聖宗の南伐

聖宗の東略

遼の大版圖

西夏



日本海から西、天山に及び、その威勢がますます、宋を壓するやうになつた。この頃、西夏(甘肅地方)の李元昊(チベット族の別種)も、また帝と稱して、しばしば宋の西邊を侵したので、宋はいよいよ多事となつた。

第五章 南宋及び金 宋の文化

アクダの建國

宋金の遼夾撃

遼の滅亡

徽宗父子とらへらる

金の勃興 遼は、その盛運が永續せず、宋とともにしだいに衰へた。たまく、滿洲松花江附近の女眞(女直)族に、アクダ(打骨)といふ英雄

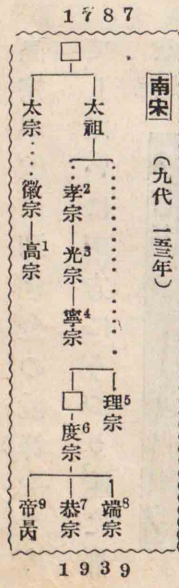
があらはれ、兵を起して、遼の軍を破り、一七七五年(鳥羽天皇)に金の太祖となつて、しだいにその勢をかためた。

金宋の交渉 宋の徽宗(神宗の子)は、金の太祖と約して、南北から遼をはさみ撃ち、もろくも敗れた。それにひきかへて、金軍は大いに勝ち、ついで遼をほろぼしたので、宋にとつては、かへつて唇ほろびて齒寒

しといふ結果になり、金は、遂に大舉して宋に侵入した。徽宗は、戦はずして、位をその子にゆづり、膝を屈して、金と和したが、宋が和約履行の誠意を闕いたために、金軍は、また南侵し、一七八七年(崇徳天皇)、

徽宗父子及び皇后等をとらへて、北方にとまひ去つた。

宋室の南渡 宋では、徽宗の子



高宗南にうつる

岳飛



高宗が位に即き、金の鋭鋒をさけて、しだいに南方にうつり、遂に都を臨安(浙江省杭州縣)を臨

南宋

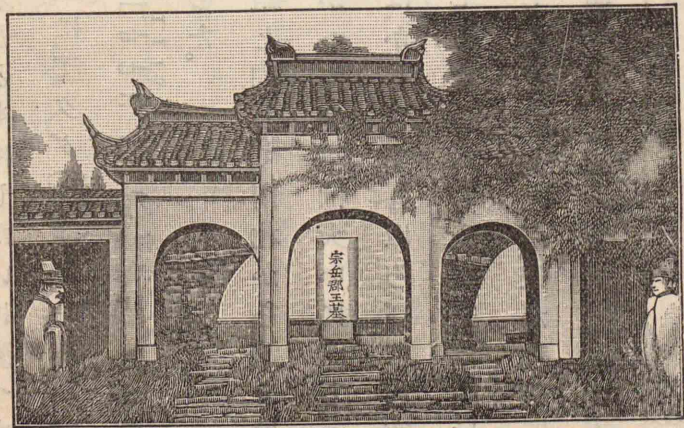
岳飛の廟

にさだめた。これを稱して宋室の南渡といひ、高宗以後を南宋といふのである。

南宋和戦の議

岳飛等の主戦論
屈辱的講和

當時、江北の地は、既におほかた金に占められ、宋の領土はいよいよちままつた。宋の忠臣岳飛等は、あくまでも、金と決戦すべきを主張したが、高宗は、秦檜の言に動かされ、不名



浙江省杭州縣にある

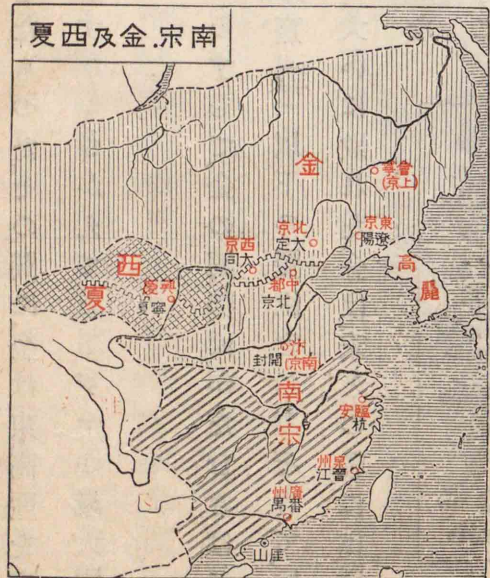
岳飛筆蹟



強く、大小百戦、未だかつて一たびも敗れたことがなかつた。金人は、皆飛をおそれ、山を據すはやすけれど、岳家の軍を據すは難しといつたといふことである。しかるに、秦檜は、飛を以て和を結ぶに害ありとなし、飛をとらへて、獄に下し、遂にこれを殺した。

金の全盛

この後ほどなく、金にも宋にも、共に明君が出



南宋、金、西夏

譽の講和をなして、一時の安きを偷んだ。

岳飛は、盡忠の人で、少年時代から、氣節をたふとび、沈着寡言で、學に力め、頗る兵法に通じ、且、腕力が

南北間の平和

金の極盛

て、兩國の間は、しばらく平和をたもつた。その間に、金は、東、高麗を威服し、西、西夏をなづけ、國運がますますさかえて、東アジヤの最大國となつた。

宋の衰微

金宋の衰運

しかるに、久しからずして、金の國勢は、かたむきはじめ、宋にても、奸臣が事を用ひ、朱熹(朱)以下の賢臣をしりぞけて、國政をみだし、やがて金を伐つて、大いに敗れた。金は、宋との戦には勝つたものの、また昔日の元氣がなく、日に月に衰へゆいた。この時に當つて、蒙古族が、新たに北方に勃

金の衰微

朱熹筆蹟

蒙古族の勃興

宋代の佛教

朱熹



興した。

宋の文化

佛教は、唐末以來、大いに衰へたが、宋の興るに及んで、太祖太宗の保護により、その各派が

存忠孝心

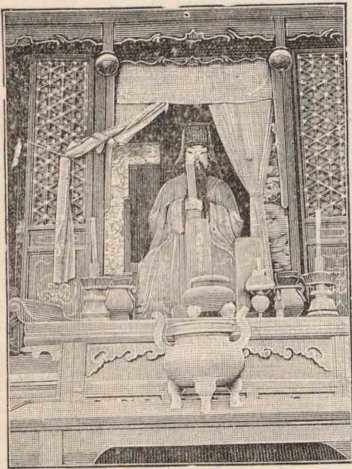
朱熹と宋學

白鹿洞書院入口

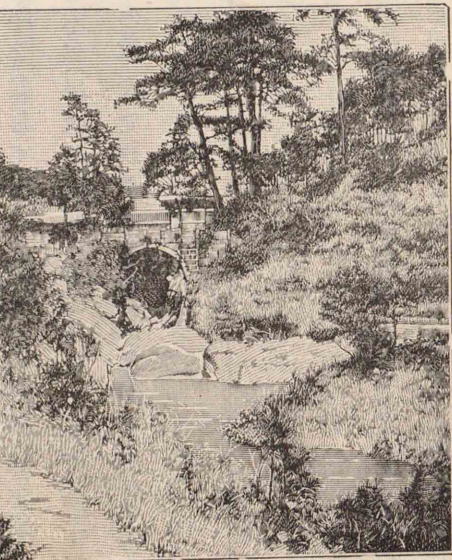
蘇軾

文章家

詩人



この像は蘇軾の蘇子堂にあり



白鹿洞書院の地は、今高昌南、江西、星子、廬山、南麓、蘇軾の書院にあり

いづれも復興の運に向つた。中にも、最も盛んであつたのは、禪宗で、工藝、美術はいふに及ばず、儒學の如きも、その影響をうけて、ふかく理論をきはめるやうになり、朱熹に至つて、いはゆる

宋學を大成した。また文章は、五代の世に衰へたのを、宋のはじめに歐陽修が出て、古文を復興し、ついで蘇洵(老蘇)、蘇軾(東坡)、王安石等の大家を出した。歐陽修と蘇軾とは、また非凡の詩才を有し、詩人としても有名である。

史學
書畫

宋代には、史學も、大いに發達し、司馬光の資治通鑑は、記事の正確なものと、文章の壯嚴なものとて名高い。また藝術殊に書畫が、いちじるしく進歩し、蔡襄、黃庭堅は書を以て、李龍眠は畫を以て、米芾は書畫かね善くするを以て、それ〴〵世に知られてゐる。

◇司馬光と資治通鑑 司馬光は、字を君實といひ、河南の人である。篤學德行を以てきこえ、殊に政治の道に明かた、眞宰相の器だと稱せられた。かつて、英宗の勅をうけ、前後十六年を費して、周の威烈王の二十三年(皇紀二五八年)から、後周の世宗の顯徳六年(皇紀一六一九年)に至るまで、一千三百六十二年間の治亂興亡の跡をのべた。これが即ち資治通鑑で、二百九十四卷の編年體歴史である。

概 括

中古期は、晉が天下を一統した九四〇年頃から、南宋の中世頃に蒙古人の勃興した一八六〇年頃までの間で、わが第十五代應神天皇の御代から、第八十三代土御門天皇の御代に至る時代に當る。

この期のはじめに、漢以來支那の内地に雜居してゐた異種族は、晉の内亂及び人心のくづれたのに乘じて、各處に蜂起し、漢族たる晉を破つて、黄河の流域を占め、そこに國をたてたものが、前後およそ十餘の多きに及んでゐる。また晉は、江南にうつつて、揚子江の流域に國を成したが、後、遂に南北朝の世となつて、江南と江北とに二大國が分立し、雙方おの〴〵天下の統一を欲して、相争ひ、隋の起るに及んで、遂に一統された。

隋は、たちまち亡びて、唐の世となつたが、隋唐の時代は、漢族の最も隆盛を極めた時で、その文化が、四圍の諸民族に及んだと同時に、その勢力も、またアジヤの大半に及んだのであつた。しかるに、五代五十餘年の間、天下が分裂して、不統一を極めたので、異種族たる契丹の勃興を招いた。宋はまた天下を一統して、よく漢族の文化を進めたが、文弱の餘弊が甚しく、契丹をおそれ、西夏に苦しみて、また金に迫られ、遂に江南に遷都して、しだいに衰亡の阪を下つた。

年表

(二)

年代は皇紀に據る

時代王朝

年代(天皇)重なる事蹟

西晉 925-976

九二五
九七六 (應神)

司馬炎帝位に即く
匈奴晉を滅ぼす

東晉 977-1080

九七七
一〇四三
一〇八〇 (仁德)

東晉の元帝位に即く
肥水の戦
劉裕東晉の位を奪ひて宋の武帝となる

南北朝 1099-1249

一〇九九
一一三九
一一六二
一一九五
一二一〇
一二二七
一二三二
一二三七
一二四一
一二四九 (崇峻)

後魏江北を一統す
宋亡び齊代る
齊亡び梁代る
後魏東西に分裂す
東魏亡び北齊起る
梁亡び陳代る。西魏亡び北周起る
新羅、任那の日本府を滅ぼす
北周、北齊を滅ぼし江北を一統す
北周、楊堅に奪はる
隋、陳を滅ぼし南北始めて一統す

隋 1241-1278

一二六七
一二七一
一二七三
一二七四
一二七九 (推古)

煬帝の時日本の使節小野妹子來る
煬帝の高句麗親征
高句麗再征
また高句麗を征す
隋亡ぶ

唐

1278-1567

一二七八
一二八九
一二九〇
一二九一
一二九五
一三〇四
一三一〇
一三一七
一三二二
一三二八
一三五〇
一三七三
一四一五 (孝謙)

李淵帝位に即きて唐の高祖となる
太宗の時支那印度に行く
太宗の時東突厥を滅ぼす
祿教唐に入る
景教唐に入る
太宗高句麗を征伐す
高宗の時大食來り通ず
高宗西突厥を討平ぐ
高宗百濟を滅ぼす
高宗高句麗を滅ぼす
武后帝位に即き國號を周と改む
大祚榮渤海國を建つ
玄宗の時安祿山反す

年表

(一)

年代は皇紀に據る

時代

王朝

年代

(天皇)

重なる事蹟

古					中				
宋南	宋北	五代	唐	隋	北朝	南朝	東晉	西晉	
1787-1939	1620-1787	1567-1620	1278-1567	1241-1278	1099-1249		977-1080	925-976	
一七八七 一七八五 一七八七 一八〇一 一八五六	一七七八 一七七五 一七二九 一六九八 一六七〇 一六三九 一六二〇	一六二〇 一六〇七 一五九六 一五八六 一五八三 一五七六 一五七三 一四一五 一五六七	一三三〇 一三二八 一三二七 一三二五 一三二〇 一三一七 一三一四 一三〇四 一二九五 一二九一 一二九〇 一二八九 一二七八	一二七九 一二七四 一二七三 一二七一 一二六七	二二四九 二二四一 二二三七 二二三三 二二二七 二二二〇 二一九五 二一六二 二一三九 二〇九九	一〇九四 一〇八三 一〇八〇	九七七 九七六	九二五 九七六	
(崇德) (崇德) (崇德) (崇德) (後鳥羽)	(崇德) (崇德) (鳥羽) (後朱雀) (後三條) (圓融) (圓融)	(村上天) (村上天) (村上天) (朱雀) (醜鞠) (醜鞠) (醜鞠) (醜鞠) (醜鞠)	(推古) (舒明) (舒明) (舒明) (舒明) (孝德) (皇極) (舒明) (舒明) (舒明) (舒明) (推古)	(推古) (推古) (推古) (推古) (推古) (推古) (推古) (推古)	(崇峻) (敏達) (敏達) (敏達) (欽明) (欽明) (安閑) (武烈) (雄略) (允恭)	(允恭) (仁德) (仁德)	(仁德) (仁德)	(應神) (仁德)	
高宗即位。宋室南渡 宋金と和す 韓侂胄權を専らにし朱熹等を斥く	趙匡胤帝位に即き宋の太祖となる 太宗の一統。太宗遼を伐つて敗る 遼の聖宗高麗を伐つ 仁宗の時李元昊大夏皇帝と稱す 神宗王安石を用ふ 徽宗の時女眞のアクダ帝と稱す 遼亡ぶ	朱全忠帝位に即き後梁の太祖となる 契丹の耶律阿保機帝と稱す 王建高麗を建國す 後梁亡び後唐起る 耶律阿保機渤海を滅ぼす 後唐亡び後晉起る 契丹の太宗後晉を滅ぼす 後漢起る 後周、後漢に代る 後周亡ぶ	李淵帝位に即きて唐の高祖となる 太宗の時玄奘印度に行く 太宗の時東突厥を滅ぼす 祿教唐に入る 景教唐に入る 太宗高勾麗を征伐す 高宗の時大食來り通す 高宗西突厥を討平ぐ 高宗百濟を滅ぼす 高宗高勾麗を滅ぼす 武帝帝位に即き國號を周と改む 大祚榮渤海國を建つ 玄宗の時安祿山反す 唐亡ぶ	煬帝の時日本の使節小野妹子來る 煬帝の高勾麗親征 高勾麗再征 また高勾麗を征す 隋亡ぶ	後魏江北を一統す 宋亡び齊代る 齊亡び梁代る 後魏東西に分裂す 東魏亡び北齊起る 梁亡び陳代る。西魏亡び北周起る 新羅、任那の日本府を滅ぼす 北周、北齊を滅ぼし江北を一統す 北周、楊堅に奪はる 隋、陳を滅ぼし南北始めて一統す	劉裕東晉の位を奪ひて宋の武帝となる 肥水の戦	東晉の元帝位に即く 何奴管を滅ぼす	司馬炎帝位に即く 匈奴管を滅ぼす	

源實朝の
征夷大將
軍たる頃

蒙古人の原住地

テムヂンの蒙古
諸部一統

チンギス汗

チンギス汗

第三篇 近古

第一章 蒙古の勃興

蒙古の勃興 蒙古人は、オノン(斡 斡)ケルレン(怯 綠)兩河上流地の遊牧種族である。宋・金ともに衰へた頃、そこにテムヂン(鐵 木)といふ豪傑



が出て、しだいに諸部落を従へ、一八六六年1206 (南宋の寧宗の御代、土)盛んな大汗即位式を挙げた。これが即ち蒙古の太祖チンギス汗(成 汗)である。

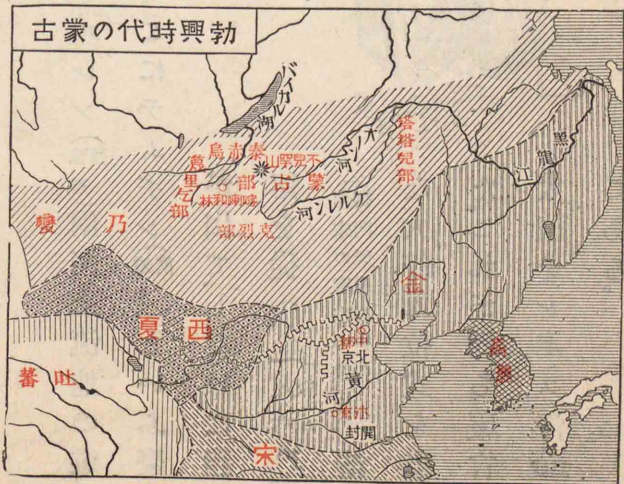
蒙古人の性質

太祖の業 蒙古人は、騎馬に長じ、勇敢で忍耐力が強く、且、君主に對して、最も忠實で、敵を攻める時には、城池をこぼち、兵民をほふり、財物を奪はねばやまぬといふ風がある。太祖は、これをひきゐ、まづ西夏を攻めて、これを降し、ついで金を侵して、その黄河以北の地をとり、轉じて中央アジアの諸國を平げ、さらに將を遣はして、遠くロシアに侵入させ、みづからは印度の西北部に入り、やがて、ひきかへした。後、ほどなく、太祖は、全く西夏をほろぼし、進んで金を伐たうとして進軍したが、途中、病にかゝり、一八八七年(南宋の末、後期)遂に死んだ。

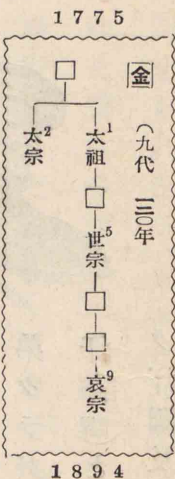
中央アジア諸國 平定
ロシア遠征

西夏を滅ぼす

太祖の死



北條泰時の執權たる頃



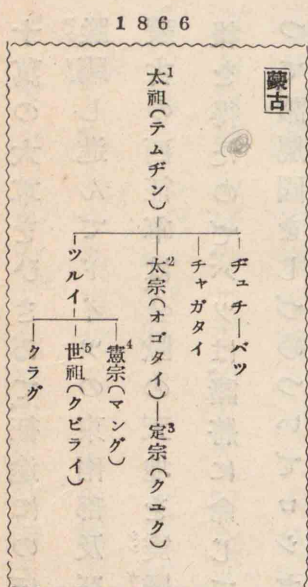
太宗の業

太祖の死後、その第三子オゴタイ(窩淵)が、大汗の位に即いた。

これが太宗である

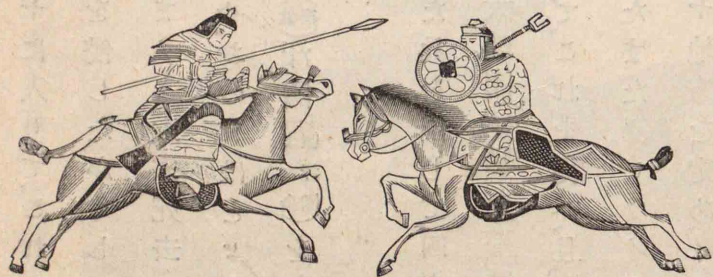
太宗は、宋と約し、一八九四年(四條天皇の御代、北條泰時執權時代)相共に金を伐つて、これをほろぼし、ついで都をカラコルム(和略林)にさだめ、さて、いよく大規模の征討軍を起して、宋を攻め、また兵を出して、高麗を降し、別に甥バツ(都拔)をしてヨーロッパに侵入させた。

宋を侵し高麗を降す
蒙古の兵士



バツの西征

バツは、一八九六年(南宋の理宗の世、四條天皇の御代)五



ロシアその他の蹂躪

キプチャク汗國の建設

クビライの南征

世祖
クラグの西征

十萬の大軍をひきゐて、征途にのほり、翌年、ロシアに入りて、これを蹂躪し、進んでドイツの東南部及びホンガリヤを侵した。かくして、蒙古の西征軍は、全歐の天地を震撼させたが、たまく、太宗死去の報を得たので、バツは、諸將に命じて、東にかへらせ、おのれはとまづつて、諸屬國をしづめ、ついでロシアにキプチャク汗國（欽察汗國、また金帳汗國）をたて、サライを都とした。

憲宗の業

太宗の後、一代をへて、憲宗に至り、また兵を出して、四方



を征した。弟クビライ（忽必烈）は、大理國（雲南の地）を平げ、轉じてチベット（西藏）に攻めこんで、これを従へ、且、別軍を派して、安南を征服させた。またクビライの弟クラグ（旭烈兀）は、遠く西アジア地方を定め、イル汗（伊兒汗）と稱して、タブリスに都し、バツのキプチャク汗國及びチングス汗の次子チャガタイ（察合台）の

憲宗の南征

世祖の出陣

世祖の南伐

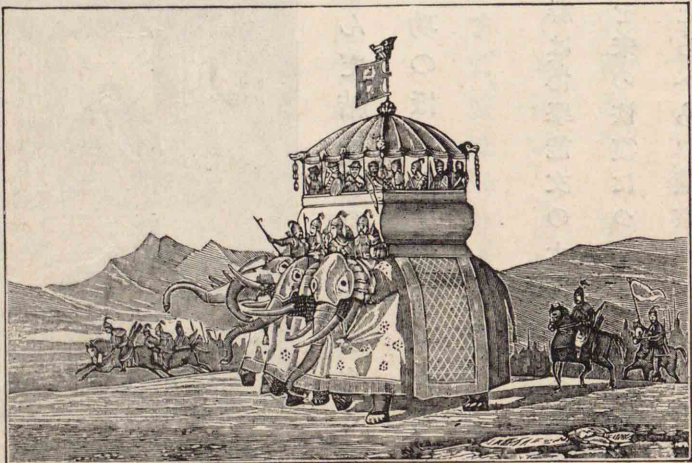
前年龜山天皇踐祚

封ぜられたチャガタイ汗國（イリ地方の中央アルジャを領す）とともに、いはゆる蒙古の西方三大汗國をなした。憲宗も、また親しく軍を率ゐ、クビライ等と途を分つて、宋を攻めたが、功なかばで、陣中に病死した。

第二章 世祖の業

東西の交通

世祖の業 憲宗死後、クビライが大汗の位にのぼつて、世祖となつた。世祖は、都を燕京（今北京）にうつし、後、國號を元とあらため、南伐して宋の臨安をおとし入れた。この時、宋には、誠忠の士文天祥などがあつて、恢復

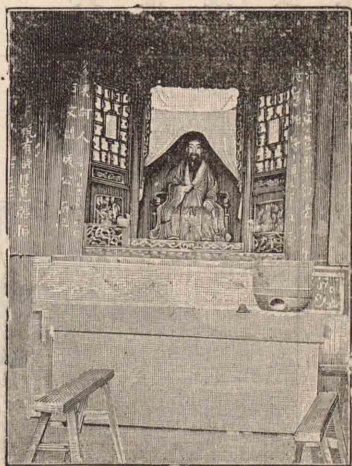


宋の滅亡

文天祥

宋滅亡の大原因

をはかつたが、國力が甚しく衰弱してゐたので、到底、元軍に敵しがたく、しだいに南方におひぢぢめられ、一九三九年（後宇多天皇の御代、北條時宗執權時代）遂に全く亡びた。宋は、太祖の即位から、こゝに至るまで、實に十八代、三百二十年で、國初以來、文治をたふとんだ結果、名臣・大儒が多くあらはれたが、兵力は、とかくに振はず、武功のほとんど觀るべきものがなくて亡びた。



北京育賢坊の文天祥祠の裏

文天祥筆蹟
模刻



◇文天祥 文天祥は、博學能文の士で、忠義の心、極めてふかく、力を宋の恢復につくしたが、事ならずして、元軍にとらへられ、燕京の獄につながれ、屈せずして、遂に斬られた。世に名高い正氣歌は、

文永の役
弘安の役

東征の失敗

南方經略の成功

蒙古領域の大

東西の交通と通
商貿易
宗教學藝の傳來

マルコッポロ
來る

その獄中の作である。

元の極盛 世祖は、またわが日本をも従へようとして、前後二回、兵を出したが、かへつて大いに敗れ、その計劃が、全く水泡に歸した。さりながら、元は、その南方經略には成功し、緬國（マル）占城（フランシス領、安南・シヤムから、ジャヴァスマトラ等に至るまで、或は降り、或は朝貢したのであつた。

東西の交通

かくの如く、蒙古の領地は、實に空前の大を致して、アジアの一半とヨーロッパの東部とにわたり、その域内には、道路・宿驛の制が、ほゞ備はり、守備隊の配置等も、またやゝとゞのつてゐたので、東西の交通は、おのづから開けた。それにつれて、通商・貿易も盛んになり、はるく、ヨーロッパから來て、キリスト教及び天文・數學その他の學藝を傳へたものも少くなかつた。その中で、イタリヤの商人マルコッポロは、世祖につかへて、久しく支那にとゞまつてゐたが、

北京天文
の渾天儀

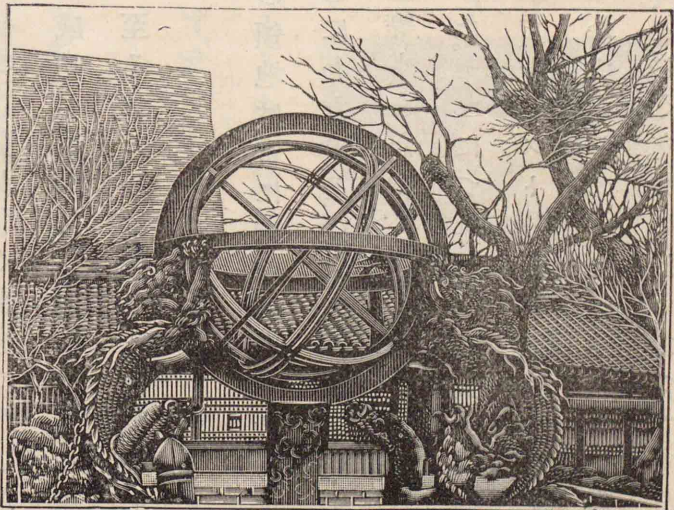
マルコ
ポーロ

歸國の後、東方見聞録^{アラ}を著し、その書中にジバング^(日本)の富盛なありさまをのべはじめてわが日本をヨーロッパ人に紹介^{キウ}した。

◇マルコポーロと東方見聞録



マルコ
ポーロは、一
九一四年北
條時頼執



元の代に建造したる

権時代、イタリアのヴェニスに生まれた人で、一九三一年に父ニコロ・伯父マフエオと共に蒙古に向ひ、一九三五年北條時宗執権時代、元の大都(北京)に至つて、世祖に謁^{エツ}し、その寵を得て、官吏に登庸され、久しく支那にとまつた。

Quam aut magni kaam respectui oblari fuit ipse rex summe benignus erat et eos suscepit alacriter Inquisit aut ab eis p multas vices de condicionib⁹ occidentalium pccu de impatore ronoz de regib⁹ et principib⁹ xpianis e qliter i eoz regnis suabat iusticia qliter ecia i rebus bellicis se de bat Inquisit ecia diliget de morib⁹ latinor et sup oia diligenci⁹ interrogavit de papa xpianor et de cultu sivi xpi ane Ipi at vt viri prudentes sapient ad singula ruderunt ppter qouq sepe eos ad se introduci iubebat habuerunt q⁹ gratiam in oculis eius.

Quo ab ipso rege ad romu potifice missi sut Capitulu quartu

Quada igitur die pfatus kaam consilio prius cu baro nibus habito rogavit pfatos viros vt sui amore redi rent ad papa cu vno de suis baromb⁹ qui dicebat cogatal p pte ipius sumu pontifice xpianor rogaturi quaten⁹ ad eu centu sapientes xpianos dirigeret qui scirent ondere su is sapiencijs ronabilis et prudeter si veru erat q xpianor fides esset melior int oes. et q dij tartaroz eent demones et q ipsi et orientales alij decepti erant in suoz deoz cultura desiderabat cam audire ronabilis q fides esset ronabilis y mitada Quis pcedissent bustis cora eo vicies se ad cucta eius bnplacita preparatos fecit rex scribi tras ad romanu pontifice in lingua tartaroz quas illis tradidit deserdoas Tabula ecia aurea testimoniale ill tradi iussit signo regali sculptu et isignita. in f⁹ p suetudine sedis sue qua qui desert deduci debet de loco ad locu a cunctis superiorib⁹ ciuita tu suo imperio subiectaz cu omni sua comitua securus e q diu imozari voluerit i ciuitate vel opido det illi de expē sis et necessarijs oibus integratit puideri Insup impo suit ei rex vt de oleo lapidis q pendebat ad sepulchru dñi nostri ihu xpi in ibrlm ei deserrent in rebitu. Ardebat

東方見聞録の第一部

これは東洋文庫所蔵「東方見聞録」の一部で、一四八五年にアントワ
ープで刊行したラテン譯の初版である。活版術發明後、まもない時
の印書の體裁をうかがふ一材料ともなる。

一九五五年、マルコは、遂に國にかへり、三年の後、ヴェニスとジェノアと戦つた
際とらはれて、ジェノアの獄に投ぜられた。この時、同房のものに、東方にあつ
て見聞した所を語つて、これを筆記させた。「東方見聞録」が即ちそれである。
その記事中に「ジバングは、支那大陸の東方四千哩の海中にある一大島で、
住民は、色白く、風采美しくして、偶像ををがむ。黄金を多く産出してゐるが、
この地に來る他國の商人は、甚だまれである。國王の宮殿は、黄金を以て、そ
の屋根をふき、床は、あつゝい黄金の伸板シュイタを以て、これを敷きつめ、窓も黄金で
造つてゐる。この島には、また多くの、赤色の眞珠シンジュをも産する云云」とある。こ
れが當時のヨーロッパ人の精神を大いに刺戟したのである。

第三章 元の衰亡 明の統一 チムール

元の衰亡 元の世祖は、支那の天子となつて、支那及び南方に威を
ふるつたが、その大版圖の西部には、だんく威令が行はれなくな
つて、チャガタイ汗國もキプチャク汗國もイル汗國も、遂にみな分離獨

立
三汗國の分離獨

元の紙幣
財政困難

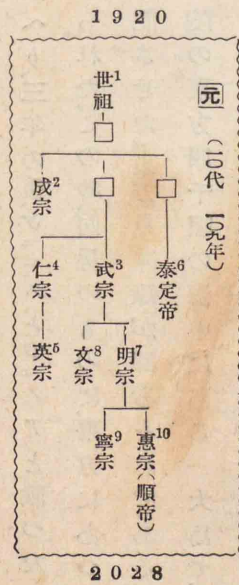


立して、相たがひに争つてゐた。また元は、はやくから財政の困難に苦しみ、世祖以來、これが整理の途に窮して、しきりに

漢人の蜂起

朱元璋金陵に據る

重税をとりたて、且みだりに紙幣を發行して、一時を彌縫したために、その財政がますますみだれて、物價はいよゝゝ騰貴し、人民の困弊は、その極に達した。この時に乘じ、かねて不平をいだいてゐた漢人等が、各地に蜂起し、二十餘年の大亂の後、群雄中の大立物である朱元璋は、二〇二八年（後龜山踐祚した）金陵（江蘇省寧縣）に於て、帝位に即き、明の太祖となつて、ますます元に迫つたので、



時の元の天子は、蒙古ににげかへつた。世祖が燕京に都してから、ここに至るまで、百五年である。

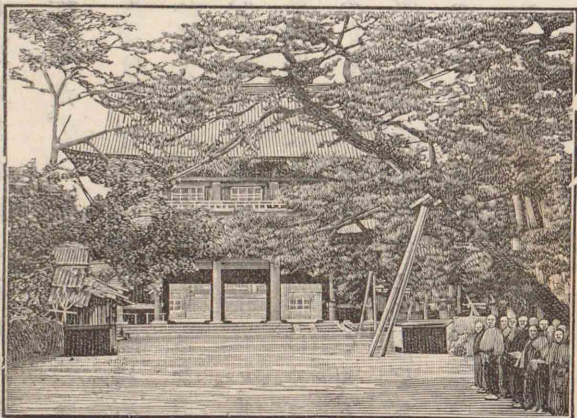
明の太祖の業

明の太祖は、即位の後、



後、ほどなく天下を一統し、支那は、また漢人の天子をいたゞくこととなつた。太祖は、

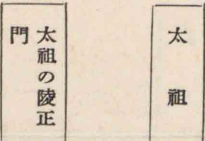
心を國政に用ひ、同族の諸王を要地に封じて、帝室の藩屏としたが、太祖についだ、惠帝（太祖の孫）は、諸王の強大なるのを憂へ、漢の景帝の例にならつて、これを抑へることをこゝろみ、



江蘇省寧江に於てつた〇八年の營造にかゝる

太祖の政治

太祖の一統



この頃足
利義滿驕
横を極む

燕王の反
北京僉都

かへつて叔父燕王の反を招いた。燕王は大舉して金陵に迫り、遂にこれを攻めおとし、自立して成祖となり、燕京を北京とあらため、ついで都をそこにうつし、金陵を南京と稱した。

◇馬皇后 太祖の皇后馬氏は、よく太祖を助けた賢婦人である。はじめ太祖が兵を起して、しだいに勢を得た頃、馬氏は太祖に「人を殺さざるを以て本となさば、人心、おのづから歸服せん。人心の歸する所は、即ち天命のある所なり」と説いたのであつた。後、太祖が帝位に即くに及んで、馬氏は立てられて皇后となつたが、謙遜で慈悲の心がふかく、その婦徳は、ひろく天下にきこえた。殊に宮女等は、ふかく後の徳に服し、その死んだ時には、徳をおもひて忘れ難しといつて、かなしんだといふことである。

成祖の政治

成祖の治

南海諸國の入貢

成祖は、産業をすゝめ、教育をはげまし、よく天下を治めたが、惠帝が、金陵陷落の際、海外にのがれたるべきを疑ひ、鄭和を遣はして、これをさぐらせた。鄭和は、前後七回、南洋及び印度洋に航して、大いに明の威徳を示したので、南方諸國は、多く明に入貢するや

三汗國の衰微
チムールの興起

成祖

チムールの併吞

チムールの東征

うになり、通商貿易も、したがつて發達した。

チムールの業

これよりさき、元朝が東方に於て勢力を失つた頃、

蒙古の西方三大汗國も、また皆衰へたが、やがてチャガタイ國にチム

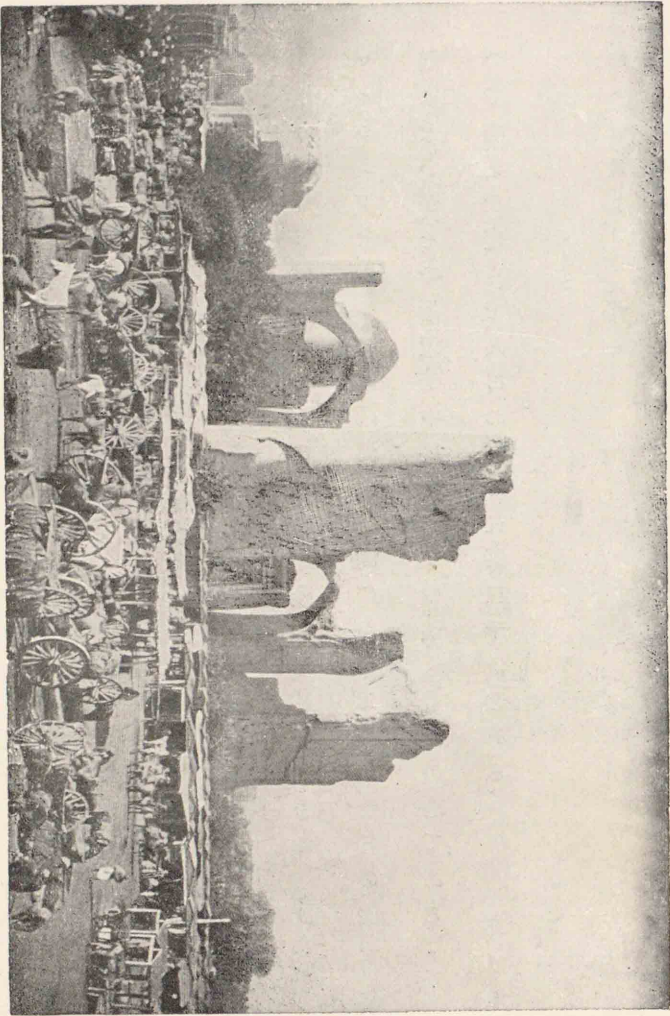
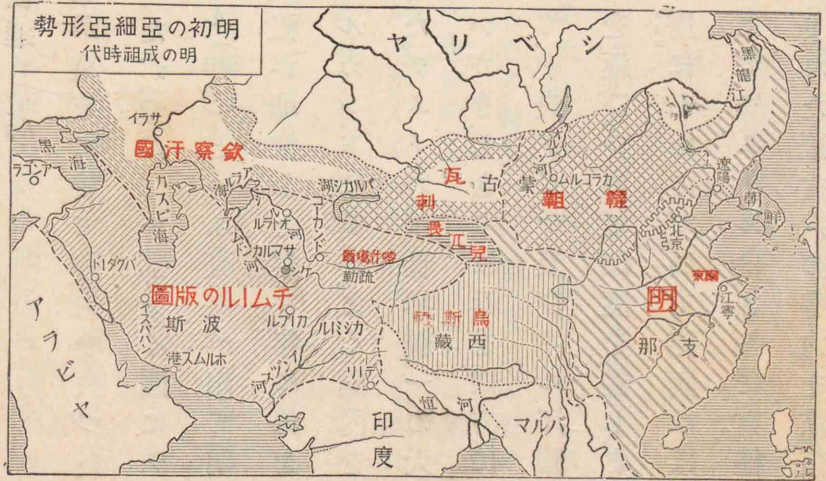


ール(帖木兒)といふ豪傑が出て、明の太祖が即位した翌々年に、都をサマルカンドに奠め、よく國內を定めた。チムールは、世界統一の大志をいだき、しきりに兵を四方に用ひて、中央アジア及びイル汗國等

をあはせ、キプチャク汗を伐つて、これを逐ひ、ついで印度を侵し、またオスマン・トルコを攻めて、その帝を虜にしたので、西方諸國は、ほとんど皆その威風になびき服した。そこで、チムールは、さらに東征して、支那を平げ、明のためにくつがへされた蒙古人の勢力を恢復し

ようと欲したが、大舉東行の途中、病んで死んだ。これは實に明の成祖の在位中の事で、¹⁴⁰⁵二〇六五年(後小)松天皇の御代(足利將軍義持時代)に當るのである。

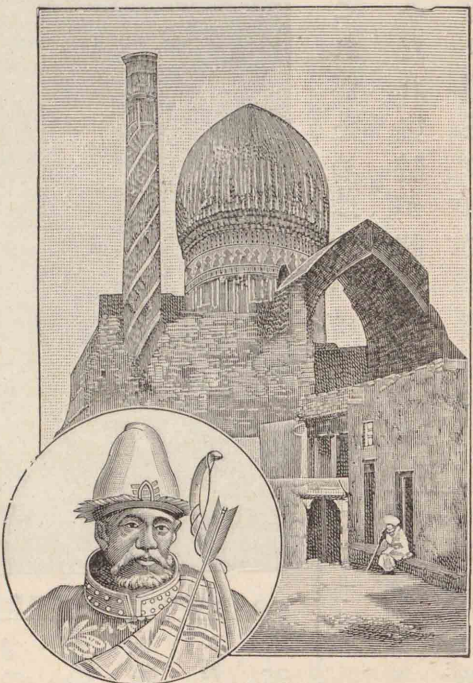
◇チムールの教訓 チムールは、一九九六年(湊川の戦のあつた年)、サルカンドの南ケシ(渴石)に生まれた人である。或時、一小蟲が草の莖をよぢのぼるのを見たが、その小蟲は、幾度も幾度も地におちながら、屈せずして、遂にその目的を達した。チムールは、大いにこれに感じ、左右の者に向つて、この小蟲は、忍耐不屈である。われ等は、これを手本とすべきだ。人



場市るけに於に時現と墟廢のムヌーカ—イバイン

バイバイ||カーヌムは、チムールがその愛妃のためにたてた廟殿で、サマルカンドにある。今は、全く荒廢したが、それでもチムール時代の全盛の一斑を窺ふことができる。サマルカンドは、シル・アム兩河の中間にあつて、今は、昔日の盛観はないが、その附近が、中央アジア中、最も豊沃の地であるので、商業が盛んで、人口およそ五萬五千ほどある。

チムールとその廟



廟はサマルカンドにあり

もし忍耐力を張り、深く謀り、遠く慮つて、一たび定めた目的に向ひ、百折してもたゆまず進めば、遂にその志を達することが出来るであらうといつた。

宣宗の治

明は、成祖の後、しばらくは、

その業をおとさず、成祖の孫宣宗センソウの世には、殊に多く良臣が朝廷にあつて、國內よく治まり、藝術の如きも、いちじるしく進んだ。わが足利義満は、太祖の時以來、しばらく明と交通貿易したが、この頃、足利義教も、また好ヨシミを明に修めた。爾後、わが國人は、ますますしげく明に往來して、藥種、織物等を輸入し、且、畫法や磁器の製法などをも傳へ

明の盛時

日明交通

第四章 明の衰運 朝鮮の建國 滿洲の興起

宦官の專横と内亂

はじめ、太祖は、宦官をおさへて、國政にあづか



のもたし刻に石るあに縣陽貴省州貴

らせなかつたが、成祖は、その立つ時、宦官の内通したのを徳とし、漸くこれを親近した。これから、宦官は、しだいに專横になり、武宗に至つて、最も甚しく、國政も、

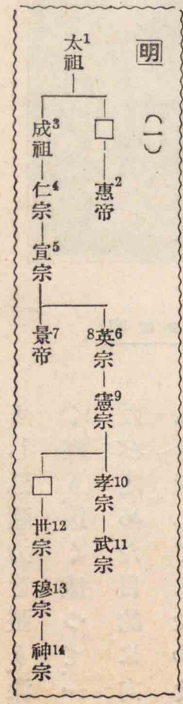
宦官專横の由來

王守仁

盜賊及び諸王の亂

これがために大いにみだれ、盜賊が諸方に起り、諸王の中にも叛

2028



陽明

北虜南倭の禍

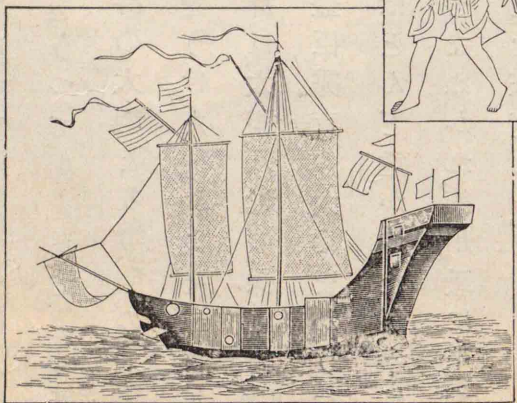
くものが出た。幸にも、名儒王守仁(陽明)等の盡力によつて、これを平げ

北虜

王守仁筆蹟

南倭

倭寇及びその船



これよりさき、元の後なるタタール(韃靼)が、北方に威勢を振つて、内外蒙古を一統し、しばしば明に寇して、これを苦しめた。明は、これがために大いに財をつひやし、また甚しく兵力をつからせたのであつたが、國初以來、また倭寇になやまされ、後には、明の海賊も、これに加はりなどして、盛んに南支那の沿海をあらした。明人は、非常にこの倭寇をおそれ、タタールとならば稱して、北虜南倭といひ、ふかく警戒したのであつた。

高麗の衰微

李成桂の自立

豊臣秀吉の朝鮮出兵

神宗

萬曆の役及びその影響

朝鮮の建國

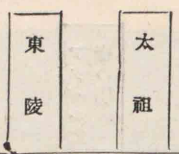


明末の形勢

秀吉が兵を朝鮮に出した時は、明は、あたかも神宗の世であつた。神宗は、朝鮮王の請にまかせ、兵を派して、これを援け、か

高麗は、相ついで遼金、元に従ひ、明の起るに及んで、またこれにも服屬したのであつたが、内には、もろくの政治が、おひおひにみだれ、外には、倭寇の害が甚しかつたので、國勢が、日に月に衰へた。この時にあつて、李成桂が、倭寇をうつて、功をたて、二〇五年(吉野朝廷の京都に還御せられた年)に、遂に自立して朝鮮の太祖となり、明の太祖から封冊をうけた。後、およそ二百年をへて、朝鮮は、太祖八世の孫宣祖の時、わが豊臣秀吉の大兵をかうむり、國運も、ほとんど危かつたが、幸にして覆滅をまぬかれ、徳川氏に至つて、その國交を恢復した。

黨争
女眞族の勃興



流賊の蜂起

ヌルハチの興起

へつて大いに敗れた。そのため、明は、いよゝゝ疲弊したのであつたが、後には、黨争の禍が、また甚しくなつて、ますます國政をみだした。



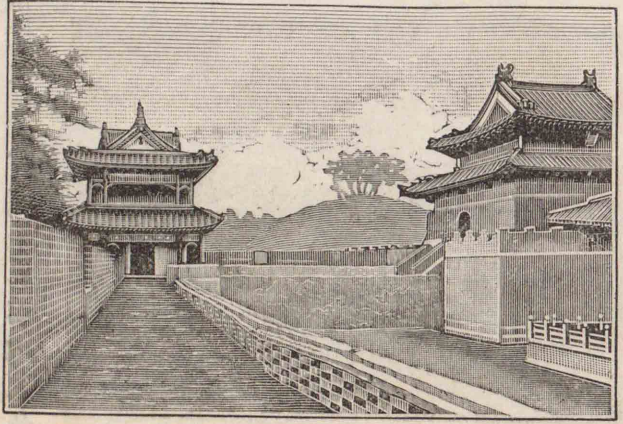
たまたま満洲に女眞族が勃興し、國內諸方に

に流賊も蜂起して、遂にいかんともすべからざるに至つた。

満洲の勃興

女眞族は、金の亡びた後、久しく威勢が振はなかつた

が、明の神宗の時、アイシンギョロ(愛新羅)氏のヌルハチ(哈赤)が、嚇圖阿拉



あに前右てつ向に陵るあに處の里三東る距を城天奉は陵東なを形頭饅に央中の圖たまるゐてつ立が碑の祖太に内樓るゐてつ眠に下のこは骸遺の祖太で陵ち即はのるゐてし

前年大阪
落城豊臣
氏亡ぶ

太祖の即位

瀋陽饗都

アクバル大
帝の廟

チムール死後の
形勢

バベルの創業

(今の興)から起り、しだいに近傍の諸部落を従へて、國を後金と號し、
二二七六年 (水尾天皇の御世、後) 遂に帝位に即いた。これが即ち後金の
太祖である。太祖は、すゝんで瀋陽 (奉天省、遼陽縣) 遼陽等を略し、都を瀋陽に
さだめた。

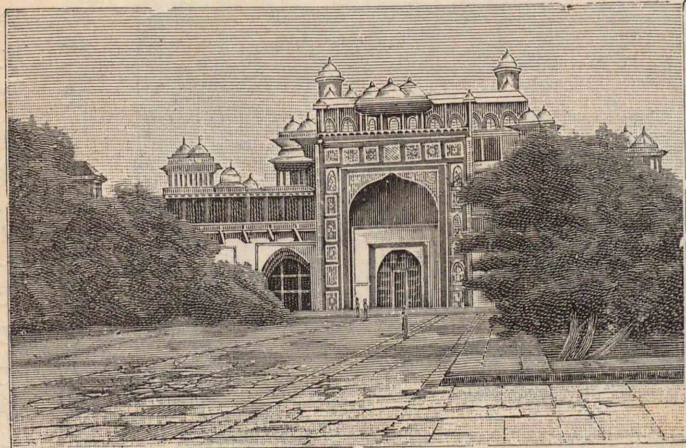
第五章 モゴル帝國

ポルトガル・オランダ

等の東洋経略

モゴル帝國の興衰

チムールの死
後、その國は、たちまち亂れて、それ
ぞれ分裂したが、遠孫バベルに至



るあにラドンクセ度印



ル - ハ マ = ユ ジ タ

この年後
奈良天皇
踐祚

バベル

アクバル及びア
ウランゼブの事
蹟

帝國の衰微

東西交通の困難



り、二一

八六年

1526
明の世、
宗の世、

後柏原天、印度に攻めこんで、印度皇帝の位に
皇の御代、のぼり、デリーに都して、モゴル(兒英臥)帝國の

基をひらいた。バベルの孫アクバルは、世にまれな英傑で、遂にことごとく北中兩印度を定め、曾孫アウランゼブに至つて、また南印度をも併せたが、その死後、暗君が相ついで立つたので、帝國の勢は、だん／＼振はなくなつた。

ポルトガル人の東航 さきに元朝の勢のかたむくとともに、しだいに衰へた東西の交通は、やがて、西アジアにオスマントルコが勃興するに及んで、ほとんど全くその通路を断たれた。しかるに、明の中世頃から、西ヨーロッパの形勢が、しだいにかはり、海路、印度にゆいて、

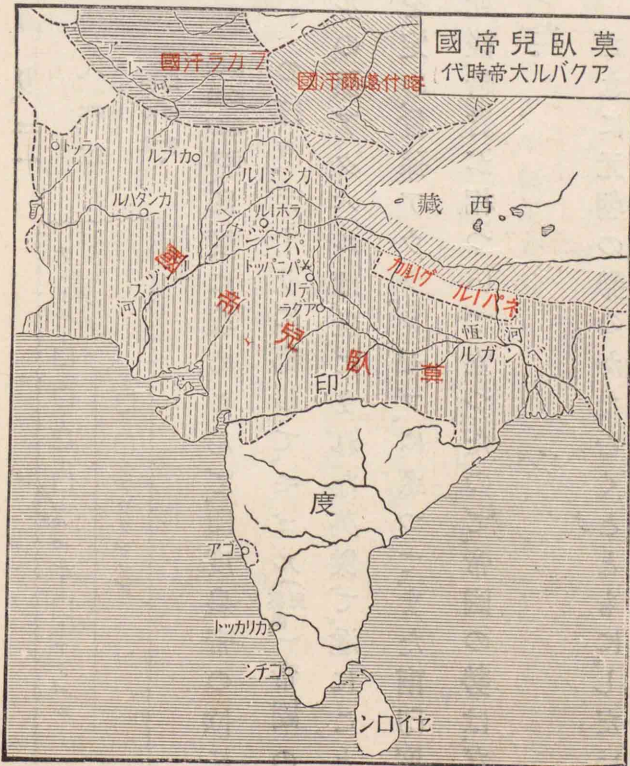
タジュ——マハールは、アグラ市公園の一部にあつて、ジユムナ河に臨んでゐる。これはアクバル大帝の孫シャー——ジェハン帝がその愛妃のために建てた廟殿で、およそ二萬の人を便役し、約二十年を経て出来あがつたものだといはれる。この建築は、白大理石を用ひて作り、世界で最も完備した建築物の一つで、處々に瑪瑙・珊瑚・碧玉の類を嵌入し、結構、壯麗を極め、實にモゴル帝國全盛期の好記念物である。

應仁亂後
二十一年

ポルトガル人の
航海業
アフリカ周航

ポルトガル人の
通商地

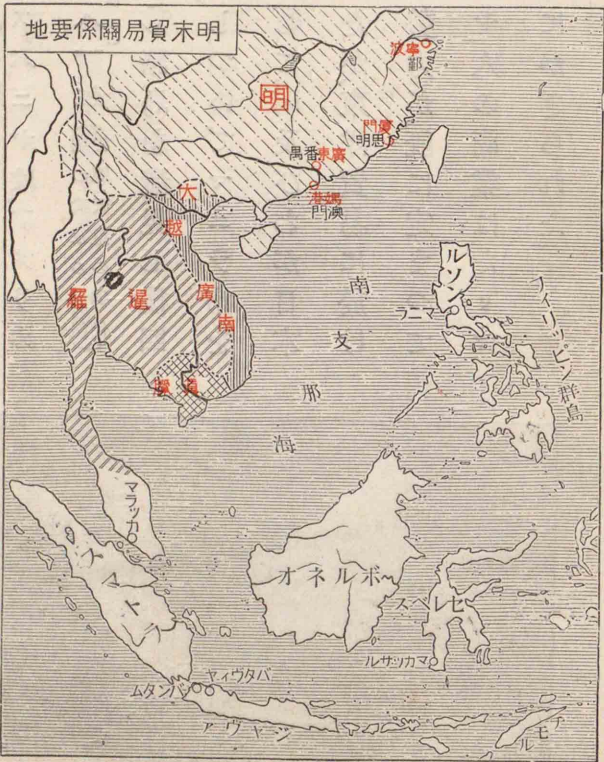
世界の寶庫をさぐらうとする氣運が、だんく起つた。その先鞭をつけたポルトガル人は、しきりに、アフリカ沿岸の探検と、その航路の發見とをつとめ、ヴァスコダガマに至つて、二一五八年(明の孝宗の御代)、遂にアフリカの南端をまはり、はじめて印度に達した。これから、ポルトガル人は、ひきついで、印度に來航し、やがてゴアを取つて、そこに據りしだいにセイロ



二一五八年(明の孝宗の御代) 1498

ポルトガル人が
國に來る

ン島及び印度の諸處に商館を設け、遂にはマラッカを略し、シャム及びマライ群島と交易をひらき、さらに進んで廣東(省)に至り、寧波(縣)に商館をたて、また明から媽港(澳)を租借して、これに據つた。ポルトガル人は、また二二〇三年(明の世宗の世、後奈良)以來、わが日本にも來航して、貿易をい



となんだ。

應仁の亂
後十五年
前年北條
早雲伊豆
を取る

コロンブスのア
メリカ發見

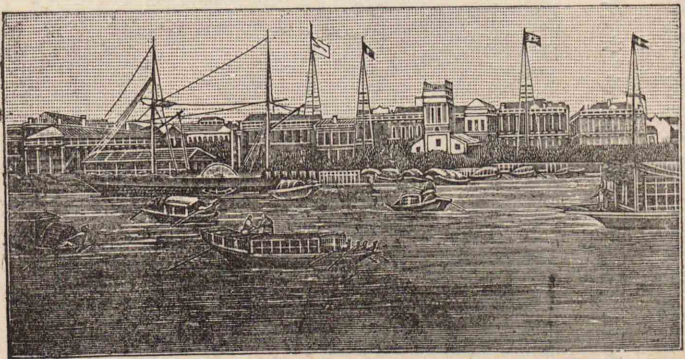
フィリッピン諸
島の發見

廣東に於け
るポルトガ
ル人の商館

イスパニヤ人の
東洋貿易

イスパニヤ人の東航

これよりさき、二一五二年(明の孝宗の世、後土)に、イタリヤ人コロンブスは、イスパニヤから、^{トモツナ}纜をといて、大西洋を西航し、アメリカを發見した。爾後、イスパニヤは、アメリカの拓殖に從ひ、二一八一年(明の武宗の世、後)には、さらにフィリッピン諸島を發見し、後十四年、これを占領し、ついでマニラ市をたて、そこを根據として、明及びわが日本と通商しようとしたが、東洋貿易に於けるポルトガル人の勢力が、既に定まつてゐたので、イスパニヤ人の商業は、たゞマニラとわが平戸とにかぎられた。



オランダ人の東航

その頃、イスパニヤから分離して獨立を宣し

明の使節
來る。秀
吉これを
逐よ

オランダの獨立

イスパニヤ
の船

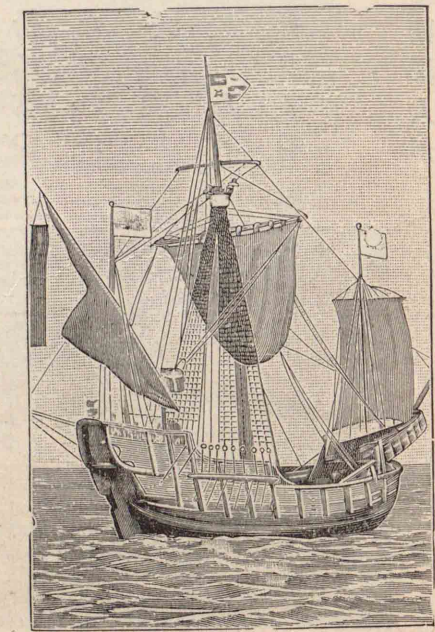
東印度會社と東
洋貿易

オランダ人と日
本

この年關
ヶ原の役
あり

大阪落城
後四年

たオランダも、また東洋貿易に著眼し、二二五六年(明神宗の世、後陽成)には、その國人が、はじめてスマトラ・ジャ



ヴァに來た。後六年、オランダ人は、東印度會社を起し、政府の保護をうけて、東洋貿易に従事し、軍艦・商船を派遣して、到る處で、ポルトガル・イスパニヤの商船を掠め、且、その植民地を奪ひ、二二七九年(明の神宗の世、後水)に、ジャヴァにバタヴィヤ府をたてて、こゝにその根據をかまへた。オランダ人は、またさきにわが平戸に來り、後、臺灣に據り、盛んに貿易をいとなんだ。

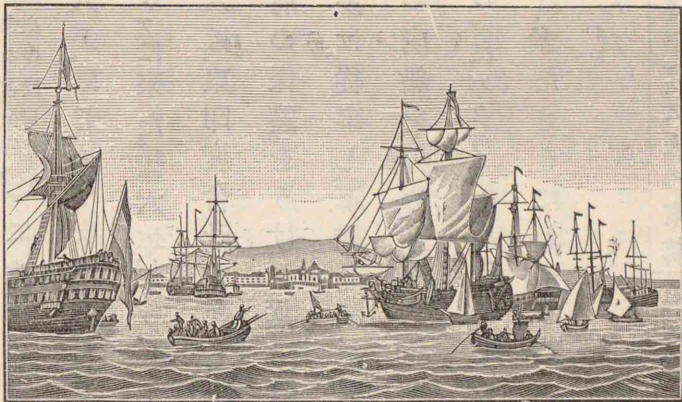
イギリス人の東航

イギリス人も、また二二六〇年(明の神宗の世、後陽成)に、

印度經營

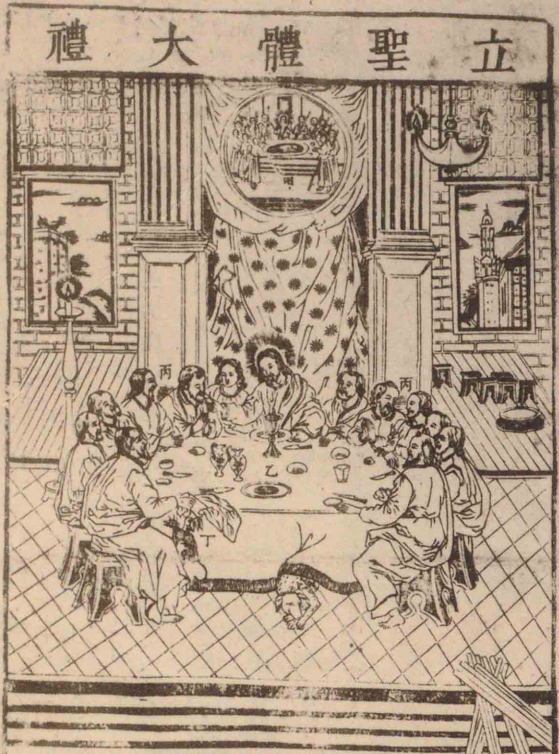
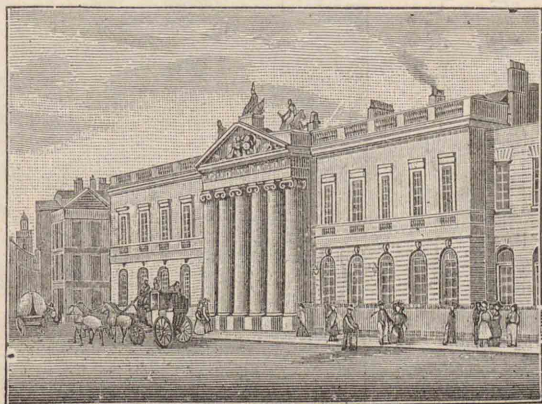
バタヴィヤ
港の光景

ロンドンに
於ける東印
度會社



勢力が、だんく増進した。
キリスト教の東來 右の如く、西洋人が

に、東印度會社を起して、東洋に來たが、
ポルトガル人及びオランダ人に妨げ
られて、その計劃、思ふにまかせず、遂に
印度に退
いて、専ら
これが經
營に當つ
た。これか
ら、印度に
於けるイ
ギリスの



甲耶穌を祭りて、禮
食餅を以て示
其已而救
世全功已竣矣
乙耶穌瀆宗徒定
獲救靈將輝解
及酒以其全能
化成聖體聖血
承留在世以慰
宗徒及後世諸
奉教者
丙宗徒心潔而度
領聖體以救靈
其神魂堪
廣
丁和魯斯亦曾受
其恩食餅之心
不除魔使入其
心而昇天
見符印 三

圖 餐 晚 の 後 最

これは東洋文庫所藏「出像經解」の一部である。「出像經解」は、アレニ Giulio Aleni の撰にかかり、毅宗の崇禎十年(皇紀二二九七年)に刊行された耶蘇繪傳ともいふべきもので、木版畫五十七葉から成り、畫中に説明がついてゐる。アレニは二二四二年頃、イタリヤに生れたゼスイト教團の宣教師で、支那に來て布教に従事し、艾儒略と稱し、漢文の著書が多くある。

ゼスイト教團の
東來

マテオリッ
チ

サヴィエル日本
に來る

マテオリッ
チ支那に來る

西洋學術の輸入



しきりに東來したと共に、キリスト教の舊派に屬するゼスイト教團(天主)の僧侶も、また東洋に來て、布教につとめた。その中で、イスパニヤ人フランシス・サヴィエルが、二二〇二年(明の世、後奈)

良(天)文(十一年)に、ゴアに來著し、後七年、わが日本に來て、各地に布教した。ことと、同派のイタリヤ人マテオリッチ(利瑪竇)が、神宗の時、明に來て、北京に教堂をたて、多くの信徒を得たこととは、共に世にいちじるしいのである。爾後、キリスト教の宣教師は、續々、支那に來て、布教のかたはら、西洋學術書の翻譯等に盡力し、天文、地理、數學、曆法、砲術、測量術等を傳へた。

概括

近古期は蒙古人の勃興した一八六〇年頃から、明の滅亡した三三〇〇年頃までの間で、わが第八十三代土御門天皇から第百八代明正天皇に至る時代に當つてゐる。この期の特色は蒙古人の勃興隆盛であつて、かれらはひろく東西の諸民族を伐ち従へ、その意氣、ほとんど當時の世界を征服せんかの如く見え、一時、歐亞二大陸にまたがった空前の大帝國を建設した。しかるに財政困難その他の原因によつて、國本の動搖を來し、遂に漢族の背亂となり、結局蒙古人は支那本部から驅逐されて、こゝに漢族の明代となり、また漢文化の興隆を見るに至つた。さりながら、蒙古人の勢力は、なほ盛んなるものがあつて、中央アジアにチムールの大帝國が興り、その選孫は、印度にモゴル帝國を起した。また、この期には、東西の大交通があつて、ヨーロッパ人東漸の勢が、いよゝいぢるしくなり、それにともなつて、キリスト教が東流し、西洋の學藝も傳來した。

古

明

2028—2304

- 二二五八 (後土御門) ヴァスコ・ダ・ガマが印度に達す
- 二二七〇 (後柏原) ポルトガル人がゴアを略取す
- 二二七七 (後柏原) ポルトガルの使節始めて明に來り通ず
- 二二八六 (後柏原) バベル、モゴル帝國の基を開く
- 二二〇二 (後奈良) サヴィエール、ゴアに來る
- 二二一六 (後奈良) アクバル大帝即位
- 二二一七 (後奈良) ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる
- 二二二五 (正親町) イスパニヤ人フィリピン諸島を占領す
- 二二三九 (正親町) イギリス人始めて印度に來る
- 二二四一 (正親町) マテオ・リッチ明に來る
- 二二四三 (正親町) 滿洲ヌルハチの興起
- 二二五二 (後陽成) 神宗の時豊臣秀吉朝鮮を伐つ
- 二二五五 (後陽成) オランダ人始めて印度に航す
- 二二六〇 (後陽成) イギリス人東印度會社を建つ
- 二二七六 (後水尾) ヌルハチ帝位に即く
- 二二七九 (後水尾) オランダ人バタヴィヤに據る
- 二二八四 (後水尾) オランダ人臺灣を占領す
- 二二八七 (後水尾) 清の太宗朝鮮を征伐す
- 二二九一 (明正) 李自成亂を作す
- 二二九六 (明正) 清の太宗國號を清と改む
- 二三〇四 (後光明) 李自成北京を陥れ明亡ぶ

年表

(三)

年代は皇紀に據る

時代王朝

年代 (天皇) 重なる事蹟

近	古
(元) 蒙古 1866—2028	明 2028—2304
<p>一八六六 (土御門) テムチン大汗の位に即く 一八七九 (順德) チンギス汗の西征 一八八七 (後堀河) チンギス汗西夏を滅ぼす 一八九四 (四條) 太宗金を滅ぼす 一八九七 (四條) バツ、ロシヤに侵入す 一九〇二 (後嵯峨) キブチャク汗國建設 一九一八 (後深草) イル汗國の建設 一九二〇 (龜山) クビライの即位 一九三五 (後宇多) マルコッポロ支那に来る 一九三九 (後宇多) 世祖南宋を滅ぼす 一九四一 (後宇多) 世祖の時日本に寇して大敗す(弘安の役) 二〇二八 (後龜山) 元の滅亡</p>	<p>二〇二八 (後龜山) 朱元璋帝位に即き明の太祖となる 二〇二九 (後龜山) チムール、中央アジアを定む 二〇五〇 (後龜山) チムール、キブチャク汗を破る 二〇五二 (後龜山) 李成桂朝鮮王となる 二〇五九 (後小松) 燕王兵を擧ぐ 二〇六二 (後小松) 成祖の即位。アンゴラの戦(チムール、オスマン トルコを破る) 二一五八 (後土御門) ヴアスコ ダ ガマ印度に達す 二一七〇 (後柏原) ポルトガル人ゴアを略取す 二一七七 (後柏原) ポルトガルの使節始めて明に來り通ず 二一八六 (後柏原) バベル、モゴル帝國の基を開く 二二〇二 (後奈良) サウイエル、ゴアに來る 二二一六 (後奈良) アクバル大帝即位 二二一七 (後奈良) ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる 二二二五 (正親町) イスパニヤ人フィリッピン諸島を占領す 二二三九 (正親町) イギリス人始めて印度に來る 二二四一 (正親町) マテオ リツチ明に來る 二二四三 (正親町) 滿洲ヌルハチの興起 二二五二 (後陽成) 神宗の時豊臣秀吉朝鮮を伐つ 二二五五 (後陽成) オランダ人始めて印度に航す 二二六〇 (後陽成) イギリス人東印度會社を建つ 二二七六 (後水尾) ヌルハチ帝位に即く</p>

年表

(三)

年代は皇紀に據る

時代王朝

年代 (天皇) 重なる事蹟

<p>一八六六 (土御門) テムチン大汗の位に即く 一八七九 (順德) チンギス汗の西征 一八八七 (後堀河) チンギス汗西夏を滅ぼす 一八九四 (四條) 太宗金を滅ぼす 一八九七 (四條) バツ、ロシアに侵入す 一九〇二 (後睦峨) キブチャク汗國建設 一九一八 (後深草) イル汗國の建設 一九二〇 (龜山) クビライの即位 一九三五 (後宇多) マルコッポロ支那に来る 一九三九 (後宇多) 世祖南宋を滅ぼす 一九四一 (後宇多) 世祖の時日本に寇して大敗す(弘安の役) 二〇二八 (後龜山) 元の滅亡</p>

近古
 蒙古(元)
 1866—2028

<p>二〇二八 (後龜山) 朱元璋帝位に即き明の太祖となる 二〇二九 (後龜山) チムール、中央アジアを定む 二〇五〇 (後龜山) チムール、キブチャク汗を破る 二〇五二 (後龜山) 李成桂朝鮮王となる 二〇五九 (後小松) 燕王兵を擧ぐ 二〇六二 (後小松) 成祖の即位。アンゴラの戦(チムール、オスマン トルコを破る) 二一五八 (後土御門) ヴァスコ ダ ガマ印度に達す 二一七〇 (後柏原) ポルトガル人ゴアを略取す 二一七七 (後柏原) ポルトガルの使節始めて明に來り通す 二一八六 (後柏原) バベル、モゴル帝國の基を開く 二二〇二 (後奈良) サウイエル、ゴアに來る 二二一六 (後奈良) アクバル大帝即位 二二一七 (後奈良) ポルトガル人媽港に商館を置くことを許さる 二二二五 (正親町) イスパニヤ人フィリッピン諸島を占領す 二二三九 (正親町) イギリス人始めて印度に來る 二三四一 (正親町) マテオ リッ チ明に來る 二三四三 (正親町) 滿洲ヌルハチの興起 二三五二 (後陽成) 神宗の時豊臣秀吉朝鮮を伐つ 二三五五 (後陽成) オランダ人始めて印度に航す 二二六〇 (後陽成) イギリス人東印度會社を建つ 二二七六 (後水尾) ヌルハチ帝位に即く 二二七九 (後水尾) オランダ人バタヴィヤに據る 二二八四 (後水尾) オランダ人臺灣を占領す 二二八七 (後水尾) 清の太宗朝鮮を征伐す 二二九一 (明正) 李自成亂を作す 二二九六 (明正) 清の太宗國號を清と改む 二三〇四 (後光明) 李自成北京を陥れ明亡ぶ</p>
--

2028—2304

明

古

前三年徳川家光征夷大將軍に任ぜらる

朝鮮征伐

李自成の北京焚掠

明への侵入

第四篇 近世

第一章 清の統一

太宗の業

後金の太祖は、1626二二八六年(明の熹宗の世後水尾天皇の御代)に死んで、その



子太宗が立ち、兵を發して朝鮮を伐つた。朝鮮は、さきに明から援けられたのを恩とし、これになびいてゐたが、遂に和を太宗に請うた。太宗は、ついで、みづから將となつて、明を攻め、さらにまた

後七年由
井正雪の
隠謀露顯
す

内蒙古平定
朝鮮再征

明の滅亡

清北京に遷都す

鄭成功

内蒙古を平げ、二二九六年(明正天皇の御代、徳川家光時代)、國號を清とあらため、翌年再び朝鮮を征して、明と絶たしめ、且、清の封冊を受けさせた。

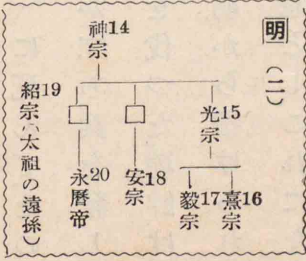
世祖の業 太宗の子世祖は、二三〇四年(後光明天皇の御代)に、また兵を出して、明に迫つた。明では、吳三桂をしてこれをふせがせたが、たまく

流賊李自成が北京をおとし、明をほろぼした。明では、吳三桂は、清軍をおとしいれて、明をほろぼした。明では、吳三桂は、清軍をむかへて降参し、ともに李自成を伐つて、これを走らせた。かくて、世祖は、難なく支那の北部を定める



ことを得、都を北京にうつし、ついで、辨髮の令を下して、滿洲の風俗に従はせた。

明の遺臣 明の遺臣等は、なほその王族を擁し、江南諸處に兵を擧げたが、結局、み



鄭成功の孤忠

明の遺臣わが國に歸化す

な敗れ、清は、遂に支那を一統した。ひとり鄭成功のみは、孤忠を守つて屈せず、力をつくして、明の恢復をはかり、後、臺灣に渡り、オランダ人を島外に逐つて、これを占領し、依然、清軍に抗した。また明の遺臣の中には、清につかへることをいさぎよしとせず、海を渡つて、わが日本に來朝歸化したものもあつた。朱之瑜及び僧隱元等は、即ちそれである。

鄭成功 鄭成功の父鄭芝龍は、かつてわが平戸に來り寓し、田川氏を娶つた。この田川氏が、即ち成功の母である。成功は、歸國の後、母をむかへて、奉養、甚だつとめたが、明軍が清軍と戦つて敗れた時、田川氏は、節に死んで、烈女の名をのこした。また成功は、明の王族から、その姓朱氏を賜はつたので、國姓爺と呼ばれてゐる。

第二章 聖祖 高宗 清露の交渉

聖祖の業 清の聖祖(世祖の子)は、清朝の基をかため成した大偉人であ

三藩の由来

聖祖



る。帝は、康熙帝（康熙は）とも稱し、六十餘年の久しい間、位にあつて、文勳武功、共にいちじるしい。この頃、雲南に吳三桂、福建に耿精忠、廣東に尙之信といふものがあつた。この三人は、いづれも明の降將、またはその子孫で、それ／＼廣大な封地を領し、その上、兵權をもにぎり、三藩と稱して、頗る勢力が強かつた。聖祖は、三藩の強大なるを憂へて、これを撤廢しようとしたので、三藩は、いづれも安からぬことに思ひ、二〇〇三年（靈元天皇の御代）、吳三桂が兵を擧げて反したのを手はじめとし、他の二藩も、ついで、これに應じて、反旗をかゝげた。かねて、清室に心服しない漢人等は、きそつてこれに與し、南支那は、久しくみだれたのであつたが、遂にみな鎮定された。これよりさき、臺灣の鄭成功は、既に死んで、その子をへて、その孫が、なほ臺南に據り、父祖の志

三藩の亂

この頃徳川家綱將軍たり

臺灣の鄭氏

臺灣服屬

聖祖の外征

モスコーの獨立

ロシア人の東進

ネルチンスク條約

高宗

この頃徳川綱吉將軍たり

前年足利義輝將軍となる

を守つてゐたが、聖祖は、三藩の亂を平げた後、これを降して、臺灣を取り、ついでまた親征して、外蒙古を併せ、また青海地方をなびかせ、さらにチベットをも従へた。

ロシア人の東進

またロシアでは、明の中世頃に、モスコー大侯が勃興して、キプチャク國をうちほろぼし、二〇〇七年（明の世宗の御代）はじめてロシア皇帝と稱した。爾後、ロシア人は、しだいに東進して、シベリヤを略し、明末以來、滿洲北部にあらはれ、清代に至つては、しばしばこれと境界上の争をひき起した。よつて、聖祖は、ロシアに交渉し、二〇九年（東山天皇の元祿二年）、遂にネルチンスク（尼布楚）條約を結び、外興安嶺及びアルダン河を以て兩國の境界と定め、ロシア人の南下をふせいだ。



高宗の晩年に徳川家齊將軍となる

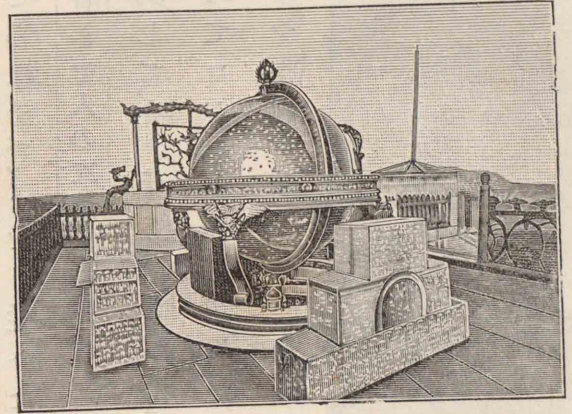
高宗の英明

外征

フェルピーストが造つた天體儀

康熙乾隆二代の極盛

大部の書籍發行



とのつて、政治がよくゆきとゞき、學術の研究も、大いに進み、康熙字典その他有益な大部の書物が、續々刊行された。康熙帝は、また西洋

高宗の業 聖祖の孫高宗は、乾隆帝（乾隆は）とも稱し、その在位の長きこと、ほとんど聖祖に同じく、英明なることも、聖祖についてある。帝は、天山南北兩路を定め、またバルマを攻め降し、シヤム・安南等と共に、それぞれ清の封冊を受けさせ、またネパールをも伐つて、これを降した。こゝに至つて、清の領土は、そのひろきこと、漢唐の盛時にもまさつた。

清の極盛 かくの如く、康熙乾隆二帝の時代は、國威が大いに外にあがつた上に、内に於ても、もろゝの制度がと

の學術にも注意し、ベルギーの宣教師フェルピースト（南懷）を信任し、これを北京の觀象臺副長とした。

フェルピースト フェルピーストは、ゼスイト教團の宣教師で、世祖の末年に支那に來り、ついで聖祖に用ひられて、曆政に盡力し三藩の亂の時には、大小の砲を鑄て功があつたが、二三四七年（徳川綱吉が生類憐みの令を發した年病にかゝり、翌年遂に北京で死んだ。天文・地理に關する著書が多くある。

第三章 鴉片の役

イギリス人の印度經略と戰役の原因

イギリス人は、明末以來、マドラスを根據として、印度經略の事に當り、しだいにポルトガル人及びオランダ人を壓倒し、乾隆の頃には、フランス人との競争にも勝つた。かくして、イギリス東印度會社は、著々その勢力を印度に扶植し、

滿(一)
太祖—太宗—世祖—聖祖—世宗—高宗
2276

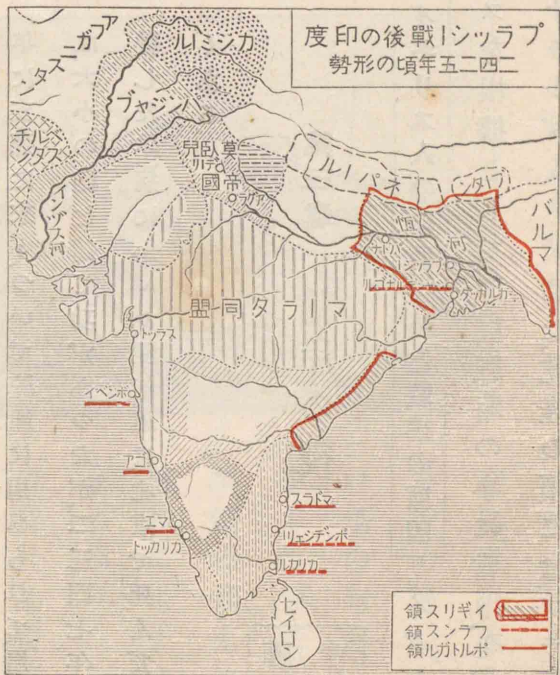
印度經略の成功

イギリス人の支那貿易と阿片輸入

鴉片輸入の結果

鴉片輸入の禁

林則徐の處置



人スリギイリ起に年七一四二は戦の1シッラフ
てつ破を軍合聯の人度印人スラフがゾイラク
るあでのもため定を礎基の度印領スリギイ

たびく厳令を下して、これが輸入を禁じた。しかるに、この禁令は、容易に行はれず、かへつて、ますます密輸入を盛んにし、高宗の孫宣宗の時には、輸入總額三萬餘函の多きにのぼつた。そこで、宣宗は、林

進んで支那貿易の擴張をもはかり、清國政府の特許を得て、盛んに印度に産する鴉片を廣東に輸入した。清國人は、大いに鴉片をたしんで、その心身を害し、經濟上にも、また甚だ憂ふべきものがあつたので、清國政府は、

イギリス軍の連勝

林則徐

イギリスの態度

鴉片喫煙所内部の光景



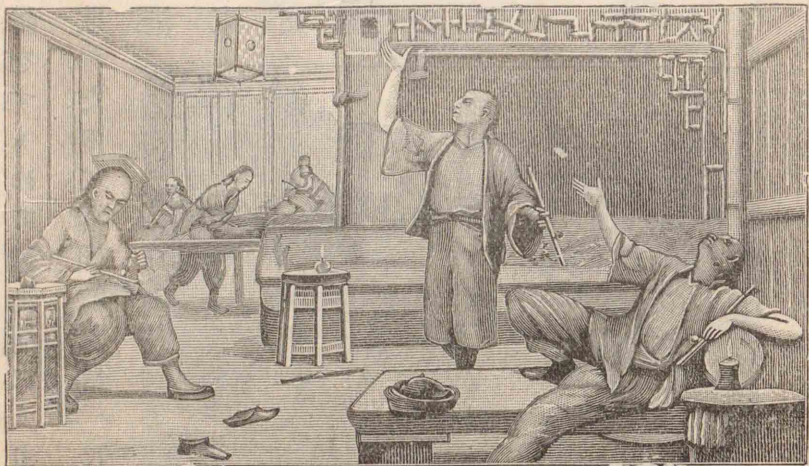
清(二)

高宗⁶—仁宗⁷—宣宗⁸—文宗⁹—穆宗¹⁰

則徐を廣東に遣はして、斷然たる處置をな

さしめ、イギリス人の密藏してゐた鴉片二萬餘函を沒收して、これを焼きすて、遂にその通商を禁じさせた。戦役の顛末 イギリスでは、貿易保護のために、いよく起つて、清國を

伐つこととし、船艦を派して、舟山島を占領し、廣



南京條約

各國の通商條約
締結

林則徐が鴉片を沒收する所

モゴル帝國滅亡

西南の役

江戸幕府
外國船打
拂令を弛
む

東・厦門・寧波等を封鎖、攻撃させ、別に艦隊をすゝめて、渤海灣に入り、白河口に迫らせた。清軍は、戦ふごとに敗れたので、清國政府は、遂に南京に於て和約を結び、償金を出し、香港を割譲し、上海・寧波・厦門・福州(福建省)・廣東の五港を開くこととした。これが即ち支那の開國で、二五〇二年(宣宗の道光二十二年)の事である。この後、清國と西洋諸國との間に、相ついで通商條約が結ばれ、國際關係はいよゝゝ密接してきた。

イギリス領印度 またイギリスは、南京條約締結の後十五年に、モゴル帝國皇帝を廢し、ついで東印度會社の政權を收めた。

かくて、二五三七(清の德宗の世、明治十年)になつて、女王ヴィクトリヤは、印度



イギリス王印度皇帝となる

洪秀全廣西に起る

賊名の由来

洪秀全が發行した貨幣

洪秀全

後二年ベ
リ一浦賀
に来る

皇帝の位を兼ねることとなり、後九年、また全くバルマを併せて、印度の一州とした。

第四章 長髮賊 英佛軍の侵入

長髮賊

清は、鴉片の役に失敗して、大いに威信を内外に失つたので、洪秀全といふものが、その末運を察して、兵を廣西に擧げ、滅滿興



漢をとなへて、漢人の心を取り、またキリスト教を利用して、外人の意をむかへ、二五一一(文宗の咸豐元年、孝)年、國號をたてて、太平天國とし、みづから天王と稱した。世にこれを長髮賊といふのは、その徒が、みな清の風俗にそむいて、髪をそることをやめたからである。



洪秀全南京に據る

曾國藩

曾國藩李鴻章義勇兵を起す

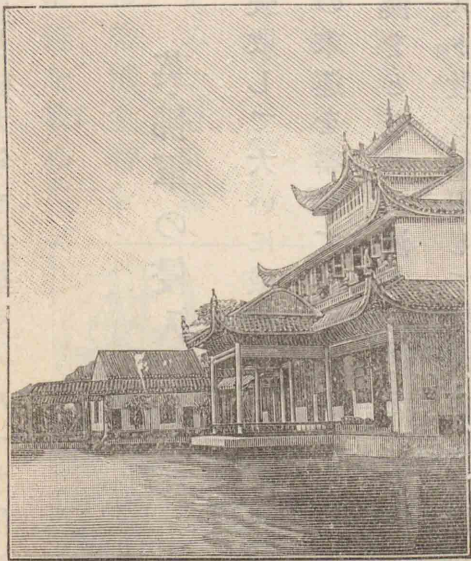


を破つたが、たまくイギリス・フランス二國との紛議が起つて、清國政府は大いに苦しんだ。

紛議の原因

曾國藩の祠の一部

英佛軍の侵入 この紛議の原因は、廣東の清國官吏がイギリスの國旗を立てた商船内には入つて、有罪の



あに沙長省南湖で邸の藩國會とも會りなと校學女は今は物建のこるるみてし營經をれこが女孫の藩國

賊勢

はじめは、賊勢が、頗る盛んで、破竹の勢を以て、江南を席卷し、遂に南京を取つて、これに據り、進んで江北をも侵した。やがて、曾國藩、李鴻章等の名士が、義勇兵をおこし、賊軍を伐つて、これ

李鴻章



英佛軍の連勝

ロシア公使の調停

この年櫻田の變あり

イグナチエフ

北京條約

おとし、進んで白河には入つた。清國政府は、内亂のために、力を外事につくすことが出来ず、狼狽して和を講じたが、たちまちまた破れ、聯合軍は、遂に北京に侵入して、これを



北京條約

おとし、いれた。やがて、ロシアの公使イグナチエフの周旋により、一八六〇年（文宗の咸豐十年、孝明天皇の萬延元年）清國は、イギリス・フランスと北京條約をむすび、償金を出し、

うたがひある清國人をとらへたことと、廣西に於て、清國人がフランスの宣教師を殺害したことにある。この二件に關する清國政府の處置が、宜しきを得なかつたので、イギリス・フランスの聯合軍は、廣東を攻め

ゴールドン

賊勢再振

洋槍隊

洋槍隊成る

ゴールドンの功



賊の平定

長髮賊は、この外患（ライクラ）に乗じて、

一層、勢を高めたが、北京條約の成つた後、上海在留の外國人等が主となつて、洋槍隊を組織し、やがて、イギリス人ゴールドンを以て、その將とし、李鴻章等と力をあはせて、しばく奇勝を制した。この頃に至つて、官軍も、またしだいに

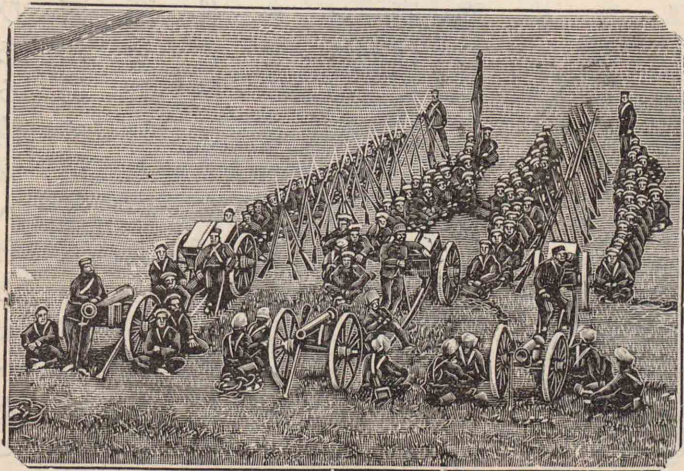
長髮

した。

を約

こと

キリスト教の布教をゆるし、牛莊（ニハク）漢口（湖北省夏口縣）以下七港を開く等の



長州征伐
はじまる

南京の陥落と兵
亂鎮定

勢を得、遂に大舉して、南京をかこみ、（二五二四年）（（穆宗の世、孝明天皇元治元年））これを
おとし、いれて、洪秀全を平げ、十五年にわたつた大亂も、こゝに全く
定まつた。

◇ゴールドンの人物　ゴールドンは、イギリスの工兵士官である。二五二三年
以來、洋槍隊の將となり、十六箇月の間に、三十三戦を重ね、赫々たる武功を
たてた。清國政府は、その功勞にむくいるために、多額の金を贈つたが、ゴル
ドンは、かたく辭して、一錢をも受けなかつた。その故郷への通信の一節に、
「余は、支那に來た時と同じく、貧困で支那を去つた」と書き送つたといふこ
とである。ゴールドンのごときは、世にめづらしい高潔の人といふべきであ
る。

第五章　ロシアの滿洲及び中央

アジヤ經略

ロシアの東略

ロシアは、ネルチンスク條約によつて、一時清國に

カムチャッカその他の略取

ムラヴィヨフ

愛琿條約

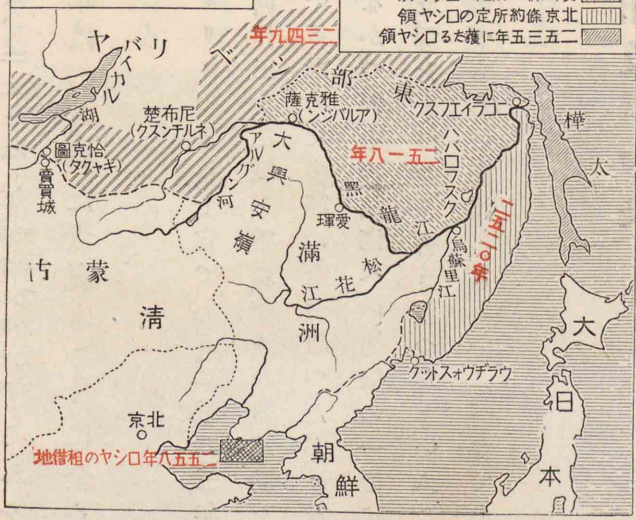
讓歩する所があつたが、その後、久しからずして、カムチャッカをとり、ついでアラスカを略し、樺太をおかし、千島及び蝦夷にもあだして、わが江戸幕府を驚かしたのであつた。また東部シベリヤ總督ムラヴィヨフは、清國が、長髮賊の内亂と、イギリス・フランスの外患とにくるしんでゐるのに乗じ、境



正の界改
事をこれ
に迫

り、二五―八年(清の文宗の安政五年、孝明、
愛琿條約を結び、黒龍江を以て

略東のヤシロ



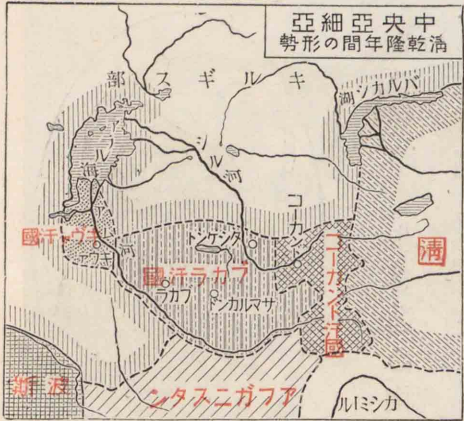
女少の州滿 (しべる見を等裝服飾髮の人婦州滿)

井伊直弼 假條約に 調印す

烏蘇里江東割取

千島樺太交換

中央アジアの三汗國



その境界とした。ついで、ロシアは、イグナチエフの講和斡旋の功を利用して、清國をして烏蘇里江東の地を割かせ、やがて、その南端にウラヂウオストックをたて、これを極東に於けるロシアの根據地とし、後さらに千島を日本にゆづつて、樺太全島をその有とし、ほとんど全く北部アジアの地をその手ににぎつた。

ロシアの中央アジア侵略

またロシアは、中央アジアを占領して、印度洋方面に進出しようとはかつた。中央アジアは、チムールの死後、興敗つねなく、明の中世以來、キヴァンカラ・コーカンドの三汗國に分れて、相争つてゐた。ロシアは、はやく大遠征隊を派遣して、キルギス及びキヴァ地方の探検をこゝろみさせ、

キルギス族

戊辰の役

三汗國の末路

中央アジアに於けるロシアの遠征隊

回教徒の亂



その後も、たえずこの地方をうかゞひ、遂に全くキルギス種族を従へて、キヴァに接近

し、二五二八年

(清の穆宗の世、明治元年)

以來、ますます

すその侵略の歩を進め、相ついでブカラ・キヴァを保護國とし、またコーカンドを従へた。こゝに於て、ロシアの領域は、南、アフガニスタンに接し、東、山嶺をへだてて、支那と對し、しぜん、イギリス及び清國と紛議をかもすやうになつた。

イリ事件

この頃、天山南路の回教徒が亂



兒二のそと人美のラカブ

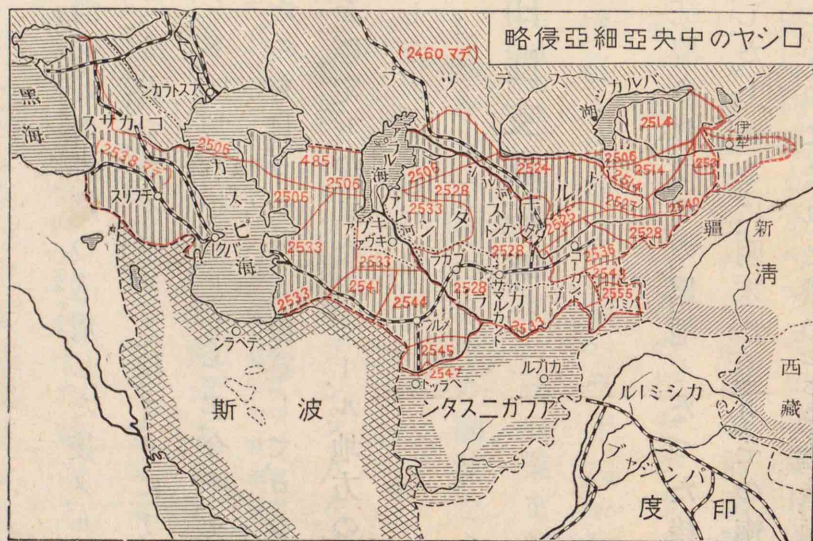
ブカラ婦人の風俗を見るべし

ロシアのイリ占領

清國天山南路を平ぐ

事件の落着

を起し、イリ(伊犁)地方の同教徒、もこれに應じて、また動搖した。ロシアは、國境安寧のためと稱し、二五三一年(清の穆宗の世、明治四年)兵をイリに出して、これを占領した。清國にても、連年兵を用ひて、遂に全く天山南路を平げ、さてロシアに向つて、イリの返還を求めた。ロシアは、言を左右に託して、これに應ぜず、兩國間の平和は、將に破れようとしたが、雙方、たがひに譲りあひ、二五四一年(清の德宗の世、明治十四年)清國は、償金を出し、ロシアは、コルゴス河(イリ河の支流)以東



ロシアの南下

イギリスの對抗策

パミール問題並にその境界確定

大越と廣南

の地を還付して、その局を結んだ。

イギリス・ロシアの紛議

ロシアは、清國との紛議の落着いた後、メルフをとり、進んでアフガニスタンには入つた。イギリスは、さきにあフガニスタンを保護國として、ロシアに當ることとしたが、今やその南進の勢が、ますます迫つて來たのを見、ロシアと協議して、ロシア領とアフガニスタンの境界を確定し、後またパミール地方の境界につき、ロシアとこれを議定した。

第六章 フランスの印度支那經略

清佛戰爭

越南の建國

安南は、明の成祖に征服されて、その屬地となつた後、ほどなく獨立して、國を大越と號した。しかるに、明末に至り、その南部に廣南國が起つて、大越と對立し、つねにこれと争つてゐた。後、兩

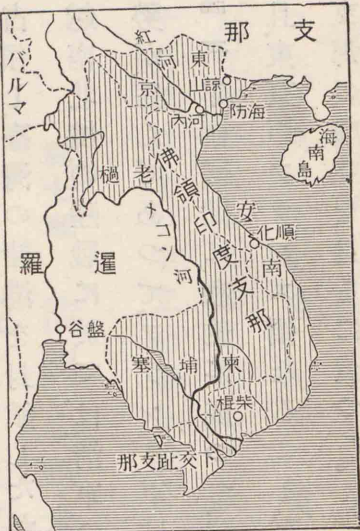
蝦夷奉行を函館奉行と改む

阮福映の一統

越南

フランスと越南との紛争

フランス、カンボヂヤを保護國となす
フランス越南を保護國となす



て、越南と稱し、清の封冊をうけた。

フランスの印度支那經略

越南は、一統後、とかくにフランス人を喜ばず、遂にその宣教師を虐待したので、一八一八年（清の文宗の世、孝明、一八一八年）天皇の安政五年、フランスは、兵を出して、サイゴン（柴）を占領し、後四年、越南をしてその南部を割かしめ、且、償金を徴して、和を結んだ。ついで、フランスは、カンボヂヤ（柬埔寨）を保護國とし、一八四三年（清の德宗の世、一八四三年）が明治十六年、また越南と戦つて、その國都をおとし、いれ、ことごとく東京地方を讓與させ、且、越

清國の抗議

清軍敗残の
遺址

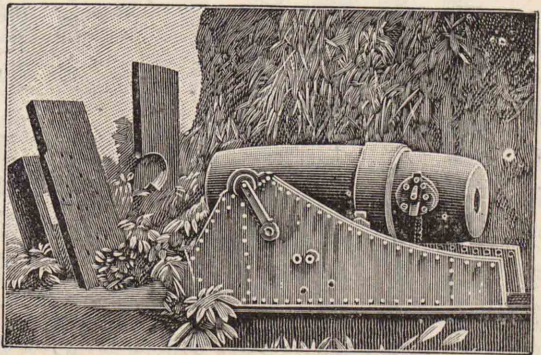
海陸の勝敗

和約

南を保護國とした。

清佛戦争

しかるに、清國は、越南王がかつてその封冊を受けたのを口實として、この講和に異議をとなへ、二五四年(明治十年)フランスと開戦した。この役、フランスの海軍は、清國艦隊を破り、澎湖島を占領し、臺灣の諸港を封鎖したが、越南北境の陸戦に於ては、清軍の勢が盛んであつて、フランス軍は、かへつて苦戦した。しかるに、二五四年、兩國間に和約が成つて、清國は、越南に對する權利を放棄し、且、東京のフランス領なることを承認し、遂に今のフランス領印度支那の成立を見るに至つた。



光緒十年六月十五日(明治十七年八月四日)佛國軍から九隻の艦隊を港に上陸し、臺南を攻撃し、砲臺を破壊した。佛軍は、臺南を占領し、臺南の砲臺を破壊した。佛軍は、臺南を占領し、臺南の砲臺を破壊した。

フランス、メコン河東の地を略す
イギリスとの協商

フランスとシムとの交渉

フランスは、またシムをおびやかして、メコン河東の地を略した。この頃、既にメコン河上流地方を領してゐたイギリスは、これに對して異議をとなへ、兩國領地の境界に幅五十英里以上の中立地帯を設けることとした。

第七章 清國と歐米列強との關係 清の

滅亡 支那共和國の建設

清國の衰勢

列強の壓迫

清國は、内外の多事に苦しんで、國運がだん／＼かたむいたが、明治二十七八年の日清の役に於て、さらにその弱點を暴露したので、列強は、にはかにその壓迫をたくましくし、爾後、數年の間に、ドイツは膠州灣を、ロシアは大連灣地方と旅順口とを、イギリスは威海衛を、フランスは廣州灣を租借した。その頃、アメリカ合衆國も、ハワイを併合し、またイスパニヤと戦つて、フィリピン諸島を併

列強の租借

米國の勢力伸張

國政革新の企圖

西太后の政策

義和團蜂起

聯合軍の救援

講和

ロシアの經營

せ、しだいに力を東洋及び南洋方面にのばさうとして來た。

北清事變

時の清國皇帝德宗は、熱心國勢を挽回することをと

め、康有爲を用ひて、政治の革新をはかつたが、たまく西太后が政

をきくこととなり、改革黨をしりぞけて、専ら保守排外を事とした

ので、西教撲滅外人排斥を目的としてゐる義和團といふ暴徒が、こ

の機に乗じて、山東省に起り、二五六〇年(明治三十三年)北京に亂入して、列

國公使館を圍んだ。そこで、日英米佛露獨澳伊諸國は、相聯合して兵

を出し、遂に北京を攻めおとし、各公使以下を救つた。この

騒亂の間に、德宗と西太后とは、難を西安府(陝西省長安縣)にさけ、李鴻章等

をして列國と和を講ぜしめ、償金を出し、且、罪を謝して、その局を結

んだ。

日露の役と韓國併合

この事變に際して、兵を滿洲に入れたロシア

は、事定まつて後も、容易にこれを引きあげず、かへつて、ますますそ



西太后

西太后は、文宗の妃である。文宗の死後、およそ五十年の間、國政に關與し、内外多事の際に處して、よく人材をすべ、政治家的才略を發揮したので有名である。

の經營の歩を進め、さらに手を韓國にまでのばした。しかるに、二五

日英同盟

克徳林記念
門牌

日露の役

韓國併合

六二年(明治十五年)清韓二國の領土
1902
保全及び東洋平和を目的とし
た日英同盟が成り立つたので、
ロシヤも、いさゝかこれに憚る
所があつて、滿洲から撤兵すべ
きことを清國に約束したが、誠
實にこれを履行しなかつたた
めに、日本と明治三十七八年の
役をひき起して大敗した。その
結果、韓國は、日本の保護國とな
り、旅順口及び大連灣地方の租
借權も、日本に讓與されたが、その後五年、日本は、遂に韓國を併合し



義和團の亂にツイド公使爵・トッケ・ルゲが殺されしと、清國は賠償金を外にツイド公使の命をおとし、地敷にその事蹟を記し、謝罪の的として、克徳林記念門牌とし、稱するもの建設すところなりと、これを實行したし

清國の自覺

た。

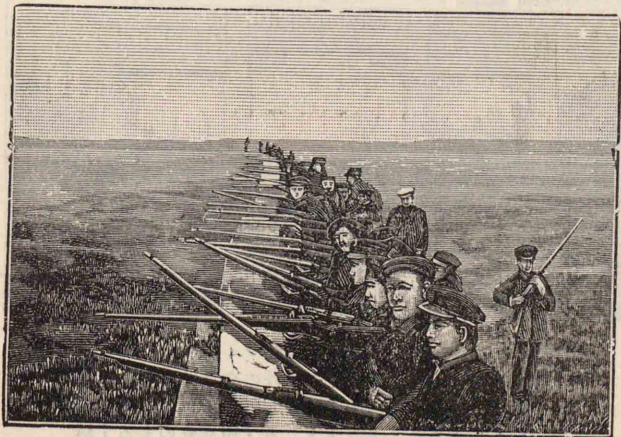
清室の滅亡

義和團の亂後、清國は、ますますカクセイ覺醒する所があつて、日本その他の國々に多數の留學生を派遣し、その文物制度を學ばせた。かくて、二五六年1861（明治四年）に、西太后及び徳



Sun Yat-sen

宗が 相つ いて 死ん で 幼 年の



宣統帝セントウが立つた後も、當路の人々は、銳意國政の改良につとめ、わが日本にならつて、立憲政治を行はうと

革命軍

孫文

宣統帝立つ

革命軍勃發

宣統帝退位

孫文臨時大總統
となる

袁世凱

袁世凱臨時大總統
となる

したが、滿洲政府に對して、不平をいだいてゐる革命派は、二五七年1871（明治四年）十月、急に兵を武昌ウシヤウに擧げた。清廷は、その影響がたちまち四方に波及して、全國的の動亂となつたのに驚き、急遽袁世凱シカイを總理大臣に任じて、時局を始末シマツさせようとしたが、事既におそく、翌年二月、宣統帝は、遂に帝位を退くこととなり、清朝は、こゝに亡びた。清は、太祖の即位から、こゝに至るまで、十二代二百九十七年である。

支那共和國

この前年、革命軍は、南京に據つて、中華民國新政府を

組織し、孫文（逸仙と號す）を推して、臨時

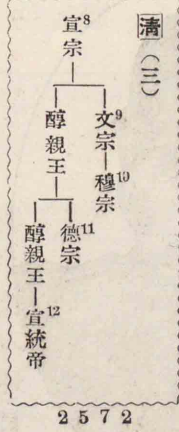
大總統としたが、今や、清帝が退位したので、孫文は、その位置を辭し、袁世凱が、これに代つて、臨時大總統の任に就き、北京に新政府を立てた。しかるに、袁世凱のなす所、必



支那共和國成立

ずしも革命派の満足する所とならず、ために第二の革命が勃發した。この動亂は、ほどなく鎮撫されて、二五七二年(大正元年)袁世凱は、國會に推されて、正式の大總統となり、支那共和國が、こゝに全く成立し、やがて列國の承認を得た。

第八章 支那の近狀



袁世凱の帝制運動

袁世凱は、既に大總統に當選したが、野心滿々たるかれは、これを以て満足せず、さらに皇帝の位にのぼらうとした。西南諸省、これに反對し、討袁軍が各地に起つたので、袁世凱も、遂に帝制運動を中止し、二五七六年(大正五年)六月、遂に病死し、副總統黎元洪が、これに代つて、大總統となり、帝制をとへたものを罰して、一時、平和となつた。しかるに、翌年、安徽省督軍張勳の復辟(宣統帝)運動が、突如として起り、共和政府も、一時たふれたが、段祺瑞等にうたれて、張勳は、

張勳の復辟運動

失敗した。

日獨開戦と日支交渉

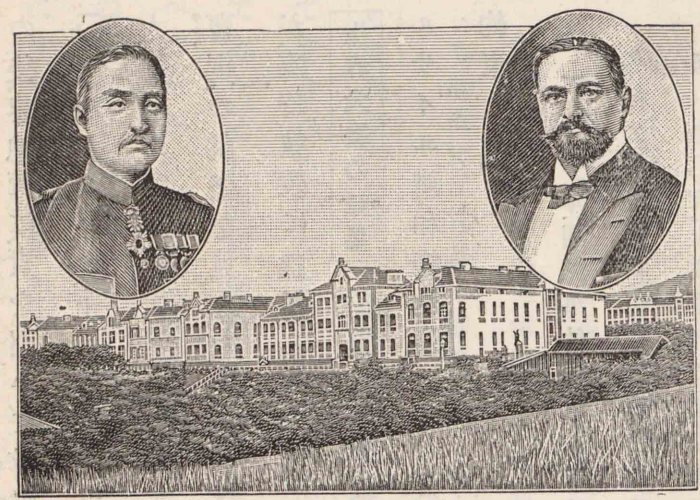
これよりさき、二五七四年(大正三年)に、ヨーロッパに

青島總督ワ
ルデック大佐

日支條約

モルトケ
兵營

攻圍軍司令
官神尾中將



クッデルワが將中尾神日十月一十年三正大は營兵ケトルモ
るあて所たし領受を他のそ藥彈器兵臺砲し會と佐大

大戰亂起るや、わが日本は、東洋平和維持のために、ドイツに對して戦を宣し、その十一月、青島を攻めおとし入れた。またわが國は、翌年五月、日支條約を結び、支那をして、遼東半島の租借期限の延長と、南滿洲及び東部蒙古に於けるわが優越權、及び、山東省に於けるドイツの利權をわが國に於て繼續する事などを承認させた。

支那近事

張勳の復辟運動失敗

大總統の更迭

段祺瑞の臨時執政

ヴェルサイユ講和

ヴェルサイユ講和條約の一節

の後、黎總統は、責を引いて辭職し、馮國璋がこれに代り、二五七七年(大正六年)八月、ドイツ・オーストリアに對して、戰を宣した。翌年、徐世昌が大總統の職に就き、ついで、黎元洪の復職をへて、二五八三年(大正十一年)曹錕の就任を見たが、翌年、また國內に動亂が起り、その結果、段祺瑞が、臨時執政に就任した。

世界大戰の結果

徐世昌の大總統在任中、二五七九年(大正八年)六月に、ヴェルサイユ講和條約が成り、その第四條に於て、ドイツは、左の件々を約束した。

一九一〇年、團匪事件議定書の結果、獲得せる一切の特權及び賠償金並に各種公共建築物(但し公使館建物及び特別規定なき領事館建物は、此の限りにあらず)を支那のために拋棄す。天津に於けるドイツ租界は、萬國の使用のために開放す。ドイツは、支那參戰の處置によるドイツ公私財産の損害に關する一切の要求權を拋棄す。

漢族と異種族との關係

日支親善の必要

日支親善の必要

ドイツは、一八九八年三月六日、支那と締結せる條約、その他山東省に關する各般の協定により獲得せる膠州につきての一切の權利、利益及び特權並に鐵道、鑛山及び海底電線を日本のために拋棄す。青島、濟南府間の鐵道、その枝線及び各種の附屬設備は、これに附隨する一切の權利及び特權、鑛山採掘權を含む)と共に、日本に歸屬するものとす。また青島、上海間及び青島、芝罘間の海底電信及び直接間接にこれに關聯して生ずる一切の利權も、無償にて日本に歸屬す。

從來、漢族を壓迫した周圍の異種族は、武力に於て、まさつた所があつたが、文化に於ては、つねに漢族よりもおとつてゐた。それ故、異種族は、武力を以てかれ等を征服したと同時に、かへつてかれ等の文化に征服されたのであつた。しかるに、今日、漢族の周圍より迫つてくるものは、武力に於ても、文化に於ても、はるかによつてゐる。これ支那が、文化の相類してゐる

武強の民族と、相頼り相たすけるのを必要とする所以である。支那の國民は、ふかく思をこゝに致すべきであらう。

概 括

近世期は明が亡びた二三〇〇年頃から現今に至るまでの間で、わが第百九代後光明天皇から、現今までの間に相當する。この期に於ては西力が盛んに東漸し、ロシアはシベリヤ及び中央アジアを略し、イギリスは印度、ブルマを併せ、フランスは印度支那半島を取り、ドイツ、オランダ、ポルトガル、アメリカ合衆國等の國々も、また或は前期に略取した地を守り、或は新たにその屬領地を占めた。この西人の東漸にともなつて、キリスト教をはじめ、天文、數學、地理等の西洋の學藝がまた支那に傳來したが、最近に至るまでは、なほさほどいちじるしい影響を漢文化の上に及ぼしてはゐない。

清國はこの期のはじめに、一時隆盛を極めたのであつたが、列強の壓迫と、内政の腐敗とによつて、國勢が日に月にかたむいた。日清の役後は、その衰弱が一層甚しくなつて、革命の旗が、一たび武昌に擧がるや、二百餘年、つゞいて來た女眞族の清朝は、容易にくつがへり、漢族を中心

とした共和政體の中華民國があらはれた。この中華民國は、創立以來既に十四年になるが、支那は、なほ國內の紛争になやんでゐる。

今やアジア大陸の過半は、既にヨーロッパ人の手に歸して、獨立強國の名と實と共に全きものは、たゞわが日本があるのみである。日支兩國國民は、古今の成敗、東西の興亡にかんがみて、ますます奮勵努力すべきである。

年表

(四) 年代は皇紀に據る

時代	國號	年代	(天皇)	重なる事蹟	(清帝)
	清	2276-2572			
世		二五〇四	(後光明)	都を北京に遷す	(世祖)
		二五〇八	(後西院)	モゴル帝アウランゼブ即位	(世祖)
		二五一一	(後西院)	鄭成功臺灣に據る	(聖祖)
		二五三三	(靈元)	三藩の亂起る	(聖祖)
		二五三四	(靈元)	フランス人ボンデシエリーを占領す	(聖祖)
		二五四三	(靈元)	臺灣清領となる	(聖祖)
		二五四九	(東山)	ネルチンスク條約成る	(聖祖)
		二五五六	(東山)	ズンガルを親征す	(聖祖)
		二五八〇	(中御門)	チベット清に降る	(聖祖)
		二四〇七	(櫻町)	金川を平ぐ	(高宗)
		二四一七	(桃園)	ブラッシーの戰	(高宗)
		二四三〇	(桃園)	回部平定	(高宗)
		二四六二	(光格)	阮福映の越南建國	(仁宗)
		二四九九	(仁孝)	林則徐の鴉片燒棄	(宣宗)
		二五〇〇	(仁孝)	鴉片の役起る	(宣宗)
		二五〇二	(仁孝)	鴉片の役の結果南京條約成る	(宣宗)
		二五〇七	(孝明)	ムラヴィエフ東部シベリヤ總督となる	(宣宗)
		二五一〇	(孝明)	長髮賊起る	(宣宗)
		二五二七	(孝明)	英佛聯合して清と開戦す。モゴル帝國亡ぶ	(文宗)
		二五二八	(孝明)	愛理條約成る	(文宗)
		二五二九	(孝明)	フランス、サイゴンを占領す	(文宗)
		二五三〇	(孝明)	英佛聯合軍北京を陥る。ロシア烏蘇里江東の地を得	(文宗)
		二五三三	(孝明)	カンボヂヤ、フランスの保護國となる	(穆宗)
		二五三四	(孝明)	長髮賊の亂平ぐ	(穆宗)
		二五二八	(明治)	ブカラ、ロシアの保護國となる	(穆宗)
		二五三一	(明治)	ロシア人イリを占領す	(穆宗)
		二五三三	(明治)	キウフ、ロシアの保護國となる	(穆宗)
		二五三五	(明治)	千島樺太交換	(德宗)
		二五三六	(明治)	コーカンド汗國、ロシアに滅ぼさる	(德宗)
		二五四一	(明治)	イリ條約成る	(德宗)
		二五四三	(明治)	越南、フランスの保護國となる	(德宗)
		二五四四	(明治)	清佛開戦	(德宗)
		二五五三	(明治)	フランス、メコン河東の地を略す	(德宗)
		二五五四	(明治)	日清開戦	(德宗)
		二五五五	(明治)	パミール問題解決	(德宗)
		二五五七	(明治)	獨逸膠州灣を占領す	(德宗)
		二五五八	(明治)	獨逸英三國、清の港灣を租借す	(德宗)
		二五五九	(明治)	フランス、廣州灣を租借す。義和團の亂起る	(德宗)
		二五六二	(明治)	日英同盟成る	(德宗)
		二五六四	(明治)	日露開戦	(德宗)
		二五六八	(明治)	德宗及び西太后死す	(宣統帝)
		二五七〇	(明治)	日韓の併合	(宣統帝)

年表

(四)

年代は皇紀に據る

時代

國號

年代

(天皇)

重なる事蹟

(清帝)

近

清

2276—2572

世

支那共和國

—2573

二三〇四	(後光明) 都を北京に遷す	(世祖)
二三一八	(後西院) モゴル帝アウランゼブ即位	(世祖)
二三三一	(後西院) 鄭成功臺灣に據る	(聖祖)
二三三三	(靈元) 三藩の亂起る	(聖祖)
二三三四	(靈元) フランス人ボンチネリーを占領す	(聖祖)
二三三三	(靈元) 臺灣清領となる	(聖祖)
二三三三	(靈元) フランス人ボンチネリーを占領す	(聖祖)
二三四三	(靈元) 臺灣清領となる	(聖祖)
二三四九	(東山) ネルチヌク條約成る	(聖祖)
三三五六	(東山) ズンガルを親征す	(聖祖)
三三八〇	(中御門) チベット清に降る	(聖祖)
三四〇七	(櫻町) 金川を平ぐ	(高宗)
三四一七	(桃園) ブラッシーの戰	(高宗)
三四二〇	(桃園) 回部平定	(高宗)
三四六二	(光格) 阮福映の越南建國	(仁宗)
三四九九	(仁孝) 林則徐の鴉片燒棄	(宣宗)
三五〇〇	(仁孝) 鴉片の役起る	(宣宗)
三五〇二	(仁孝) 鴉片の役の結果南京條約成る	(宣宗)
三五〇七	(孝明) ムラウイエフ東部シベリヤ總督となる	(宣宗)
三五一〇	(孝明) 長髮賊起る	(宣宗)
三五二七	(孝明) 英佛聯合して清と開戦す。モゴル帝國亡ぶ	(文宗)
三五二八	(孝明) 愛理條約成る	(文宗)
三五二九	(孝明) フランス、サイゴンを占領す	(文宗)
三五三〇	(孝明) 英佛聯合軍北京を陥る。ロシヤ烏蘇里江東の地を得	(文宗)
三五三三	(孝明) カンボヂヤ、フランスの保護國となる	(文宗)
三五三六	(孝明) 長髮賊の亂平ぐ	(穆宗)
三五四一	(孝明) プカラ、ロシヤの保護國となる	(穆宗)
三五四三	(明治) ロシヤ人イリを占領す	(穆宗)
三五四四	(明治) キヴア、ロシヤの保護國となる	(穆宗)
三五四三	(明治) フランス、メコン河東の地を略す	(穆宗)
三五五三	(明治) 清佛開戦	(德宗)
三五五四	(明治) 日清開戦	(德宗)
三五五五	(明治) 日清開戦	(德宗)
三五五七	(明治) パミール問題解決	(德宗)
三五五八	(明治) 獨逸膠州灣を占領す	(德宗)
三五五九	(明治) 獨逸英三國、清の港灣を租借す	(德宗)
三五六二	(明治) フランス、廣州灣を租借す。義和團の亂起る	(德宗)
三五六四	(明治) 日英同盟成る	(德宗)
三五六八	(明治) 日露開戦	(德宗)
三五七〇	(明治) 德宗及び西太后死す	(宣統帝)
三五七一	(明治) 日韓の併合	(宣統帝)
三五七二	(明治) 革命軍起る	(宣統帝)
三五七二	(明治) 清の滅亡	(宣統帝)
二五七二	(明治) 中華民國起る	
二五七三	(今上) 袁世凱大總統となり支那共和國成立す	
二五七四	(今上) 歐洲戰亂起る。日獨開戦	
二五七五	(今上) 日支條約成る	
二五七六	(今上) 袁世凱死し黎元洪大總統となる	
二五七七	(今上) 支那獨逸二國に宣戦す。張勳の復辟運動失敗	
二五八四	(今上) 段祺瑞臨時執政に就任す	

文部省檢定 高等女子學校歷史教科用 大正十五年一月二十六日

大正十四年十一月十五日發行
 大正十五年一月十五日發行
 大正十六年一月十五日發行
 大正十七年一月十五日發行
 大正十八年一月十五日發行
 大正十九年一月十五日發行
 大正二十年一月十五日發行
 大正二十一年一月十五日發行
 大正二十二年一月十五日發行
 大正二十三年一月十五日發行
 大正二十四年一月十五日發行
 大正二十五年一月十五日發行
 大正二十六年一月十五日發行
 大正二十七年一月十五日發行
 大正二十八年一月十五日發行
 大正二十九年一月十五日發行
 大正三十年一月十五日發行
 大正三十一年一月十五日發行
 大正三十二年一月十五日發行
 大正三十三年一月十五日發行
 大正三十四年一月十五日發行
 大正三十五年一月十五日發行
 大正三十六年一月十五日發行
 大正三十七年一月十五日發行
 大正三十八年一月十五日發行
 大正三十九年一月十五日發行
 大正四十年一月十五日發行
 大正四十一年一月十五日發行
 大正四十二年一月十五日發行
 大正四十三年一月十五日發行
 大正四十四年一月十五日發行
 大正四十五年一月十五日發行
 大正四十六年一月十五日發行
 大正四十七年一月十五日發行
 大正四十八年一月十五日發行
 大正四十九年一月十五日發行
 大正五十年一月十五日發行
 大正五十一年一月十五日發行
 大正五十二年一月十五日發行
 大正五十三年一月十五日發行
 大正五十四年一月十五日發行
 大正五十五年一月十五日發行
 大正五十六年一月十五日發行
 大正五十七年一月十五日發行
 大正五十八年一月十五日發行
 大正五十九年一月十五日發行
 大正六十年一月十五日發行
 大正六十年一月十五日發行



本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送本可致候

著者 東京市豊島區池袋三丁目一三四五番地 峯岸米造
 發行者 東京市神田區通神保町六番地 上原才一郎
 發行所 東京市神田區通神保町六番地 光風館書店
 印刷者 東京市神田區通神保町六番地 山崎與吉

定價金八拾四錢

女子東洋史教科書

半表

中華民國十一年一月二十六日

本館承印各種中西文字及各種簿據
印刷精美交貨迅速
地址：上海英大馬路



明倫堂

廣雅

卷一

卷二

卷一
卷二
卷三
卷四
卷五
卷六
卷七
卷八
卷九
卷十
卷十一
卷十二
卷十三
卷十四
卷十五
卷十六
卷十七
卷十八
卷十九
卷二十

上海英大馬路

明倫堂

三年二組
田坂



広島大学図書
2000065454

文庫
26
454